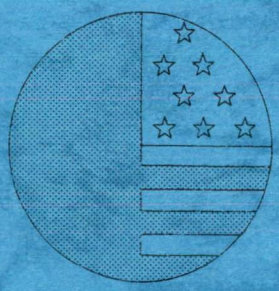
第40回

日米学生会議

築かれた日々をみつめて

——新たなる相互理解への模索——



1988

和　文　報　告　書

財団法人　国際教育振興会
第40回日米学生会議和文報告書作成委員会編

ま　え　が　き

1988年、日米学生会議は40回目という節目を迎えました。私たちは会議の総合テーマを「築かれた日々を見つめて－－新たなる相互理解への模索（Historical Reflections --- Creating Directions for Mutual Understanding）」と設定し、現在までの日米両国および日米関係の足跡、さらには54年前からの当会議の歩み自体にスポットを当てることによって、未来に向けての新たな一歩を踏み出すことを主眼としました。また、多岐にわたるトピックスを話し合う会議の様々な場面を通して、常に“歴史”の視点を保つことによって、今現在私たちの置かれている状況をよりよく把握しようという試みも、この総合テーマの一貫として参加者のあいだに定着しました。

会議は成功裡に終わり、こうして報告書も完成しました。報告書の原稿に目を通し、今になってようやくこの総合テーマの個人的な結論めいたものが私自身の中で形づくられつつあります。それは、私たちは確かに時代の節目に立っているということです。当会議は、そもそも満州事変後の悪化しつつある日米関係を憂慮する学生によって始められ、戦争による中断などを通じて常に円満な日米関係を築くことや、そのための学生の役割といった問題を会議の全般的な主題と捉えつづけてきました。なぜ私たちが“日米”学生会議をやるのかという答えも、常にここに存在していたわけです。

ところが昨今、特に今回の会議では、もはや「日本は…」「アメリカは…」というもの言いが会議中あまり聞かれなくなりました。これは何といっても、近年日米関係が非常に安定していることが端的な理由として挙げられます。日米が互いに西側諸国のリーダーたる行動をとるべきであること、また経済のボーダレス化が進む中で互いの密接な依存関係は動かしようにないこと、の基本認識のもとでは、経済摩擦に代表される二国間のコンフリクトも非常にテクニカルな問題、あるいは高度に政治的な問題として処理され、学生の立場で発言できることはかなり限られたものになってきています。これを日米の会議参加者は半ば直感的に把握し、その結果、日本市場の開放性云々とか日米間のバーデンシェアリングの問題など、日米間の当面の問題については話し合う糸口、あるいは必要性をあまり見い出せなくなっているのが現状です。すなわち、半世紀以上の伝統をもつ会議の、ひとつの基本的な枠組自体が改めて問い直されているのです。

といっても、決して会議の存在意義が薄れ始めているというわけではありません。制約のない立場から自由に発言できる学生が集まり、世界的な展望をもって相互理解と信頼関係樹立を目的に会議を開くという会議の継続的な根幹に変化はありません。日米学生会議は日米“学生”会議でもあり、日米学生“会議”でもあるのです。そればかりか、会議は互いに理解する場としてだけでなく、共に何かを創り出す場として動き始めつつあります。それは、個々の参加者が、文化の違いを踏まえながらも、日本人、アメリカ人といった立場を超えて、いわば個人の内面から沸き上がってくる叫びを発し、それを集めて形にすることで新たな一歩とするような、そんな場です。会議中人権や教育といったトピックに参加者の多くがひきつけられたことは、この端的な表れと捉えられるでしょう。この傾向が今後続くかどうかはまだ未知数ですが、このような新しい方向性の萌芽をこの報告書から汲み取っていただけたらと思います。

最後になりましたが、今回の会議も、実に多くの方々のご理解とご協力を賜りました。この場で厚くお礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

第40回日米学生会議実行委員長　今田　克司

目　　次

まえがき …… (i)
目　　次 …… (ii)
第40回JASCの代表諸君へ …… 板橋並治 …… (iv)

第1部　総括報告
日米学生会議の沿革 …… 3
第40回会議の概略 …… 4
日　　程 …… 11
第40回会議参加者 …… 12

第2部　会議報告
全体プログラム
ダラス
ホームスティ …… 15
開会式 …… 16
テーマディスカッション …… 17
アメリカナイト …… 18
平和と安全保障フォーラム …… 20
ジャパンナイト …… 22
農場見学 …… 24
アトランタ
ふるさとコロキアム …… 26
ホストファミリーとの夜 …… 27
人権フォーラム …… 27
JLC（ジャパニーズ・ランゲージ・サークル） …… 30
アトランタ・ベルサウスの昼食会 …… 31
キャンプ（ノースカロライナ州ブローイングロック） …… 33
ワシントンDC
民主主義フォーラム …… 36
クリフトン・バーベキューパーティー …… 39
アレキサンドリア・レセプション …… 39
国務省 …… 40
40回記念レセプション …… 41
海外プレスセンター …… 42

日本大使館 …… 43
フィラデルフィア
ベルアトランティックの昼食会 …… 45
ヒーローコロキアム …… 46
宗教フォーラム …… 47
男女コロキアム …… 50
総括会議（Reflection Meeting） …… 51
ニューヨークツアー …… 52
閉　会　式 …… 53
分　科　会
科学と社会 …… 54
教　　育 …… 57
言語とコミュニケーション …… 60
国際関係 …… 62
国際ビジネスと経済 …… 65
個人と社会 …… 68
政治と社会 …… 71
哲学と芸術 …… 74
歴史と文化 …… 77
若者と時代 …… 80

第3部　準備活動報告・エッセイ
準備活動報告
実行委員会活動記録 …… 84
準備期間～関東編～ …… 86
準備期間～関西編～ …… 87
エッセイ
IT'S ALL RIGHT …… 岡田　治 …… 89
私にとってのJASC …… 長谷川　智可 …… 90
Me and My JASC …… 新田　陽子 …… 92
早すぎた朝 …… 鈴木　康弘 …… 94

主催・後援・賛助団体 …… 97
第41回日米学生会議のお知らせ …… 99

第４０回ＪＡＳＣの代表諸君へ

国際教育振興会理事長
日米学生会議創立委員　板　橋　並　治

米国南部のダラス市で開かれた第４０回日米学生会議（ＪＡＳＣ）の開会式で，第１回会議が学生によって実現されたいきさつと，その後の経過について話す機会を与えられたことは，私にとり大きな喜びであった。

本当を言うと，私は毎年この会議を心待ちにしている。なぜなら，新しい代表諸君に会うことによって，私も会議の代表になった様な気分になり，心の若返りの機会を得るからである。これも第１回会議に参画して以来，今日まで５４年間，会議と深い係わりを持ち続け得たからかも知れぬ。

会議実現への活動が始まったのは１９３３年の春である。青山学院の中山公威君の提唱で，都内の大学ＥＳＳの有志が集まり，国際問題について語り合ったのが発端である。

１９３１年の満州事変以来，米国の対日感情が悪化しつつあったにも拘らず，政府は何ら有効な緩和策を講じていないと考えた我々は，学生として何をなすべきか，何が出来るだろうかと話し合った。その結果，米国の学生５０名を招き，会議の場でお互いに卒直な意見を交換して相互理解と信頼を促進し，それによって両国の友好関係を確立すべきであるという結論に達した。これは「世界の平和は太平洋の平和に，太平洋の平和は日米の友好関係にかかっている」という考えに基づいていた。

会議の実現に先ずなすべきことは，米国代表の滞日費を確保することにあったので，募金運動を始めたが，大企業の幹部の方々にお願いすると，いずれも「それは素晴らしい計画だが…」と「だが」で終ってしまった。

素晴らしいと考えるのに，なぜ援助してくれぬのだろうと，色々模索した結果「学生の分際で５０名の学生を招くなんて到底不可能だ」と考えたに違いないという結論を得た。そこで，我々学生の力を証明するため，対米学生親善使節を派遣し，５０名の学生を連れて帰る以外に手はないという考えから，１９３４年の春４名の学生が横浜を出港した。

全く初めての海外旅行であり，また米国の大学についての情報も殆ど持っていなかった我々４名は，この重要な使命を果たせるだろうかと一抹の不安をもっていた。「若し５０名の学生を連れ帰らなかったら，腹切りものだ」と話し合ったことは今でも忘れられない。

しかし，最初に訪れたシアトルのワシントン大学で我々の計画を発表したところ，全く予想外の大きな反応に驚いた。この調子なら目標の達成は確実であると考え，委員長の中山君と早大の遠藤君が自信を持って募金運動を再開するため帰国した。慶大の田端君と明大の私が残り，彼は太平洋岸，私は中西部から東部にかけて，それぞれ２０余りの大学を訪れた結果，二人で総計９９名の参加者（内２２名は大学教授及び夫人で，オブザーバーとして）を伴って帰国した。

こうして第１回会議は，両国から約１００名ずつの参加者を得て青山学院で開かれ，大成功を収めることができた。会議終了後，米国の代表及びオブザーバーの為に，関西，朝鮮を経て満州までの研修旅行を実施した。

その帰途，関釜連絡船上で米国の代表が集まり，日本の学生の創意と不屈の努力に報いるため，第２回会議を米国で開こうと決議し，実行委員を選んで帰国した。これは日本側委員が秘かに望んでいたことであるが。

こうして第２回会議はポートランドのリード・カレッジで開かれ，以来両国で毎年交互に開かれた。しかし１９４１年の夏米国で開かれることになっていた第８回会議は，日本側代表がヴィザを貰えなかったため，止むなく中断されてしまった。

１９４７年に学生の努力によって会議は復活されたが，当時日本は連合軍の占領下にあったため，米国の学生団体と連絡することも米国から学生を招くこともできなかったので，米軍人または軍属の中から大学生の資格のある者を代表に選んで，会議を開いた。

第８回，即ち偶数回の会議は米国で開かれることになっていたが，占領下の状態ではそれが出来ず，１９５３年の第１４回まですべて日本で開かれた。たまたま，その会議に戦後初めて米国から参加したコーネル大学の学生の提案で，第１５回会議が戦後初めて米国で開かれることになった。

当時は，太平洋横断の航空運賃を払えるような学生が少なく困っていたところ，米軍の軍用機の１５席が無料で提供されることになり，１４名の学生代表と監督１名が参加することになった。しかし会議には両国から５０名ずつ参加することになっていたので，参加できなかった３０余名の学生は，ＪＡＳＣを諦らめ，国際学生会議（ＩＳＣ）を開くことにした。こうしてＪＡＳＣは第１５回を最後に再び中断されることになった。

１９６３年に至り，翌１９６４年は第１回ＪＡＳＣの創立３０周年に当るので，会議を戦前の形で復活すべきであると考え，準備を

始めた。幸い日米両国の戦前ＯＢの協力，特に「一週間の会議運営費を保証してくれた」ポートランドのルーディ・ウイルヘルム君と当時経済企画庁長官であった宮沢喜一君（前蔵相）の援助で，第１６回ＪＡＳＣとして復活され，第２回会議が開かれた由緒あるリード・カレッジで開かれた。

若しこの復活がなかったら，今日ここで代表諸君と会うこともなかったであろうと考えると，会議の復活を可能にしてくれたこれら戦前のＯＢの協力に心から感謝しなければならぬ。１９６４年は，正にＪＡＳＣ再生の最も記念すべき年と言えるだろう。

今回，実行委員諸君が設定した「築かれた日々を見つめて――新たなる相互理解への模索」という総合テーマは，誠に我が意を得たものと言わねばならぬ。何故なら，彼らが第４０回を大きな節目と見なし，ＪＡＳＣの原点に帰ってその後の経過を辿り，慎重に検討することによって，ＪＡＳＣの将来を展望し，その正しい在り方を的確に把握しようという意欲が明らかであるからだ。

ここで，相互理解の真価，即ち如何に重要な価値を持つものであるかを体験した，１９７４年夏の出来事について触れて見ることにする。

１９７４年は会議の創立４０周年に当るので，米国のＯＢを招き東京で日米合同の祝賀会を開くべく計画していた。その夏ミネソタ大学で開かれることになっていた第２６回会議の開会式に出席する機会を利用し，できるだけ多くの戦前のＯＢに会い祝賀会に参加するよう勧誘する積りで手紙を出しておいた。

東京をたつ前に受け取った返事の中に，４名のＯＢから「ぜひうちに来て泊ってくれ」という暖かい便りがあった。彼らとは第１回会議以来４０年間も会っていない。その上，日米が戦うという不幸な事があった。それにも拘らず，このような心暖まる便りを貰ったことは，私にとり全く「嬉しい驚き」であった。その時初めて私は，相互理解と信頼によって結ばれた「友情の絆」が，如何に強いものであるかを，身にしみて感じた。

しかし，これは私たち日米の学生が会議で論じ合ったすべての問題について合意に達したということではない。いくつか合意に達し得なかった問題が残っていたことも事実である。それにも拘らず，お互いの違う考えを理解し認め合うことによって，信頼感が生れ，強い友情の絆が結ばれたものと言えるだろう。

言うまでもなく，相互理解の究極の目的は合意に達すること，換言すれば相互理解は合意への前提条件であると考えられている。しかし，相互理解が常に合意に達するとは限らぬという事実があることを考えて見ると，相互理解と合意とが同意語でないことが明白である。

では，相互理解とは何だろう？　それは，お互いに相手の考えをよく理解し合うこと，つまり相手の考えが違うものであっても，それなりに単に違う考えとして認め合うことである。しかし、この様な態度をとることは頗る難かしい。なぜなら，自分の考えと違うものは「誤った考えであり，到底受け入れられぬ」と言うような態度になりがちだからである。

従って，相互理解を得るには，常に相手の云うことに本気で耳を傾けると共に，なぜ相手がそんな考えを持つようになったかを理解しなければならぬ。相手の考えの裏にある事情が判れば，そう考えるのも無理はないということが理解でき，単に違う考えとして受け

入れられるようになる。

代表諸君は，今日から色々難かしい問題について論議を楽しむことができるが，諸君は活発な論議を通じて相互理解と信頼をもたらし，両国の友好関係を確立するという重要な役目をもっている。今回特に，諸君に望むことは「今や世界は太平洋時代に入った」と言われている点に注目し，相互理解の輪を単に日米間だけでなく，広く太平洋圏内の諸国にまで広げるよう心がけてもらいたいと言うことである。

２１世紀の世界を担うべく運命づけられている代表諸君は，更に視野を全世界に向け，太平洋圏だけでなく，大西洋，インド洋などにまでも相互理解の輪を広げ，あらゆる国との「友好のかけ橋」になるような努力を続けるよう願っている。

ＪＡＳＣの伝統が「学生の，学生による，学生のための会議」にあることを思うにつけ，第４０回会議が成功し，未来への展望を大きく開けるか否かは，諸君の努力にかかっている。過去の経験から見て，諸君がこの重責を果たせるにちがいないと確信している。

終りに，この会議の実現に協力して下さったＪＡＳＣ，Ｉｎｃ，のインマン会長，創立者のシュミット元会長，会議場を提供して下さったサザン・メソヂスト大学，日本側で援助して下さった国際教育振興会賛助会の方々，特に会議のプログラムを作製し，今日からその運営に当る両国の実行委員諸君に心から感謝の意を表明する。

◇　　◇　　◇

以上で代表諸君への私の話は終るが，開会式で全く予想もしなかった嬉しい事に出くわしたので，この紙面を借りて会議に関係のある方々に報告することにする。

第１は，「テキサス州名誉市民」の称号を贈られたこと。これには全く驚いたが，これは今回初めて同州で開かれることになった会議のお蔭であろう。第２は，会議の米側主催者であるＪＡＳＣ，Ｉｎｃ，の創設者であるシュミット元会長から，永年会議に尽した私の功績を認める印として素晴しい水晶の記念品を贈られたことである。

第３は，と言うより，私にとって最も嬉しかったことは，マンスフィールド駐日米国大使から次のような手紙を頂いたことである。

「日米間の最も古い学生交換プログラムである日米学生会議が，５４年に亘り存続されたのは，貴方の強い信念に基く指導によるものであります。私はかねてから，若し経済と貿易が日米関係の原動力であるとするならば，文化交流はその心であると，しばしば言って参りましたが，学生会議はまさにその顕著な例証であると言えるでしょう。」

「１９８８年は，貴方が８０才の誕生日を迎えられ，また半世紀余に亘る貴方の強力な指導の下に学生会議が４０回を迎えることになった，誠に意義深い年であります。ここで貴方の誕生日をお祝い申し上げると共に，交流プログラムの影響を最も強く且つ永続的に受ける学生を主体として，日米間の緊密な関係の強化に尽された貴方の献身的な努力に対し，心から謝意を表明することは，私にとり誠に大きな喜びであります。」

米国政府の高官である大使から，このような嬉しい手紙を頂いたのは，全く初めてのことであり，深く感動した。しかし、第１回ＪＡＳＣに参加して以来５０余年もの間，会議と密接な関係を持ち続けた以外に，何ひとつ世間をあっと言わせるような大きな事をしていない私に，どうしてこの様な手紙を下さっ

たのだろうかと考えさせられた。

自分の正しいと信ずることを飽くまでも追求し続けて来た私の生き方を認めてくれたのだろうとも言えるが，私がこの様な生き方を続け得たのは「ＪＡＳＣがあったからである」という事実を考えると，大使からの手紙は，半世紀余も前に学生の力によって実現されたＪＡＳＣの意義と使命の重大さを認めてくれたものと言うべきであろう。

第 40 回

日 米 学 生 会 議

和 文 報 告 書

第1部　総　括　報　告

日米学生会議の沿革

日米学生会議は，今から54年前の1934年（昭和9年）に，満州事変の勃発以後悪化しつつある日米関係を憂慮した有志学生によって初めて開催されました。太平洋地域の要石ともなりうる日米両国間の戦争を回避し，相互の信頼を醸成することが必要であるとの認識と「世界の平和は太平洋の平和にあり，太平洋の平和は日米両国の平和にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである」という基本理念のもとに提唱され，実行に移されたのがこの会議です。準備活動は日本全国の大学の英語研究部，国際問題研究部から成る日本英語学生協会（国際学生協会の前身）の主催により進められ，資金調達，運営等の面で多くの困難に直面しながらも，中山公威（青山学院），田端利夫（慶応），板橋並治（明治），遠藤春生（早稲田）を使節団として米国に派遣するに至りました。一行は各地の大学を訪問して米国側の参加者を募り，その結果，総勢99名の米国代表を伴って帰国，一方で日本国内での受け入れ作業の奔走の成果もあり，かくして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され，会議終了後には国内の他満州への研修視察旅行が実施されました。

会議の趣旨に賛同し，日本側の創意と努力に啓発された米国側参加者の申し出により，翌年第2回会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで日本人学生47名の参加のもとに行われました。その後会議は1940年（昭和15年）の第7回会議まで毎年日米交互に続けられましたが，太平洋戦争の勃発により中断を余儀なくされました。

1947年（昭和22年），在日米人学生と日本人学生の参加という形で会議は復活，同様の

形式で日本を舞台に1953年（昭和28年）まで続けられましたが，翌1954年（昭和29年）に戦後初めて米国において開催された第15回会議で再び中断，国際学生会議へ一本化，発展解消することとなりました。これに対し戦前の参加者有志の間で会議復活を望む声が高まり，創設30周年の1964年（昭和39年）に再び復活，第16回会議が米国で開催されました。以後会議は時代の要請に呼応しながらも同時に創設期の理念を着実に受け継ぎ，20数年中断されることなく毎年日米交互に開かれて本年に至っています。特に1973年（昭和48年）以降は，毎回独自の総合テーマを掲げ，日米学生会議の今日的意義を常に問い質し続ける姿勢を貫徹しています。

第40回会議の概略

第40回日米学生会議は，昭和63年7月23日，日本側代表のダラス・フォートワース国際空港到着に始まり，8月18日一行の帰国をもって終わる。

この間，総合テーマ「築かれた日々をみつめて―新たなる相互理解への模索（Historical Reflections：Creating Directions for Mutual Understanding）」のもと，7月23日から7月30日までダラス市（テキサス州）のサザン・メソジスト大学にて，8月4日までは，アトランタ市（ジョージア州）ジョージア工科大学にて，8月6日までは，ブローイング・ロック（ノース・カロライナ州）にて，8月11日までは，ワシントンDC，ジョージタウン大学にて，8月18日まではフィラデルフィア市（ペンシルバニア州），ブリン・マー大学にて，各分科会ごとの討論や研修視察，全体研修，フォーラム，コロキアム等を行い，会議のおわりに総括を行った。

以下，この期間の経過を要約してみる。

Ⅰ）会議開始までの期間（昭和63年7月21日から25日まで）

米国側代表は，ノース・テキサス大学でのオリエンテーション後，アメリカ航空でダラス・フォートワース国際空港へ到着した日本側代表者と共にアメリカ人家庭に分宿し，3日間に亘り家庭の方々と生活した。7月25日朝，日米両国代表は，サザン・メソジスト大学にて対面した。

Ⅱ）ダラスでの会議（7月25日から7月30日まで）

7月25日，会議の冒頭を飾る開会式がサザン・メソジスト大学の講堂で催され，ジャスク・インク会長，ジェリー・インマンの挨拶があり，続いて国際教育振興会理事長，板橋並治，そして，両国実行委員長が挨拶をした。直後にテーマについて考えるディスカッションが行われ，日米学生会議の意議，役割，課題について話し合った。

ダラスでのその後の活動は，以下のとおりである。

まず，7月26日は，各分科会最初のミーティングが行われ，夜は，米国代表者によるアメリカ・ナイトが催され，両国代表者の交流を深めた。

7月27日は，平和と安全保障フォーラムが行われ，原爆映画や，長崎国際文化会館から招かれた被爆者の内田伯氏の体験談を通じ，原爆

の恐ろしさについて学び，小グループに分かれて討論を行った。内田氏ならびに通訳の御厨氏は，前回39回会議が長崎で行われた際，被爆者の体験談に感銘を受けた日米の学生が，40回会議に同様の講話の機会を設けてほしいと署名により長崎側に申し入れ，これが実現したものである。同日午後，米国海軍ホルコム提督による講演及び質疑応答が行われた。その夜，日本側代表者によるジャパン・ナイトが行われ，更に交流を深めていった。

7月28日は，分科会討論・野外研修ののち，テキサス州農務省のルイス氏が農業と日米関係についての講演を行った。その後，両国代表者はバスでサークル・アール・ランチ（大農場）を見学し，バーベキューパーティーを楽しんだ。

ここで，会議を通じての各々の分科会の活動についてまとめてみる。

(1) 科学と社会（Science, Technology and Society）

（参加人員：日本側4，米国側4）

討論議題：

Ⅰ）ストレス

Ⅱ）原子力世代の問題点

Ⅲ）ガン告知問題

Ⅳ）煙草社会

Ⅴ）研究に対する姿勢—日米比較

Ⅵ）コンピュータと芸術

Ⅶ）ＤＮＡ工学

Ⅷ）動物観再考

野外研修：

テキサス・インストゥルメンツ（半導体製造施設），ベル・ヘリコプター／テクストロン，センター・フォー・ディジース・コントロール，ＮＡＳＡゴダード・スペース・フライト・センター，ナショナル・サイエンス・ファンデーション，スミスクライン・ベックマン研究所

(2) 教育（Education）

（参加人員：日本側4，米国側4）

討論議題：

Ⅰ）多民族国家アメリカにおける英語教育

Ⅱ）オープン・スクールと創造性の教育

Ⅲ）学習塾とその功罪

Ⅳ）教育における体罰と躾

Ⅴ）教育目標に関する日米間の相違

Ⅵ）校則に見る日本の管理主義教育

Ⅶ）日米の教育政策—国家の統制とその影響

Ⅷ）日本の入試制度と教育改革

野外研修：

マグネット・スクール（ダラス），ハーパー・パブリック・ハイスクール，日本大使館，ギャラデット大学，ＷＥＴＡ－ＴＶ，全国体罰研究所（テンプル大学内）

(3) 言語とコミュニケーション（Language and Communication）

（参加人員：日本側4，米国側4）

討論議題：

Ⅰ）エスペラント語—国際言語の役割

Ⅱ）女性語

Ⅲ）日本漫画における「甘え」の非言語コミュニケーション

Ⅳ）日本語の曖昧さ

Ⅴ）言語とジェンダー

Ⅵ）米国南部方言と日本語比較

Ⅶ）文法における日米異文化間ミスコミュニケーション

Ⅷ）セミオティックス—態度とその意味

野外研修：

国際文化博物館，国際言語学センター，カリア・コミュニケーション治療センター，キャラデット大学，ソニア・サンチェズ（女流詩人，テンプル大学），ユアキーズ研究所，マリオン・ムア（霊媒コミュニケーション）

(4) 国際関係（International Relations）

（参加人員：日本側４，米国側４）

討論議題：

Ⅰ）パレスチナ問題の解決策を求めて

Ⅱ）第二次冷戦におけるアメリカの〝衰退〟の影響

Ⅲ）東西対立のはざまの東欧諸国

Ⅳ）北方領土問題

Ⅴ）日米関係―相互理解へ向けての協力の重要性

Ⅵ）宇宙空間における国際協力

Ⅶ）今後の日中米三カ国間関係

Ⅷ）日米貿易交渉における力の均衡問題

野外研修：

リチャード・ルボトム氏（前駐アルゼンチン大使），カーターセンター，ギリシャ領事館及び台湾領事館，アメリカ平和協会，世界銀行

(5) 国際ビジネスと経済（International Business and Global Economic Development）

（参加人員：日本側４，米国側４）

討論議題：

Ⅰ）多国籍化への日本の経済努力

Ⅱ）日本の流通機構の変革

Ⅲ）第三世界の経済発展と米国の役割

Ⅳ）累積債務問題

Ⅴ）貿易不均衡

Ⅵ）企業合併と買収

Ⅶ）国際通貨制度改革

Ⅷ）太平洋の世紀

野外研修：

カルテックス・ペトロリウム，日本長期信用銀行，国際復興開発銀行，コカコーラ，ハース・アンド・マクブライド・インターナショナル

(6) 個人と社会（Roles and Responsibilities for Society and Ourselves）

（参加人員：日本側４，米国側４）

討論議題：

Ⅰ）日本の国際化論について

Ⅱ）日本人の裁判に対する意識

Ⅲ）社会，そして私達にとっての幸福とは

Ⅳ）日本社会でのサーヴィスについて

Ⅴ）代理母問題とそれに対するアメリカ社会の方策

Ⅵ）社会的偽善

Ⅶ）国家による自由の分配と個人の自由

Ⅷ）日本社会―アメリカが見習うべきもの

野外研修：

ＮＥＣダラス工場，スミソニアン博物館，死刑反対運動連盟，ハウス・オブ・ウモジャ，クエーカーフレンドセンター

(7) 政治と社会（Political Systems and Public Policy）

（参加人員：日本側４，米国側４）

討論議題：

Ⅰ）日本は民主主義国家か

Ⅱ）現代日本の官僚制

Ⅲ）ボーダレス・エコノミーの時代

Ⅳ）日本の政治制度の機能不全と外圧

Ⅴ）大統領を生み出すまで

Ⅵ）エイズ患者への政策
Ⅶ）自民党内における政治の特徴
Ⅷ）日米両国の直面する経済問題
野外研修：
フォレスト・スミス氏（インターナショナル・トレード・アソシエーション），メーブル・トーマス氏（ジョージア州議会議員），トマス・レオナード氏（センター・フォー・ディジース・コントロール），ジョセフ・マーシー氏（米国通商代表部），チャック・アレン氏（ナショナル・リパブリカン・コングレッショナル・コミティ），バージェス氏（USウエスト）

(8) 哲学と芸術（Philosophy and the Arts）
（参加人員：日本側4，米国側4）
討論議題：
Ⅰ）宗教芸術における日本人の神観念
Ⅱ）庭園における自然観
Ⅲ）感情表現と洗練性—都市を通して
Ⅳ）近代の基本的な世界観の分析
Ⅴ）ブロードウェイ・ミュージカル
Ⅵ）日本映画
Ⅶ）東西の絵画—その比較
Ⅷ）フランク・ロイド・ライトの有機建築—東洋と西洋・統合の思想
野外研修：
アン・ウイリアム氏（ダラス黒人舞踊団ディレクター），フォートワース日本庭園，「ファウスト・フォア・プレジデント」鑑賞，キャランウォールド美術館，フリーア・ギャラリー，マリー・ホプキンス氏（「芸術と女性」グループのリーダー），ペンシルバニア美術アカデミー

(9) 歴史と文化（History and Culture）
（参加人員：日本側4，米国側4）
討論議題：
Ⅰ）ステレオタイプ
Ⅱ）日本人の自国イメージの変化
Ⅲ）日系アメリカ人のアメリカにおける差別
Ⅳ）戦時下の日系アメリカ人の抑留
Ⅴ）アメリカにおける禅
Ⅵ）「恥」の歴史と文化
Ⅶ）近代国家への移行—明治時代の習慣
Ⅷ）敬語についての考察
野外研修：
ダラス・オールド・シティー・パーク，アトランタ・ハイ・ミュージアム，CNNテレビ局，フリーア・ギャラリー，アメリカ歴史博物館，フィラデルフィア史跡ツアー

(10) 若者と時代（Younger Generations：Past，Present，and Future）
（参加人員：日本側4，米国側4）
討論議題：
Ⅰ）若者と日本の国際化
Ⅱ）現代日本の「いじめ」
Ⅲ）文学作品に見る青年像の変化と今日の若者
Ⅳ）消費社会へ向けて—現代日本の若者分析
Ⅴ）「ライ麦畑でつかまえて」再考—50年代アメリカと80年代日本の若者
Ⅵ）麻薬—日本とアメリカ
Ⅶ）教育の力
Ⅷ）パンクロック・サブカルチャー／対抗文化創造の物語
野外研修：
ダラス少年感化院，十代妊娠相談所，アトランタ・サバイバル・ゲーム，ナショナル・

エンダウメント・フォー・ヒューマニティーズ，ジェイムス・ギルバート氏（メリーランド大学教授）

Ⅲ）アトランタでの会議（7月30日より8月4日まで）

アトランタでは，ジョージア工科大学に滞在しながら討論・野外研修を進めた。

7月30日は，お互いのふるさとについて語り合う，ふるさとコロキアムが行われ，両国代表によるスライド・プレゼンテーションなどがあった。

7月31日は，分科会討論・野外研修後，アトランタ市アミ（友達）団体のご好意により両国代表者各1名ずつペアでアトランタ市住民と食事を共にし交流が図られた。

8月1日は，人権フォーラムがマーチン・ルーサー・キング・センターで行われ，日米両国代表による発表が行われた。同日午後はＮＡＡＣＰワシントン本部代表シンホースター氏による講演・質疑応答が行われ，両国代表者は，マーチン・ルーサー・キング・センターを見学した。夜は，日本及びアメリカ文化サークルが催され，お互いの言葉や文化について学んだ。

8月3日は，ベル・サウス会社主催のレセプションが行われ，ヨークリー氏の歓迎挨拶に続き，アトランタ市のマイケル・ローマックス氏による人種差別についての講演が行われた。同日午後は，会議の後半をより充実したものにするために，中間反省会を行った。

Ⅳ）ブローイング・ロックでのキャンプ（8月4日から8月6日まで）

会議の折返し点である8月4日から8月6日まで，両国代表者は，ノースカロライナ州のブローイング・ロック・キャンプ場で過ごした。川下り，ハイキング，キャンプファイアなどのレクリエーションが行われ，会議前半の肉体的疲労を癒すとともに，交流を更に深めていった。

Ⅴ）ワシントンでの会議（8月6日から8月11日まで）

ワシントンではジョージタウン大学に滞在しながら，討論・野外研修及び，全体研修を進めた。

8月7日は，民主主義フォーラムが行われ，政策研究学会のラスキン氏による講演・質疑応答ののち，日本側代表による発表が行われた。午後は米国側代表による発表があり，その後，小グループに分かれて討論した。夕方は，クリフトン・ライオンズ・クラブのご好意によりケン・ハリス氏の邸宅でバーベキューパーティーが催され，代表者達はくつろいだ時を過ごした。

8月8日は，分科会討論・野外研修後，スティーブン・サンダース・アンド・アソシエイツ主催のレセプションが行われた。

8月9日は，国務省を訪問し，日米貿易問題について3人の講演者が発表した。米国通商代表のグレン・フクシマ氏に続き，エヴァンズ議員スタッフ，ジョーンズ氏，国務省ジャパン・デスク担当，ドゥルハム氏が発表し，質疑応答が行われた。そののち，国務省のベンジャミン・フランクリン・ルームで日米学生会議40回記念レセプションが行われ，東洋・太平洋側副国務省長官，シグール氏よりメッセージを頂いた。同日午後，海外プレス・センターを訪問し，「新聞情報と日米関係」というテーマのパネルディスカッションが行わ

れた。スピーカーは，毎日新聞社特派員，小西氏，ジャパン・タイムズ特派員，土井氏，ワシントン・ポスト記者，フォーギー氏，外国人ジャーナリストセンター，クリムスキー氏の４名であった。夕方は，日本大使館を訪問し，領事の西山氏の講演及び質疑応答ののちにディナー・レセプションが続いた。

Ⅵ）フィラデルフィアでの会議（８月11日から８月18日まで）

会議の最終開催地となったフィラデルフィアではブリン・マー大学に滞在しながら討論・野外研修のしめくくりを行った。

８月12日，分科会討論・野外研修後，フィラデルフィア市内のベル・アトランティックでレセプションが行われ，歓迎挨拶に続き，プリンストン大学東洋学部歴史学科教授マリウス・ジャンセン博士の講演があった。同日夜はヒーローコロキアムが行われ，日米両国のヒーロー像の発表があった。

８月13日は宗教フォーラムが行われた。前僧侶のソーホー・マチダ氏の宗教原理主義についての講演，質疑応答があり，つづいてアメリカキリスト教会の多様性に関するビデオを観賞した。午後は両国代表者による発表，小グループ討論を行った。

８月14日は最後の分科会ミーティングがあり，午後は男女コロキアムが行われ，両国代表者発表ののち，小グループに分かれ討論した。同日夜，新実行委員の選挙が行われた。

８月15日は，新実行委員による次回会議についての話し合いが行われ，同日夜は全体反省会及び各分科会ごとの活動報告を行い，各々の参加者が本会議で得た成果について語り合った。

なお，第40回日米学生会議の閉会式はスミスクライン・ベックマン・コーポレーション本社において８月17日に行われ，ジャスク・インクのエリック・ヘインズ，国際教育振興会文化事業部吉田典子，日米両国実行委員長の挨拶をもって，１カ月に亘った会議は幕を閉じた。

Ⅶ）成果

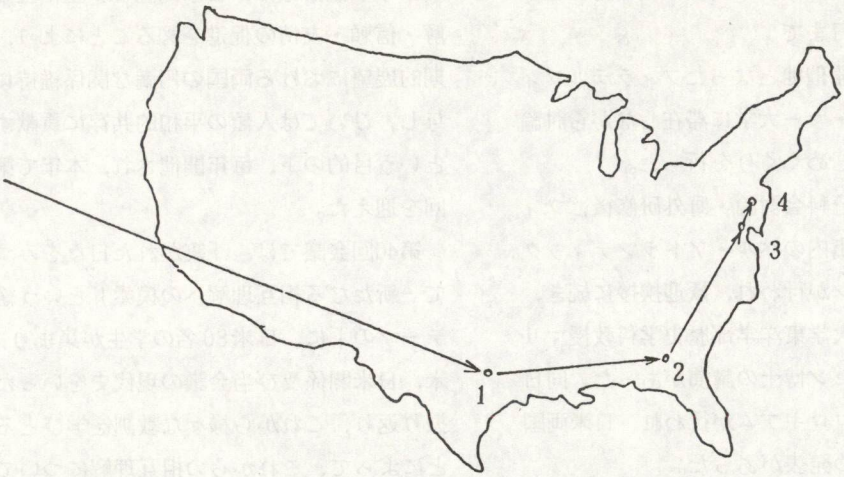
日米学生会議は，日米両国の学生相互の理解・信頼・友情の促進を図ることにより，長期的展望における両国の円満な関係維持に寄与し，ひいては人類の平和的共存に貢献するという目的の下，毎年開催され，本年で第40回を迎えた。

第40回会議では，「築かれた日々をみつめて―新たなる相互理解への模索」という総合テーマの下に，日米80名の学生が集まり，日，米，日米関係及び当会議の現代史をいったん振り返り，これから様々な教訓を学びとることによって，これからの相互理解について臆することなく模索していこうとする努力がなされた。二つの異なる文化の間では，相互理解は容易になされるものではなかったが，相互理解を常に個人のレベルで試みるためにどのフォーラムにおいても小グループ討論の機会をもち，地に足のついた議論に努めた。

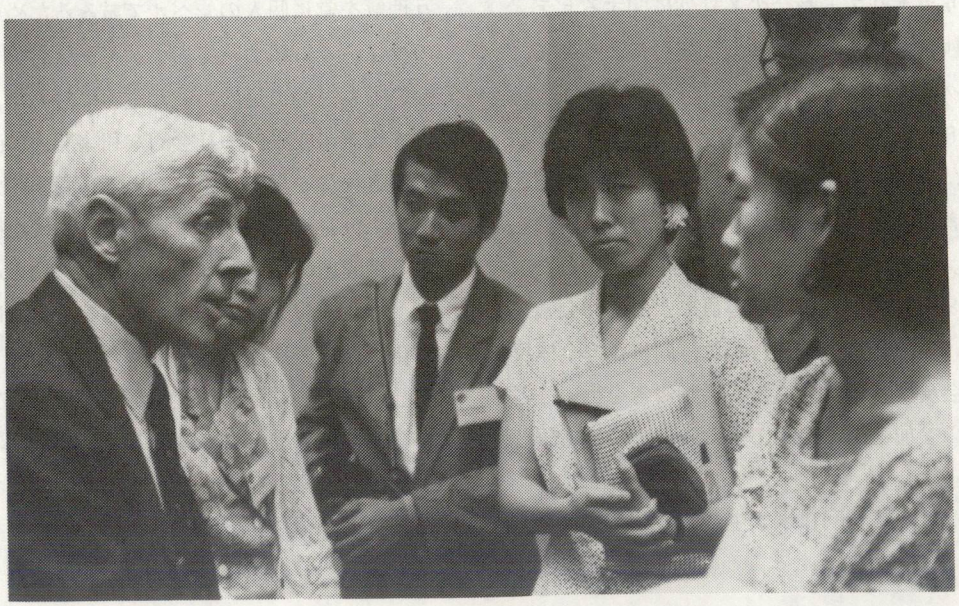
本会議の成果は，社会的な利害関係に直接影響されない学生という立場で，両国の大学生が１カ月近くの共同生活体験と現代が直面する諸問題についての率直な意見交換を通して，相互理解を深めたことである。同時に，文化・言語・習慣の違いを越えて，理解し合うということの困難さと重要性を参加者ひとりひとりが身をもって体験した。会議中は寝食を共にする上ですら，あるいはそれであるからこそ，相互理解の困難さを全員が味わっ

た。しかし，相互理解を言葉だけに終わらせず，問題に直面しながらも討論を深めることによって，真の相互理解に向けて少しずつ歩み寄れたことがなによりの成果であろう。また，会議は日米の実行委員を中心に，企画運営その他がすべて学生の手によるものであるということも特筆すべき点である。約1カ月間の本会議は1年に亘る学生の準備活動の結晶なのである。

学生会議の究極の目標にはまだまだ遠いが，今後，各参加者が様々な分野で，社会の一員として活躍するに際して，ひとりひとりの経験として生かされるものであると信じる。その意味においても，日米学生会議が継承され，より多くの学生がこの会議を経験することは，意義深いものであるに違いない。



1.テキサス州ダラス　2.ジョージア州アトランタ
3.ワシントンD. C.　4.ペンシルバニア州フィラデルフィア



日　程

1988年 7月20日	アメリカ側到着 / オリエンテーション	ダラス
21日	アメリカ側オリエンテーション	‖日本側直前合宿　東京
22日	アメリカ側オリエンテーション	‖日本側直前合宿
23日	アメリカ側オリエンテーション	‖日本側離日
	日本側到着 / ホームスティ	ダラス
24日	ホームスティ	
25日	開会式 / テーマディスカッション / レセプション	
26日	分科会討議及び野外研修 / アメリカナイト	
27日	平和と安全保障フォーラム / ジャパンナイト	
28日	分科会討論及び野外研修 / 農場見学	
29日	自由行動日（ロデオ見学）	
30日	移動 / ふるさとコロキアム	アトランタ
31日	分科会討論及び野外研修 / ホスト・ファミリーとの夜	
8月 1日	人権フォーラム / JLC（ジャパニーズ・ランゲージ・サークル）	
2日	自由行動日	
3日	分科会討論及び野外研修 / ベルサウスの昼食会 /	
	分科会討論及び野外研修 / 中間反省会	
4日	移動 / キャンプ	ブローイング・ロック
5日	キャンプ（川下り，ハイキング）/ キャンプファイヤ	
6日	移動	ワシントンDC
7日	民主主義フォーラム / クリフトン・バーベキューパーティー	
8日	分科会討論及び野外研修 / アレキサンドリア・レセプション	
9日	国務省 / 40回記念レセプション / 海外プレスセンター / 日本大使館	
10日	自由行動日	
11日	分科会討論及び野外研修 / 移動	フィラデルフィア
12日	分科会討論及び野外研修 / ベルアトランティックの昼食会 /	
	分科会討論及び野外研修 / ヒーローコロキアム	
13日	宗教フォーラム /（チャイナタウンディナー）	
14日	分科会討論及び野外研修 / 男女コロキアム / 新実行委員選挙	
15日	自由行動日‖新実行委員ミーティング / 総括会議	
16日	自由行動日（ニューヨークツアー）‖新実行委員ミーティング	
17日	閉会式 / レセプション / フェアウェルパーティー	
18日	アメリカ側帰宅‖日本側離米	
19日	日本側帰国	

第40回日米学生会議参加者（分科会別）

＜科学と社会＞

*足立　望	京都大学（心理学）
斉藤　尚	東京大学（応用生命工学）
鈴木　康弘	長崎大学（医学）
八木　樹	津田塾大学（国際関係）
Hillary J. Greene	Yale University（Economics / Political Science）
Patrick B. McEuen	Wabash College（English）
*Azumi Ann Takata	Stanford University（Sociology / East Asian Studies）
Ken Uchino	Harvard College（Biology）

＜教　育＞

木下　綾	早稲田大学（社会科学）
窪田美穂子	津田塾大学（言語学）
*豊川　輝	早稲田大学（心理学）
服部　崇	東京大学（アメリカ研究）
*Carol L. Lee	University of California at Berkeley（Physical Education）
Natalie K. Mutz	University of California at Berkeley（Asian Studies）
Joyce G. Wegner	University of Montana at Missoula（Anthropology / Geography）
Kevin C. Whelton	Texas A & M University（Finance）

＜言語とコミュニケーション＞

*出口真紀子	Wellesley College（Economics）
三岡　朋子	同志社大学（英文学）
渡辺幸一郎	東京大学（金属工学）
渡辺　祐貴	筑波大学（日本語・日本文化）
Madeleine J. Adkins	University of California at Berkeley（Linguistics）
Sumie Okazaki	University of Michigan（Psychology）
*Miryam B. Silverman	Harvard / Radcliffe Colleges（Literature）
W. Britton Watkins	University of South Carolina（Asian Studies）

＜国際関係＞

市川ひろみ	大阪大学（国際法）
奥村茂三郎	東京大学（アメリカ研究）

*長谷川智可	上智大学（社会学）
原　秀樹	大阪外国語大学（英語学）
Wendy M. Johnson	Pomona College（International Relations）
Lara L. Manzione	Brown University（East Asian Studies）
*Troy D. Miller	Texas A & M University（Economics）
Joseph T. Willemssen	Duke University（Comparative Area Studies）

＜国際ビジネスと経済＞

*岡崎　淳	大阪大学（経済学）
豊田　牧子	慶応義塾大学（経済学）
町田　光弘	大阪大学（経済学）
吉田　篤史	早稲田大学（経済学）
Veronica R. Brakus	University of Washington（International Studies）
Suzanne M. Kounkel	University of Colorado at Boulder（Business）
*Robert M. Sigler	University of Alabama（Economics / Political Science）
James K. Takami	Carnegie Mellon University（Industrial Management）

＜個人と社会＞

*岡田　治	国際基督教大学（社会学）
島岡　良衣	中央大学（法学）
北郷美由紀	津田塾大学（国際関係）
毛利陽一郎	早稲田大学（政治学）
*Jonathan Mark H. Hall	Princeton University（Undeclared）
Rebecca E. Payne	Bates College（Japanese Studies）
David L. Thomas	University of Texas at Austin（Asian Studies）
Kendra K. Yoshimoto	University of Hawaii at Manoa（Accounting）

＜政治と社会＞

宇野　重規	東京大学（法学政治学）
岸　道信	東京大学（法学）
小堀　貴子	慶応義塾大学（政治学）
*本田　雅俊	慶応義塾大学（政治学）
Denise E. Banner	Guilford College（Political Science）
*Alisa B. Goldberg	Case Western Reserve University（Medical Anthropology）
Tracy P. Lenard	University of Kansas（History / Economics）
Michael F. Walsh	Yale University（History / Political Science）

＜哲学と芸術＞

児島　芳樹	東京大学（物理学）
＊新田　陽子	早稲田大学（社会学）
藤原　泰子	同志社大学（英文学）
増田　行子	青山学院大学（英米文学）
Constance M. Chen	Harvard / Radcliffe Colleges (History)
＊Gregory H. Kalfas	University of Michigan (Japanese Studies)
J. David Mariscotti	McGill University (East Asian Studies)
Kim L. Milone	Loyola University (History)

＜歴史と文化＞

＊近藤　夏	東京大学（社会心理学）
渋谷　恵	筑波大学（日本研究）
塚本亜希子	東京外国語大学（フランス語学）
山本　晃一	京都大学（法学）
＊Brian L. Foote	University of Nevada at Reno (Art / History)
Zachary W. Raley	Wesleyan University (Undeclared)
Lisa M. Shaver	Colorado College (History)
Susan C. Shin	Harvard / Radcliffe Colleges (East Asian Studies)

＜若者と時代＞

青木麻喜子	上智大学（政治学）
＊今田　克司	東京大学（社会学）
鬼頭三樹恵	国際基督教大学（コミュニケーション）
服部　直也	京都大学（医学）
＊Elissa M. Leif	Yale University (History)
Willamarie Moore	Oberlin College (East Asian Studies)
Morley E. Robertson	Harvard College (Visual and Environmental Studies)
Craig D. Sherman	Princeton University (East Asian Studies)

〔氏名のあとは大学名（専攻），＊は分科会コーディネイター＝実行委員をあらわす。〕

第2部　会　議　報　告

全体プログラム

ダ ラ ス（7月23日～30日）

宿泊地：サザンメソジスト大学

ホームスティ

7月22日，予定通りダラスに到着した。初めてみるアメリカは，広い空港と広いホテルに疎らなひとかげといった感じで，ほぼ予想通りといったところだ。さっそくホームスティ先の家族との対面らしい。仲間の家族が次々と到着している。アメリカ人と最初に接するのが同じ年頃の若者ではないということで僕は必要以上に緊張していた。と，そうこうしているうちにファミリーが到着，軽く挨拶を交わす。マムの言っていることはわかるのだが，ダッドの言っていることがわからない。「やっぱり本場のアメリカ人はアナウンサーのようには喋ってくれへんわな。こら早いとこ慣れなしゃあないわ。」と思いながら何とか話をつないでいると，ホームスティペアーのトレイシーがやってきた。ほっと一安心。「オイ，英語が聞き取られへん時は助けてや。」と耳打ちして車へ乗り込み家へ向かった。

家へ到着。ママがいうには家の中のものは勝手につかっていいらしい。テニスもできるとのこと。何となく居心地の悪かった僕はさっそくトレーシーと二人でテニスに出かけた。テニスの腕前は全く互角。遊んでいるうちにいっぺんに仲良くなった。「こいつと一緒やったらどないか成るやろ。当たって砕けいやな。帰ったら思いっきりいちびってみたろ。」その日の晩はバーベキューで，それを食べながらいきなり日本企業の批判が始まった。何もビビることはない。日本で喋り尽くしてきた話題だ。最初のシリアスな話題が，比較的俗っぽかったのでしゃべりやすかった。

2日目。ダラスの市街見学。ダウンタウンをうろついているとあちこちでほかのメンバー達とその家族に出会う。みんな少し緊張気味だ。さっそく言葉が通じないとか，何やかや文句を言っているやつもいた。即席の兄弟と仲良くなっていた僕はやや優越感を感じながら余裕の1日だった。ただ困ったことには，

ダラスの観光ポイントを勉強していなかったので「何でこれが観光ポイントやねん。」といったところが何カ所かあった。

そうこうしているうちに２日目も終わり，３日目は朝からお別れだ。ダッドにＳＭＵ（サザン・メソジスト大学）まで車で送っていってもらった。いつもながら彼の英語には苦労する。何を言っているのかわからない。あんまり聞き返すのもしゃくやったので適当に勘で喋っていると時々トレーシーが割り込んで喋ってくる。どうやらむちゃくちゃ的外れなことを言ってしまったみたい。「ま，ええか。細かいこと気にしとったら神経もてへんもんな。」結局ダッドの英語には最後まで慣れることはでけんかったけど，「あんまり細かいこと言うとったらこの国ではやっていけへんな。」というその後の４週間の生活にすごく役にたった教訓を実感して僕のホームスティは終わったのだった。

（服部直也）

開　会　式

時は満ちた。

どこまで行っても平らな大地が広がり，膚に痛い程焼けつくような日差しのダラス。この地でホームスティを終えて興奮気味の７月25日の昼，サザンメソジスト大学の講堂に日米80人の学生が集まった。いつもジーンズ一辺倒の学生には正装は少し窮屈だ。しかし，それがかえってこれからの会議への心地良い緊張となる。皆すぐに座ろうとはせず，その辺をうろうろしている。捕まえた獲物は離さず自己紹介を始めるハンター組。華を求めて飛びまわるミツバチ組。新しい出会いの芽をかきわけるように探しまわる。

外の暑さなどまるで伝わってこない冷んやりとした講堂。実行委員の一人が開会式の始まりを告げる。ジェリー・インマン氏，ＪＡＳＣ．Ｉｎｃ．の代表。「……事実，友情とは発展するのです。苦しい討論や交渉の中で発展し生き残るものなのです。」国際教育振興会理事長，板橋並治氏。今年のテーマに沿って，日米学生会議の歴史のお話。この日米学生会議創始者の一人らしい存在感のある話しぶり。そしてアメリカ側実行委員長，アン・タカタ。「私が計画してきたこの会議を利用して自分のものにするかどうかはあなた方次第です。相互理解の新しい方向を創っていきましょう。」

落ちついてはいるが少し緊張した面持ちである。日本側実行委員長，今田克司。英語の〝Ｉ

am proud of you.″（私はあなたを誇りに思いますよ。）という表現を使って，「ただ一緒の時間を過ごすだけではない。困惑や衝突をこの体験の過程で経験し，ある程度の拘わりを持てないと言えない言葉です。会議の終わりには，皆が少なくとも誰か一人に対して〝I am proud of you.″と言うことができれば，この会議は成功です。」 1年前から自分のことも後まわしにしてこの会議の準備をしてきた人達の言葉は重い。だが，この言葉の重みが本当にわかるのは，これから25日後―会議の終わり―なのであろう。実行委員20人，新参加者60人。4月の初めにメンバーに決まってから，止まることなくあらゆる栄養をとりつづけてきた。全てこの本会議のために。そして今，時は満ちたのである。

（藤原泰子）

テーマディスカッション

テーマディスカッションは今回初めての試みであり，第40回日米学生会議を特色づけているものの一つである。その設置の背景には，総合テーマが飾り物としてではなく，本会議中も各セクション・個人の認識において充分に反映されるためには，総合テーマについて話し合う機会が必要だとの，日米両国実行委員会の意図があった。「Historical Reflections―Creating Directions for Mutual Understanding 築かれた日々を見つめて―新たなる相互理解への模索」このテーマを会議及び個人の認識に生かすべく，あるアプローチが提案され実行された。実際の約1カ月間にわたる会議に注目して，日米計80名の学生が集う会議を振り返ることによって相互理解について考えようといった，テーマの縮少実践版である。そのために，会議の始めと終わりに同じメンバーで，小グループディスカッションをもつという工夫がなされた。

7月25日，開会式に続いて，日米2名ずつのプレゼンテーションからテーマディスカッションが始まった。会議の歴史についての説明の他，相互理解を妨げるステレオタイプやイメージに注意が喚起され，会議での個人的接触を通じて互いにそれらを打破していこうという提案がなされた。続いて，8つのグループに分かれて40分間のディスカッションが行われた。そこでは主に，会議に参加した動機・会議への期待・互いの国のイメージ・会議での目標といったことが話された。その後各グループで話された内容を代表が発表し，会議は本格的に始動したのであるが，その会議中興味深い現象がみられた。相互理解という言葉を使う際に，指でクォーテーションを作るのである。（以下〝現象″と略す）本会議中相互理解という言葉が頻繁に用いられるため，皆が懐疑的になりカッコ付きで使用し始めたのである。このことは今更でもないが，相互理解がいかに重要なものであり，それ故

にその実現が困難であるということを，一人一人が改めて意識した結果にすぎない。口で言うのはたやすいが，その実現は難しい。されどその重要性を実感すればするほど，口にせずにはいられない。〝現象〟は参加者のこのような心情を象徴していたように思われる。

8月15日，同じメンバーでディスカッションが再度もたれた。今回は会議を終えるにあたり，個人個人が会議で得た様々なものを持ちよってのディスカッションである。相互理解について，テーマと会議の関連及び会議の意義について，意見が交換された。当初個人レベルでとらえられていた相互理解は，会議を終えるにあたりその努力の場が日米学生会議であったことを意識することによって，相互理解は日米間のそれにまで高められていったように思われる。テーマはそれを縮少した形で実践されたのである。

一夏の会議を終えた参加者は今後幾度も会議を振り返るであろう。5年後，10年後，20年後……。我々第40回参加者の振り返る第40回会議には，テーマを縮少実践したテーマディスカッションがあり，そうすることによって我々は会議を終えた後においても，社会人になっても，「築かれた日々を見つめて」というテーマを実践し続けるわけである。そして〝現象〟を思い出すと同時に，相互理解を模索し続けている自分を再確認するのであろう。時を変えて，場を変えて，我々第40回参加者は，今回の総合テーマと共にあるのである。

会議体という形をとる日米学生会議は，今後より有効に機能し，それらの成果を個人・集団間にのみならず，社会的にも還元していかなければならない。節目である40回において新しくもたれ，様々な意味で今後の会議の方向性が問われるであろう41回でももたれることになっているテーマディスカッションは，日米学生会議が上記の意味合いを持ち続けるための，一つの確実な形を提示したといえよう。

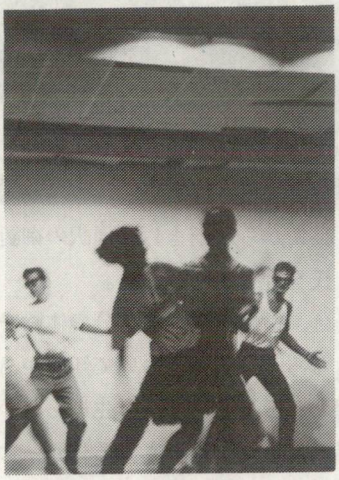
（北郷美由紀）

アメリカナイト

ダラスに到着後，各ホスト・ファミリーにひきとられていった日米双方の参加者達が，ゴージャスなＳＭＵ（サザン・メソジスト大学）に集結した翌日，会議直前に集まり，わずか5回の練習しかしていないというアメリカ側参加者達は，最後の追いこみのため早々と会場へと向かって行った。

7時30分に始まる予定であったが，8時になっても始まらず，見物に来ておられたホストファミリーの方々も我々も，少しいらいらしだしたころ，ようやく「アメリカナイト」が始まった。司会の Kim のいでたちはタキシードに蝶ネクタイの男役。これがまたビシッと決まっていてかわいい。

最初はコメディで始まった。舞台は「テキサスの大学に入るための塾」という設定だった。Denise 先生の発音指導に沿って皆で一斉に〝Howdy, y'all〟とやったり，会場はもう笑いの渦。中でも日本の女子高生役の，Sumi ちゃんのセーラー服姿はとてもかわいらしかった。Troy，Craig，Brian，Greg のアカペラに聞きほれた後は Joe と Wendy がパントマイムを使って典型的アメリカ人のデート風景を見せてくれた。さすがにカリフ



ォルニアガールの Wendy，なかなかサーファー姿が似合っている。その後も Juggling（いわゆるお手玉）などの数々の芸が披露されていったが，我々見ている方はその達者ぶりにただただ感心するばかりで，なかでも今年も出た Troy のドナルドダックには一同唖然。一体あの声はどこから出しているのだろう。

次は Michael，Zak，Joyce，David らによるタイムリーな選挙戦のパロディーだ。Michael のブッシュ，Davidのカーターに一同笑いころげていたが，実は後で聞いた話だが，このコメディーにもあるメッセージが隠されていたのだった。というのも Joyce 紛するフェラーロ女史が選挙戦脱落を涙ながらに打ち明けるシーンで，その場に同席していた他の立候補者達ももらい泣きしていたのは，やはり女は弱すぎて，涙は禁物の政治の世界では生きてゆけないという批判への〝男でも泣くときは泣くんだ。そして政治の世界もそういう人間的なものであるべきだ〟という訴えだったのだ。この話を後日ある参加者から聞いた時，私はアメリカ側参加者達の問題意識の高さに恐れ入ってしまった。

8時すぎに始まったアメリカナイトも今や大詰めをむかえ，フィナーレを飾るのは〝性転換〟したシュープリームズとテンプテーションズ。Modeleine の男役もさるものだったが，Ken，David T.，David M.，Craig，のドレス姿は，何か恐ろしささえも漂わせていた。

泣いて笑って大騒ぎした2時間も，最後は出演者全員が舞台の上で一人ずつ自己紹介をしながら，去年と同じように〝……and I'm a typical American.〟と結んでその幕を閉じた。プログラム終了後，会場では Coke と Pizza がふるまわれたが，彼らの芸達者ぶりにふるい起こされ，対抗意識にみなぎった日本側参加者達が Pizza を食べるのもほどほどに，翌日のジャパンナイトの練習のために次々と会場を後にしたのは言うまでもなかった。

（原　秀樹）

平和と安全保障フォーラム

平和と安全保障フォーラムは７月27日，一行の滞在先であるサザン・メソジスト大学に於て行なわれた。

午前中のセッションでは，純粋に平和の貴さを考えようということで，戦争の恐ろしさ，特に原子爆弾に焦点を当てた企画が中心となっていた。日本側のタスクフォースと呼ばれる準備担当者２人により平和運動の現状と，原子爆弾が落とされるに至ったいきさつについてそれぞれ発表が行なわれ，それから原爆のおそろしさを伝えるフィルムを皆で観た後，午前中のセッションの目玉の企画がやってきた。長崎からお招きした被爆者の方の講演である。

この企画は，前39回会議の間から考えられていたもので，日米のタスクフォースの尽力の結果，長崎国際文化会館の次長でいらっしゃる内田伯氏を，ここダラスに招くことが実現したのである。

講演は長崎からお招きした通訳の御厨（みくりや）氏を介して行われた。

内田氏は，被爆者として自分の体験を語ることはもちろん，原爆について知識があまりないと思われるアメリカ人学生にもわかるように，長崎に原爆が落とされるに至ったいきさつまで含めた客観的なお話しをして下さった。長崎が当初の攻撃目標でなかったことを強調され，そこから,「何故自分達が」という無念さが強く感じられた。氏の話して下さった原爆の人体に対する効果の描写は，アメリカ人学生のみならず，日本人学生にも大きな驚きとなったようだった。

「被爆者の使命は，原爆の恐ろしさを世界に，後世に伝え，人間の愚かさを忘れさせないようにすること」という氏の最後の言葉には大きな重みと決意とが感じられた。

その後，質疑応答が行なわれた。

質疑は，特にアメリカ人学生から，核のない世界を実現するための方法について聞くものあり，原発問題を持ち出すものあり，と，内田氏が被爆者としての立場以上のところで答えなければならなくなるものが続出したが，氏はそれらにも懸命に答えておられた。だが，被爆の事実そのものよりも，それ以外のよりテクニカルともいえる事柄に質問が集中した，つまり内田氏でなければできないような分野以外の話題への参加者の関心が大きかったのはタスクフォースとしては残念だった。

しかし，それ以外で，被爆者の中に，遺伝を心配するあまり，世を遁れるように結婚もせず生活した人の多かった話など，私たちにも初めて触れるような話もして下さった。

その後，参加者は小グループに分かれて討論を行なった。そこでは，どのグループにおいても，それぞれ意見，また互いに聞いてみたいことなど持っていたらしく，原爆の話から軍縮の話まで，非常に活発に議論が行なわれていた。

タスクフォースとして準備した者としてはこの午前中のセッションについては，見通しが甘かった，と反省せざるを得なかったもののように思う。「平和」と「安全保障」は時間的に分けた方が参加者が自己の平和観を再認識する機会が持てるし，また問題に取り組みやすくなるだろう，と考えて２つに分けたセッションだが，平和，そして安全保障の問題はそのような安易な２分法を許さなかった，というところか。

ただ，内田氏は私たちがお招きしたのがきっかけで，しばらくアメリカに滞在し，講演の機会が得られたこと，数人のアメリカ人参加者が，「核兵器の効力について少し勉強してみたい」と話していたことなど考えると，今回は核兵器の恐ろしさをより多くの人々に知ってもらういい機会になったと思う。

（毛利陽一郎）

午前中のセッションが，どちらかというと「平和」にウェイトを置き，平和について個人レヴェルで考える，いわば，理念的なものであったのに対して，午後からは，世界の政治・経済等の現実を踏まえて，日米の安全保障のあるべき姿に焦点を当てるものであった。

まず，アメリカ側参加者から，「世論と政治家の結びつきとは？」「理想を持つことなしに一体何ができるのか？」などといった質問を提示する形でのプレゼンテーションが行なわれた。続いて元米海軍提督のホルコム氏の講演があった。氏は，提督として戦略の立案などに携ったキャリアをもとに，極東の軍事情勢について講演をなさった。氏は，日本は憲法上自衛力を持つことが許されている，と述べた上で，ソビエトについて，その戦略に於ける日本の位置，極東に基地を持つことの利点，あるいは，ソビエト軍の実際の配備状況などを具体的数字をあげつつ説明された。

また，在日米軍が果たしている役割や，日米の協力関係，日本の防衛のあるべき姿などについて話をなさった。講演後，質疑応答に移り，学生からは，日本の防衛努力の評価について，ソ連の日本侵略の可能性について，などの質問があった。キャリアに裏づけられた氏の分析には重みがあり，また，氏は私たちの質問に対して一つ一つ丁寧に答えて下さった。氏の意見は，アメリカ人学生といえども，ただちに賛同を得るものであったとは言い難かったが，私たちに考えるべき多くの材料を提供してくれた，大変有意義な講演であった。

続いて，小グループに分かれてのディスカッションとなった。各グループでは様々な議論が活発に交わされた。日本の，より一層の防衛努力を求めるアメリカ人学生に対し，日本人学生が，日本の防衛力増大がアジア諸国に与える脅威や，非核三原則などを根拠に，反論をする場面も見られた。

私たち学生が，国家の安全保障というかなり専門的な問題を討論するのは非常に困難なことではあったが，未熟ながらも，私たちなりに，建前でなく，本音を率直にかつ真剣に交わす機会を持てたという点で，大変貴重な経験だったと思う。

戦争をなくすことは，あるいは不可能なのかも知れない。また，現在の世界の情勢からすると，軍備は，積極的に肯定はされないにしても，少なくとも必要悪であるという意見も，十分説得力がある。

しかし，それでも私たちは，なお，平和，軍縮の可能性に向けて努力しなければならない。なぜなら，いかなる状況にあっても，希望を失わず，努力することこそ，最も崇高な使命であると思われるからである。

最後に，この企画の担当者ロバート・シグラーと岡崎淳，そして貴重な時間をさいて私たちに講演をして下さった内田氏，ホルコム氏に感謝の意を表して，筆を置くこととする。

（山本晃一）

ジャパンナイト

みんなが集まって３日目の夜がジャパンナイトだった。日本側の学生からアメリカ側の学生たちへの感謝と友好の意を示すイベントである。ホールに集まったアメリカ側の学生を前にして，舞台に上って様々なパフォーマンスを繰り広げた。それはちょっぴり日本的で，これらの出し物を通じて，僕らのことを知ってもらおうというものであった。

タカコ（小堀）の司会で始まった。「はーい，みなさん。ジャパンナイトへようこそ。今晩はぞんぶんに私たちのショーを楽しんでいってください。」

まず初めは，日本古来の神楽の１つであるさんばそう（三番曹）を踊った。舞台に上った20人は，大太鼓や笛や謡に合わせて，激し

くそして元気に踊り狂った（謡や太鼓の音とかはテープに吹き込んだのを使ったんだけど）。カッツン（今田）やヨウイチロウ（毛利）は，羽織袴を着て，左手には扇を，右手には鈴木を持って，その踊る姿は，あたかも幻想の世界から抜け出た神々に付添う小僧のごとくであった。

次にコウイチロウ（渡辺）が空手の型を見せてくれた。彼の繰り出す手や足の動きや大きなかけ声（「えぃや，とぃや」）は，みんなを魅了した。その後で，ヨシエ（島岡）とナオヤ（服部）が少林寺拳法の実演をした。「少林寺拳法は，単に肉体の修練ではなく，精神の鍛練である」などと言わんばかりに，緊張の漲る姿であった。

日本の童謡の紹介もした。ふえで「荒城の月」を吹いて，「夕焼け小焼け」や「しょうじょ寺」をみんなで合唱した。何度も予行練習をしたにもかかわらず，「夕焼け小焼け」を「赤とんぼ」のメロディーで間違って歌い始めてしまい，愛嬌を振りまいた。ヒサシ(斉藤）が「そうらん節」を歌った。彼はみょうに浴衣と手拭が似合う。

関西のみんなが中心となって，英語で「吉本新喜劇」を演じた。関西のギャグがアメリカでどれほど通じるか不安ではあったが，実際には，場内は割れんばかりの爆笑の渦に包まれた。

今日の日本の状況をもっとも的確に表すものは「カラオケ」である。当然，僕らはカラオケをした。アツシ（吉田），シゲ（奥村），ハッティ（服部）は少年隊の「バラードのように眠れ」に挑戦した。彼らの見せる本物の少年隊に勝るとも劣らない歌と踊りは，会場全体から大きな拍手喝采を浴びせられた。女性陣の自分たちで振付けした光ＧＥＮＪＩの「パラダイス銀河」も華やかであった。

それから，浴衣美人コンテストのことを書かねばなるまい。選ばれた男性たちが浴衣を着て化粧をして舞台に上った。男装したミユキ（北郷）がインタビューした。「好みの男性のタイプは？」「美容のために何をしてますか？」はっきり言って異様な雰囲気であった。アメリカ側の学生たちに投票してもらった結果，カッツン（今田）が圧倒的な強さを見せて優勝した。

そして，いよいよ最後が近づいてきた。そこで僕らは盆踊りを踊った。初めは席に座っていたアメリカ側の学生たちも，東京音頭の音楽に合わせて，一人また一人と立ち上がり日本側の踊りの輪の中へ加わり，最後には，日米一体となって全員で踊った。

こうして，僕たちみんなはお互いの友好を深めることとなったのである。ジャパンナイトは楽しく幕を閉じた。

（服部　崇）

農場見学

「ハイ，ハイ，ランチ・ツアーですよー。」ランチ・ツアーって言うんだから，きっと皆んなでどっかに一緒にお昼ごはんを食べに行くのだろうと，いかにも女子大生らしく思ってました。でも書いてあるのを見れば，ランチのラは lunch のラとは大違い。Raでした。耳を凝らして聴いても解らなかったんだけど……。お昼ごはんのツアーでないとすると何のツアーかなって，辞書を引くと頻出単語マークがついていて，大農場っていう意味だって。そう言えば，ずーっと前に観た西部劇で，クリント・イーストウッドか誰かがなーんにもない，ただブッシュが僅かばかり生えてるだけのような平原を幾日も馬の上で過して，やっと辿りついたところで見上げるのが，○×RANCHって書いてあるアーチ形の農場の入口があったでしょ。

さて，ダラスの郊外の方には，まだまだ，free land，つまり1988年の今も，誰の所有権にも属さない土地で，その土地に10年以上住めば自分のものになると言うアメリカ大陸の一部が残っているって知ってましたか。〝free〟land……！気分は今だに開拓時代だねー。とある種の感動の気持を抱きながらRanch 行きのバスの窓にひっついて外を眺めていると，あぁっ「映画の場面に出てきたようなアーチ形の門！」が見えました。

着いた ranch は，だけど，大変現代的に経営されてるようでした。大資本が競走馬を育成しているそうで，立派なオフィス付きの馬舎には，イーストウッドのまみれていた埃くさい雰囲気を捜し出すことは出来ません。ダラスは暑くて，乾燥しているので，植物は育

ちにくいのだけれど，ダラスに住む人たちはかなり多額の費用をかけて水を撒き，樹を植え，緑を造り上げているんですよと，何人かのダラスッ子に教えてもらいました。

小綺麗に整備された馬舎の片隅に，四角いファンの取りつけられた，四角く囲い込まれたところに，伊勢神宮か上賀茂神社に御丁寧に縛りつけられている「神馬」のような感じのする白い馬がいました。怪我をして気が荒くなってしまったという、その雌馬の，壁を強く蹴る音が，馬が好きな私のはしゃいでいた胸の中に痛く響きました。

外へ出ると，広い牧場はどこまでが柵で囲まれているのかわからない程にのんびりと草原が広がっています。ぼーっと，足の早い大阪人にもまれながら阪急の梅田駅の辺りを，そう長くもない脚で，しゃか，しゃか急いで歩いている自分の姿が頭の中に浮んできました。〝ところ変われば，品変わる〟。人の気持ちも変わるよね。ダラスで会った人たちは，住んでるところが，ひたすら open だからか，心もやっぱり，ちょっとゆったりサイズだったなあって感じたのは私だけじゃなかったでしょうね，きっと。　（市川ひろみ）

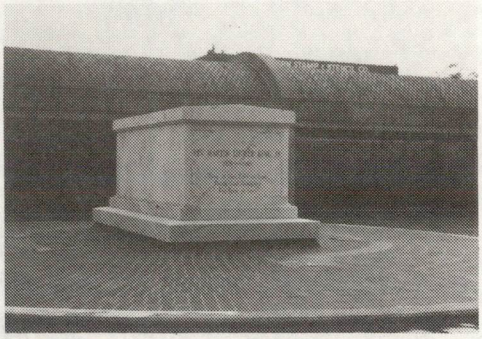
7月28日，農場見学の後，そこからバスで「サークル・R・ランチ」に向かいました。

到着して私達に手渡されたのは，テキサス州の旗の上に「日米学生会議」とプリントされたスカーフでした。皆，思い思いに頭や首に巻いたりして，早速，大空の下での遊びに励みました。まず，一番人気のあったのは乗馬でした。6人ずつのグループでランチを一周するため，他の人々は，バレーボール，プール，ヘイ・ライドのどれかに別れました。ヘイとは干し草のことで，ヘイ・ライドは，四角に固まっているヘイがいくつも乗ったトラクターの荷台に乗り込み，そのヘイに腰掛けガタガタとランチを一周するという何の変哲もない遊びなのですが，童心に帰ったように，皆とてもはしゃいでいました。トラクターはそのだだっ広い芝生の上だけでなく，砂利道のような小道や丘の上を走り抜けるので，荷台から落ちそうになっては，きゃあきゃあ騒いでいました。しばらくすると，食事が用意できたということで，広くて屋根の高い丸太小屋に入って，バーベキュー風の食事をいただきました。勉強の後の疲れとは違い，遊びの後の疲れは却って食卓を活気付けていたようでした。食事が終ると，乗馬の順番待ちだった人々は，やっと順番が回ってきて，日が暮れる前にのんびりとした乗馬ができました。

食後のメイン・イベントは，スクェアー・ダンシングで，日本であるとすれば，キャンプ・ファイアーの周りでするフォーク・ダンスといった所です。これは，もっとスピーディーで，8人グループや全員で列になってやったりするので，慣れるまではぎこちないですが，覚えてしまうと結構楽しいものでした。不思議とアメリカの学生達は身についているように，ほとんどの人が振りを知っていたのには感心しました。アメリカ学生の「ノリ」には，ノリの良さには自負している私でさえ，全く脱帽してしまいます。帰りのバスで熟睡していたのは，私だけではないはずです。

（木下　綾）

アトランタ（7月30日～8月4日）



宿泊地：ジョージア工科大学

ふるさとコロキアム

ふるさとコロキアムは，7月30日午後，アトランタ郊外のジョージア工科大学に於いて行われた。

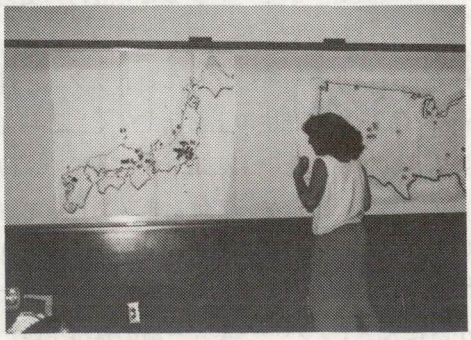
今回の会議で，〝コロキアム〟と称する企画はこの「ふるさと」の他，「男女」，「ヒーロー」の三つがあった。〝コロキアム〟の特色は，身近な話題を通して各参加者の個人的な体験・意見を交換することにある。日米の学生80人が一堂に会しながら，正装が要求されない（講演者を招かない）点も，〝分科会〟や〝フォーラム〟とは性格を異にしている。概して〝コロキアム〟は最も打ち解けた雰囲気の中で行われ，等身大の日米相互理解に役立ったようである。また，これらの個人レベルの理解を通じ，両国の文化・社会といったレベルの理解も大いに深められた。

蛇足ながら，コロキアム当日は午前5時起床で空路ダラスから当地へ到着したばかりであった。参加者の疲労を考えると，こうした日にコロキアムを企画したことは実に適切であったように思われる。

次に，当コロキアムの主題である〝ふるさと〟について一言触れておこう。日本語の〝ふるさと〟は英語に訳しにくい言葉の一つとして有名であるが，当コロキアムでいう〝ふるさと〟とは英語の hometown に他ならない。人が生まれたか，或いは幼年時代を過ごした町のことである。したがって，兎も小鮒もいない都会であっても一向に構わない。それどころか，日本語の〝ふるさと〟とは何であるかということさえ，当コロキアムでは全く省みられることがなかったことを付記したい。

コロキアム前半は，日米各4カ所の土地のスライドによる紹介であった。まず，米側は Kendra Yoshimoto がハワイ，Michael Walsh と Suzanne Kounkel の2人がコロラド州ボールダー，Kim Milone がニューオーリンズ，Madeleine Adkins がサンフランシスコを紹介した。次に日本側は，岸道信・鬼頭三樹恵・服部崇・八木樹の四人が東京，藤原泰子と市川ひろみが京都，鈴木康弘が長崎，渋谷恵が山形を紹介した。

Kendra Yoshimoto の発表は，ハワイア



ン音楽で始まり，彼女自身のナレーションも既にテープに吹き込まれた手の込んだものであった。また，ボールダーの２人は発表後名産のミント・ティーを全員に配布した。米側の五感に訴える発表には学ぶところが多かった。

日本側では東京の山谷地区の紹介が主として東京居住者の関心を惹いた。また，前回の会議で長崎を訪問し，今回も長崎から原爆の被爆者を平和と安全保障フォーラムに招いたせいか，長崎の発表に対して米側は興味をもったようである。山形の紹介では芭蕉の俳句の英訳をめぐり論議に花が咲いた。

コロキアム後半では，参加者全員が日米の地図上に自分のふるさとを示す小旗をたて，ひとりひとり簡単にふるさとを紹介していった。地図が小旗で埋め尽くされて，ふるさとコロキアムは幕を閉じた。　（奥村茂三郎）

ホストファミリーとの夜

アトランタに着いて２日目の夜，私達参加者は２人づつペアーになってアトランタの家庭に招待された。家でディナーを共にしたり，レストランで食事をごちそうしてもらったりと，もてなし方はその家庭によって様々であった。

私はアトランタで一番高いタワーの最上階にあるレストランに連れていってもらった。ホストは弁護士をしている　Joe Sullivan　という紳士で，うまくない私の英語を辛抱強くきいてくださり，日米文化の違いや政治についてとても興味深い話をすることができたと思う。食事の後は，アトランタの町のドライブして，あちこち案内していただいた。

たった一晩のことだが，全く見知らぬ子を預り，もてなすことは大変なことである。しかしそれをごく自然に，微笑みながらやってしまう人々の心の広さに本当に感激した。

アトランタは決してきれいな町とはいえず，あまり好きになれなかったが，そこに住む人々のやさしさは，いつまでも忘れない。　（鬼頭三樹恵）

人権フォーラム

世界人権宣言が国連で採択されてから，今年で40年が経過したことになる。その間，法の整備，各地における人権運動の高まりにより，世界の人権をとりまく環境は，すくなからず前進したといえよう。とはいえ，すべての人が人権を享受する状況とはほど遠い，ということも事実である。

以上のようなことを考えたとき，私たちが今年，アメリカにおける公民権運動の拠点であったアトランタ，そしてその中心的指導者

であったキング牧師の記念センターにおいて人権フォーラムを開催できたことは，非常に意味深いものであったと思う。

フォーラムは，

① 日本側からの問題提起

② アメリカ側からの問題提起

③ 講演（NAACP代表）

④ グループ・ディスカッション

⑤ M・L・キングセンター見学

によって構成された充実した内容をもっており，私たちは，様々な観点から人権について考えることができた。

午前中は，日本側人権フォーラム担当者により，日本における人権状況についての幾つかの問題点が指摘された。始めに基調演説がなされ，人権の理念を知ること，そのうえでなおも存在する差別を知り，その歴史的，社会的，文化的背景から差別の本質をえぐりだすこと，更に一人の人間として，自らの問題として考えていくことの必要性を訴えた。きれいごとを言うのは簡単である。しかし，自分の心のなかにも巣くっていることを否定できない差別や偏見の意識と，どう対峙していくかが問われたように思う。

以上のような問題意識のもとに，部落，在日朝鮮人と人権，プライバシー権，外国人労働者と人権，法の下の平等―定数是正問題を通して―，男女差別などの問題が各発表者より提示された。

部落に関わる問題については，その歴史的背景，現在の状況が説明されたあと，発表者自身がどう思っていたか，また，これからどのように考えていったらよいのか，が述べられた。単に知識を与えるための発表ではなく，私達一人ひとりの心に訴えかける内容であった。アメリカ側の学生からは，人種，宗教，性別などによる差別ではないこのような差別がどこから生じたのか，なぜなくならないのか，などの質問が多かったようである。在日朝鮮人と人権問題については，発表者自身の高校時の体験を通して，偏見がどのように広がっていくかが語られた。差別の構造を歴史的，社会的に探ろうとする試みもなされた。外国人労働者の受け入れの問題を通して，日

本と第三世界との関係，単一民族国家と多民族複合社会，発展途上国の文化・人々に対する私達の蔑視意識が問われたことも印象に残っている。差別と偏見に関わる日本の状況を考え，改めて問題の根の深さを感じた。一方，差別だけが人権侵害ではない，人権はいろいろな形で侵されているのだという観点より，プライバシー権，議員定数の問題が提起された。

この後，アメリカ側の発表を前に休憩時間が持たれたが，あちこちに輪が広がり，白熱した質疑応答，議論が行われているようであった。私も，日本の現状について聞かれたが，知らないことも多く，自分の意識の低さを改めて感じた。まず,「知ること」から始めなければならないという思いを強くした。

人権が本当に守られるためには，まず私達一人一人が，人間の尊厳，自他の自由と平等についての確固たる認識を持ち，学習しあって，身近なところから実行していくことが求められよう。本フォーラムが，そのひとつのステップとして意義あるものであったことをうれしく思う。　　（渋谷　恵）

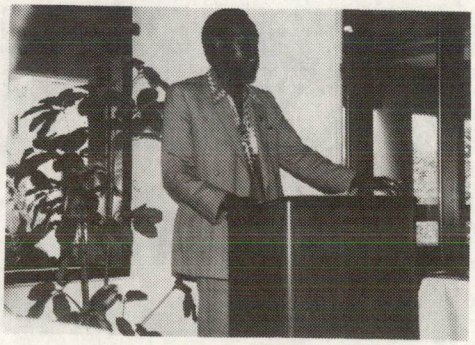
米側からもアメリカの人権問題をめぐるいくつかのテーマについて発表が行われた。公民権運動について，家なき人々の問題について，同性愛者に対する偏見について，などアメリカ社会の実情を反映する問題が取り上げられた。また，ユダヤ系の学生が反ユダヤ的感情について，アジア系アメリカ人がアジア系問題について，インディアンと結婚した娘さんを持つ学生がアメリカインディアン問題について発表するというように，当事者意識が鋭く感じられたのも印象的であった。最後には，人種問題が深刻であるといわれる南部の出身の白人学生によって，人種問題をめぐる困難な状況や人種的偏見に陥ってしまいがちな現実が自分の体験から話されたり，人種問題解決に向けてのいくつかの可能性が論じられたりした。それをうけて，黒人として唯一人の参加者の学生から，人種問題についての思いや自分の差別されてきた体験が語られたが，終わりになって感情が一気にこみあげてきたのか彼女は泣きくずれてしまった。すかさず，仲間達が彼女のもとに駆け寄り，やさしく慰めいたわる光景があった。それは，美しく，強きものであった。

また，全米有色人種発展協会（NAACP）からシンホースター氏をお招きして，人種問題の改善運動に実際に取り組む人の立場から，お話をしていただいた。

その後，キング師の遺品が展示されたキング・センター内を見学し，彼の生家や墓地，ゆかりの深い教会などを訪れた。

そして締めくくりに，小グループに分かれて，卒直に意見を交換する活発なディスカッションがおこなわれた。人権フォーラムはこれにおいて，終了した。

我々日本人には，人権問題をあまり身近に考える機会は少ないが，人権フォーラムは，準備期間から，そのような我々の態度を反省することから始まった。そして，人権の問題



を自分達の問題として捕えようとすることが，常に考え取り組むべきテーマとなった。キング師が公民権運動を闘ったアトランタの地のキング・センターにおいてなされた人権フォーラムは，アメリカが戦ってきた，そして今も戦っている人権問題というものの重みを，我々の胸に強烈に刻印するものとなったように思う。私は，アメリカを安易に崇拝するような人間ではないが，次の二点において最大級に尊敬し感服する。第１に，異質なものに対して寛容で開かれていること，あるいは，少なくとも寛容であろうと努めてきた点であり，第２に，人権の実現という高き理想を掲げ，それに向って近づいていこうとする姿勢である。それは，偉大な伝統である。

坂本義和氏によれば，国連の議論の軸は，平和から開発へ，そして現代，人権へと移ってきたという。何のための平和か，誰のための経済開発かということが問われてくると，人権の実現が究極の目標として前提されていることがわかる。つまり，平和や開発といった価値は，人間が人間らしく生きる権利の実現の為の必要条件として位置づけられているのである。

核兵器の脅威，環境問題と貧困の問題，そして社会的差別抑圧の問題は，すべて人権に対する深刻な脅威である。この，地球的な問題に対して必要であるのは，国境をこえた市民の協力による，下からの地球的人権の確立であるという。

人間が人間らしく生きること―これは，あまりに当たり前なことだが，これ程大切で，そしてこれ程実現が難しいことはない。

◇　◇　◇

「人々はそれぞれ違うのだ，それでいてそれぞれ尊厳をもつのだ，という単純な命題。」

「人間的な苦闘に対して共感を抱き，あたたかい思いやりを寄せることが大事である。」

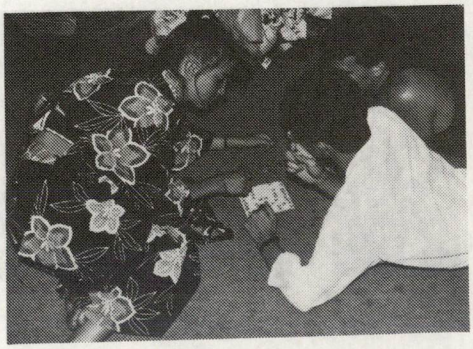
地域研究の基本として，ある人が述べたものである。加えて我々は，次の点をしっかり肝に銘じなければなるまい。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから，人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」（ユネスコ憲章　'45）

（児島芳樹）

ＪＬＣ（ジャパニーズ・ランゲージ・サークル）

８月１日，午後８時頃。場所はアトランタ州，ジョージア工科大学のドミトリーホール。外の凄まじいスコールにも拘らず，内では80人もの学生が集まって大騒ぎをしている。そう，ここはＪＬＣ（ジャパニーズ・ランゲージ・サークル）の会場なのである。日本側の学生が，アメリカ側に日本の文化体験をしてもらうため，用意した。



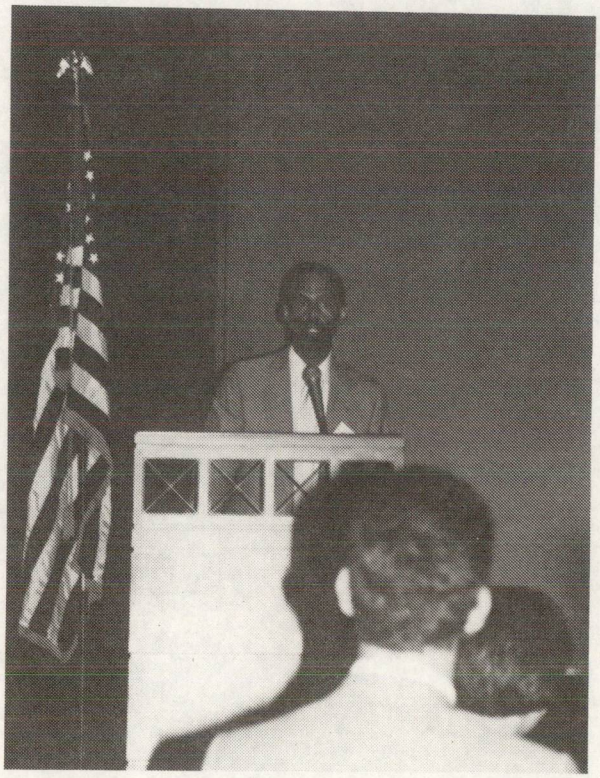
ぐるっと会場を見渡してみる。隅の方で浴衣や袴を着て走り回っている一団がいる。その手前では，慣れない手つきで習字に取り組

んでいる微笑ましい姿がある。どうやらアルファベットで書く自分の名前に漢字をあてて練習しているらしい。指導にあたっているのは，かなりの高段者の様だ。おやっ，中央で取っ組み合いが始まった。先程迄，空手の基本練習をしていたはずだが，早速実践に移ったのであろうか。近くで，日本茶をすすっていたアメリカ人も，折り紙を丁寧に教えていた日本人も，一瞬のうちに観戦に加わった。もう，会場中やんややんやの大騒ぎである。しかし，どんな時でも冷静な人間はいるものだ。周りの騒ぎを外に，真剣に討論を交して

いる一群がある。話題の中心は「言語について」。日本語のていねい語の使い分け方から始まって，その背景となる文化論にまで発展

アトランタ・ベルサウスの昼食会

8月3日，アトランタで私達日米学生会議参加者は，ベルサウスの昼食会に招待された。外の暑さが信じられない程の涼しい室内で，次々に運ばれてくる料理に舌つづみをうち，おしゃべりを楽しんだ。



食事もほぼ終わり最後のコーヒーを飲むころ，アトランタ市代表のマイケル・ローマックス氏のスピーチが始まった。彼自身の人種差別を受けた経験をもとに，人種差別がどんなにひどいことであるか，差別はなくさなければならないということを，ゆっくり，淡々と彼が語っていくうちに，会場内はしんと静まりかえっていった。そして彼のスピーチが終わると拍手の渦。皆立ち上がり，ある人々は涙をうかべて拍手をし続けた。

知識としてしか人種差別をしらなかった私にとって，彼のスピーチは実に多くのことを教えてくれるものであったと思う。

昼食会の後，握手を求める私達に優しい笑顔で応じていた彼の姿がとても印象的だった。　（鬼頭三樹恵）

している。

それにしても，もう10時をとっくに回っているのに，誰も気にしていない。コマやけん玉，折り紙，ＶＴＲ，絵葉書，浴衣，皆自分の気に入ったところから離れようとしない。あちらこちらから聞こえる話し声やドタバタ音の合間を，賑やかな笑い声が走り抜ける。会場は実に楽しい雰囲気で満たされている。今迄，何となく残っていた日米の学生間の緊張も，ここに来て一気にほぐれたようだ。

ＪＬＣで盛り上がりすぎて，その後予定されていたＡＬＣ（アメリカン・ランゲージ・サークル）が延期になってしまったのは，失敗であったが，とにもかくにも，今回のＪＬＣは大成功であった。

（島岡良衣）

キャンプ（8月4日～8月6日）

宿泊地：ノースカロライナ州ブローイングロックキャンプ場

キャンプ

We need food！

We need food！　の大合唱。

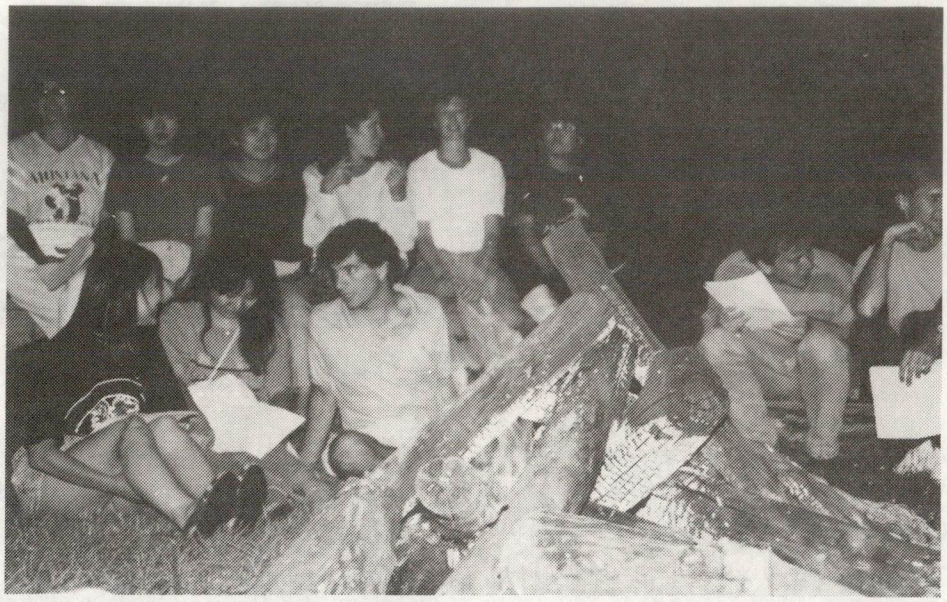
とは言っても，アフリカ難民救済キャンペーンではない。アトランタのジョージア工科大学を出て，ノース・カロライナのキャンプ場に向かう2台目のバスの中での話。

運転手が土地に不慣れなのか，道路標示が不親切なのか，Uターンしたり，道をきいたりで，気がついた時には先に出発したバスが見えなくなっていた。1時。2時。お昼の時間はとうにすぎたのに，お弁当をつんだ前のバスに追いつけない。朝から何時間もバスにのりつづけでお腹のすいた私達は（朝食を食べ損ねた人も多かったから）かなり不機嫌になっていた。そこで突如わきおこったのが，We need food！だったのだ。

もちろん，叫んだところでおなかがくちくなるわけではないが、

「じゃ，これ最後の食糧ね。1人½個ずつ取って。」

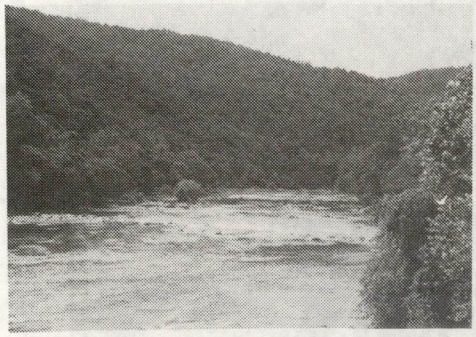
なんて言って，小さなクッキーの袋を回してくれる人がいたりして，みんなで笑いころげるとずいぶん気は軽くなった。1食や2食ぬいたところで死ぬわけでなし，まったく大

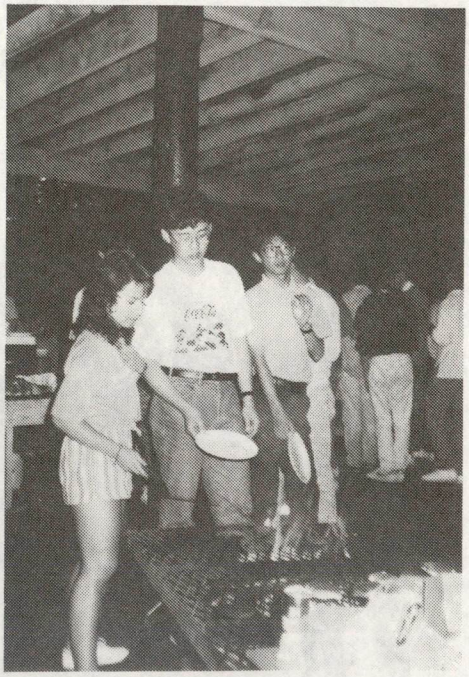


げさで，陽気で，いかにも〝アメリカらしい〟ストレス解消法だ。We need food を冗談にできる裏には，豊富な食べ物と，その食べ物を手に入れられると信じる余裕がある。わずか40年前の日本で，いや現在でも食糧事情の逼迫した場所で，同じ冗談が通じるだろうかと，ちらっと考えたりした。

キャンプ場ですごした8月4日から6日にかけての3日間は，バスの座席と水のイメージと共に思い出すことができる。

実際，バスにはうんざりするほど長時間乗った。キャンプ場に来るまで。オプショナルツアーの川への往復。キャンプ場を出てワシントンＤＣにつくまで。合計すると20時間位になるだろう。日本列島を継断する位の距離を走ったかもしれない。これだけの大移動を





バスでやる感覚はすごいと思う。

キャンプ場の記憶が水に結びついているのは，地形と地形から来る気候のせいだろう。上から照りつける太陽と乾いた空気のダラス・アトランタで10日間をすごした後では，湿気と涼風が夏の信州を思い起こさせて，心地良かった。

来る途中に，バスの窓を洗うように降った雨。(小気味のいいくらい豪快に降った。)

夕食用のソーセージやハンバーグを焼く横で静かにふり出した雨。（だんだん薄暗くなる屋外の屋根の下で，かすかな雨の音が，みんなで歌ったキャンプソングの合間にきこえた。）

屋内プールにこもった生温かい水蒸気。(雨のため，計画していたバレーボール大会はお流れ。１日にできなかったＡＬＣ（アメリカン・ランゲージ・サークル）として，プール横の広間で，ダンスを教わったり，ゲームに興じたりした。)

山の中で水圧が低いために，ひねってもひねっても全然水の出てこなかったりする蛇口。（シャワーはともかく，トイレの水が流せないのは参った。）

川下りの際にあがった水しぶき。（１人乗り又は４人乗りのゴムボートで川を下った。浅瀬にのりあげたり，オールを流したり，水をかけあったり大さわぎだった。）そして，キャンプファイアーを囲んで話しこんでいるうちにいつの間にか周りの草の上に落ちていた夜露。……

朝，顔を洗う時に，「ひょっとすると，この水は，あの時の夜露かもしれないな。」とふと思ったりすることがある。

水はどこにあろうとH_2Oであって，地球上をいろんな形でめぐっているのだとしたら，どんな人間でも60%は水分なのだとしたら，――ぼくらは確実につながっている。

―もしかしたら，今日，ぼくが顔を洗った水が，何年か後にアメリカの雨になるかもしれない。――

（増田行子）

ワシントンDC（8月6日～8月11日）

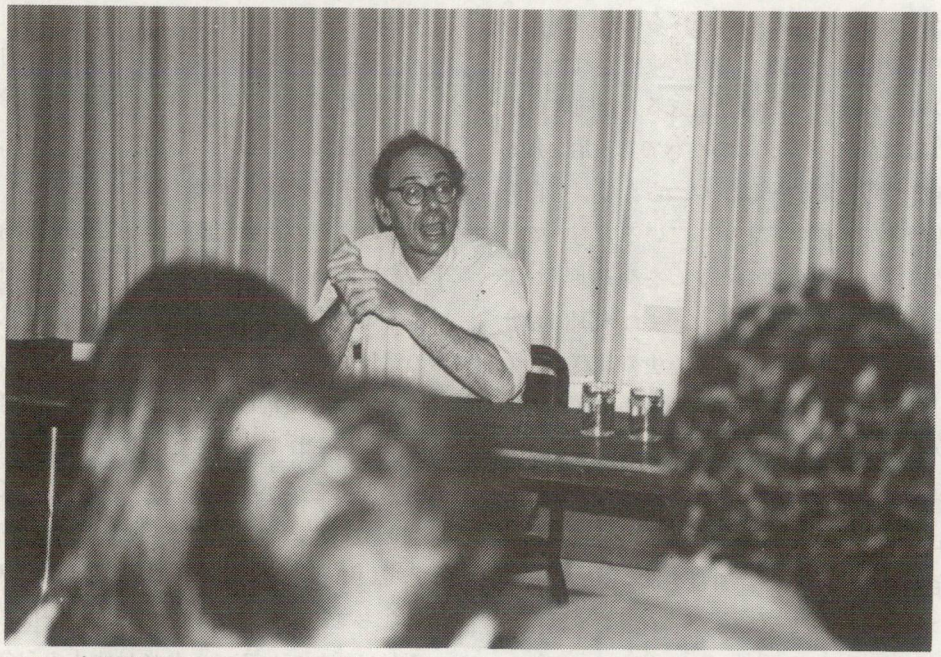
宿泊地：ジョージタウン大学

民主主義フォーラム

民主主義フォーラムは，8月7日，上空を飛行機が頻繁に飛び交う，ワシントン郊外の設備のいいジョージタウン大学で行われた。午前中はまず，政策研究学会の共設立者であるマーカス・ラスキン氏を招いて始められた。研究学会では，特定の領域にこだわらず，国際紛争，国際経済，軍国主義や軍縮，政治システムなど，様々なテーマについて研究を行い，議会でのロビー活動や議員の質問や発言を助けている。政権に対しては批判的な立場に立っている。氏は研究所の概略を簡単に述べた後，すぐ質疑応答に入った。

経済的立場からのKevin Wheltonの質問に対し，氏は軍事支出は長期的には経済活動に悪影響を及ぼすもので，日米両国ともインフラストラクチュアに力を入れ，軍事費は削減していくべきだと述べた。Constance Chen の人権，人種問題，政治参加の均等化について質問に対し，氏は，我々が科学技術の分野で既に体験しているように，次の一世代の間に社会構造の大きな変革が起こり得ると述べた。また軍事支出を切りつめれば，所得の再分配も可能であるし，資本主義も社会主義も超越されるべきエピソードとして語られるであろうと述べた。上からの押しつけでなく，話し合いによって個人の意識を変革することが重要であり，成功例として，米国における女性解放運動を挙げた。大きな政府，小さな政府についての山本晃一の質問に対し，過去においては貧困層の政治的圧力が小さかったため，富める者の論理でのみ経済が運営されてきたが，次の世代においては市民の政治参加を強めた上で政府の支出を増やすべきだと述べた。

Joseph Willemssen は，再分配に軍事支出分を当てるのはソ連の外圧もあり現実性がないのではと質問した。氏は現在のペレストロイカを信じているし，米国においても冷戦の終結と社会の再構築といった考えが必要であると述べた。また，冷戦や，朝鮮・ベトナム戦争における勝者は西独と日本であるとし米国はもっと再構築を目ざし，オゾン層などより地球的規模のものに目を向けるべきだと述べた。斉藤尚は米国が利己的になり，日本にのみ軍事支出を望むのでは，と質問すると，氏は日本の政府に外圧に屈しない事を望むし，日本が軍備を強化すれば，アジア人の反感をあおり，ソ連に対し脅威になるばかりだと述べた。最後に氏は，米国民として原爆の事を申し訳なく思っているので，日本人も中国，韓国などに対し，そのような気持ちを持って，過去の歴史を乗り越えることを望むと述べた。

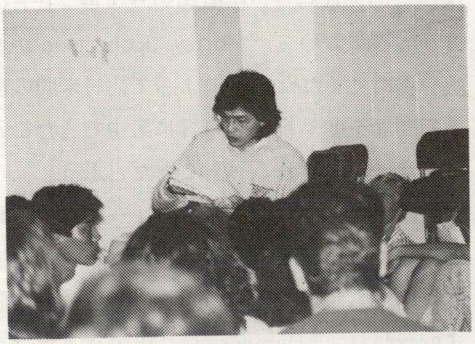


続いて，小堀貴子の司会で，日本側タスクフォースの発表が行われ，はじめに本田雅俊が民主主義の起源，歴史について発表した。次に新田陽子が天皇制と日本の民主主義についての発表を行い，国事行為のみを行う現在の天皇についてとその権限を強めようとする力があることなどを説明した。続いて豊田牧子が，一見一党独裁的に見える自民党支配も，国民の選挙ごとの判断が民主的に反映された結果であると述べた。原秀樹は文部省の教科書問題について触れ，憲法に反する検定制度が，戦争や核，原発などの問題と著者が相対する機会を奪っていると述べた。島岡良衣は，大学を中心とした学問の領域における封建主義的体質について，利根川進博士の例をあげ，頭脳流出の危機について説いた。出口真紀子は民主主義におけるある程度の妥協の重要性について述べた。次に鬼頭三樹恵，塚本亜希子，斉藤尚が先にダラスにおいてなされた民主主義についてのアンケートの分析結果について発表した。両国とも国内の差別の存在をほぼ全員が認めており，選挙に毎回行くかについても同じ70％がYesと答えたが，特定の政党の支持については日本側が18％，米国側43％がYesと答え，その差が顕著だったが，これには大統領選を間近に控えていることや米国では二大政党制があることが原因として考えられた。裁判官を選挙で選ぶべきかという問いについては，日本側41％，米国側26％がYesであった。また両国とも，60％の参加者が，自国を民主的だと思っていることもわかった。このアンケートは両国語における定義の違いや，政治制度の違いによって解釈の違いもあり，集計も困難であったが興味深いものとなった。午前中のラスキン氏との質疑応答において，Morley Robertsonが通訳を務めてくれたことによって，日米間の言葉の問題を度外視して内容に集中できたことは非常に評価されるべきことだと思う。

午後はアメリカ側タスクフォースによる発表だったが，民主主義の制度における危険性についても鋭い視点を示した。発表は劇の形式で行われ，〝Democracy〟という言葉はギリシャ語の人民と統治という言葉から来てい

るということがはじめに述べられた。現在の民主主義においては，バスに乗り遅れた人とその横をハイヤーで通り過ぎる人が同等に扱われる反面，バカボンのパパでも政治参加ができるため，専門家にあやつられながら自分で政治参加していると思っている人もいて，多数のゴジラが少数のバンビを襲うような事も起こり得ることを説いた。また米国における民主主義の象徴として，憲法の言葉や歌について紹介がなされた。次に劇中のＡＢＣスープとマッシュルームスープを例にとり，大衆操作を通してＡＢＣスープだけを買わせてしまうような状況を演じた。

発表が終了すると参加者をランダムに８人ずつにふり分けてディスカッションを行なった。女性解放運動などについて述べる者もいたが，ここでアメリカ側に私達とは全く異なる〝democracy〟という言葉の認識の仕方があることがわかった。すなわち，政治的な尺度と経済的な尺度を混同し，民主主義と共産主義を対立概念としてとらえているのである。このような人々はアメリカ側の参加者の中にかなり見られ，日本側の参加者で熱心に説明する者もいたが，強固に理論的に学んだらしくあまり譲ろうとはしなかった。日本側にも少数はこの考えを持つ人もいるかもしれないが，これはアメリカ側のかなり目立った傾向といえる。



このように民主主義フォーラムの一日は過ぎたわけだが，この一日の会議を通し，日米両国の参加者とも，普段何気なく口にしている民主主義という言葉，また，何気なくつかっているその社会制度について様々な角度からの見方があることを学び，新しい視野を開いていけそうなことは確実である。一人一人の意見は異なって当然のことであるし，いきづまった時の新しい突破口はいつも多様性の中から生まれてくるものと私は信じている。高い理想をかかげてその実現を目ざして進もうとする人，あくまで現実というものを追求していこうとする人，そんな人々が混然一体となって織りなす民主主義という一反のものを私は信じている。それには個人の自覚と正しく理解しようとする努力が何よりも大切であるし，自分に絶えずつきまとう権利と大きな責任について強く意識する必要がある。既に科学は，人的な環境破壊の結果，人類の生存が今後20年ほどの間に困難なものになる可能性を示唆している。このような状況は何とか人類の英智を結集して回避していきたいものである。一世代のうちに大きな変革があるというラスキン氏の言葉を我々は信じたい。そのためには，我々一人一人の成すべき大きな責任がある。私は民主主義的な社会の運営こそが，既に背水の陣に立たされている人類にとっての選択肢であると思うし，個々の国家レベルにとどまらず，世界的な視野に立って考えていく事が急務であると思う。

（斉藤　尚）

クリフトン・バーベキューパーティー

8月7日の夕方，私達はクリフトンのライオンズクラブからディナーに招待された。場所はジョージタウン大学からバスで1時間程いった森林の中である。屋外でバーベキューをごちそうになったが，空気のせいか雰囲気のせいか，いつもにも増しておいしく感じられた。

お腹をいっぱいにした後は，バレーボール，ヘイライド，カヌーと思い思いに遊びまわり，中でもカヌーは狭い池で4そうのカヌーがぶつかりあったため，最後はみんな転覆しずぶぬれになってしまったが，それでも楽しそうにはしゃいでいた。

会議も後半に入り，毎日をスケジュールに追われあわただしく過ごして少々つかれ気味だった私達参加者にとって，自然の中で小さな子供にかえったように遊んだこの夜は，本当に良い休息であった。　（鬼頭三樹恵）

アレキサンドリア・レセプション

8月8日の夕方，分科会の野外研修を終えた我々は，少し斜めに傾きかけた夏の日が照る小粋なワシントンの街並を楽しみながら，レセプション会場であるスティーブン・サンダース・アンド・アソシエイツに向かった。

白い扉を開くと，そこでは既にレセプションが始まっていた。机の周りのイスは，ビールを手にした日米の学生が陣取っていて，その日の各々の分科会での成果を交換しあっていた。会議が始まってから，既に我々には当然の事となってしまっていた独得のなごやかさ，熱気，そして若干の青臭さがそこらいっぱいに漂っていた。白い壁にはたぶんオランダで作られた，世界最初の日本地図が飾られていた。ふと，かつてその地図を作ったオランダ人達は今日の日本の経済的な発展を想像し得ただろうか，という問いと，日本中いたる所に林立している高層建築のなかった当時の日本はさぞや美しかっただろうとの思いが同時にわきあがり，にがい思いがこみ上げてきた。

周りを見渡すと，机の周りにはさらに多くの学生が集まり，熱心に意見を交換しあっていた。

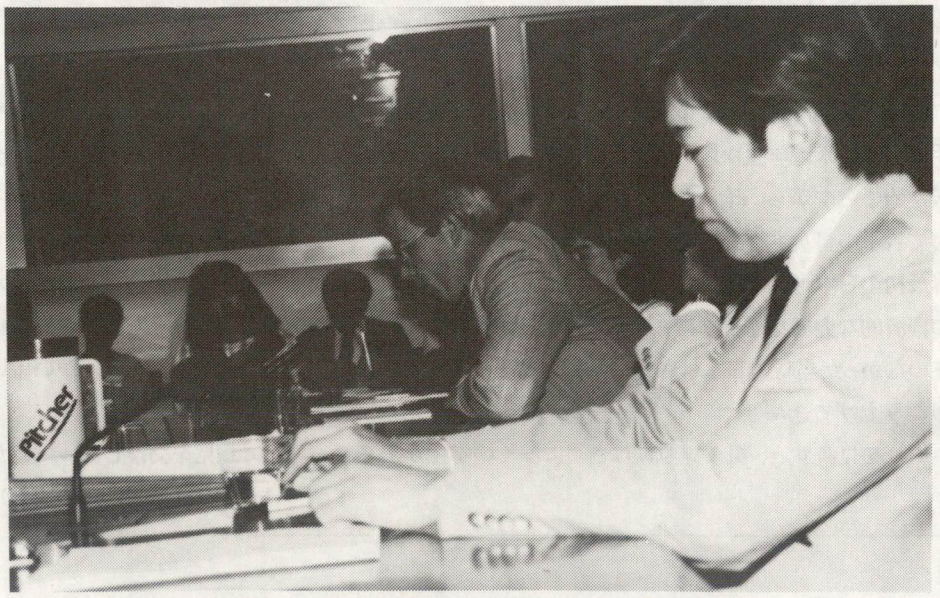
（鈴木康弘）

国務省

8月9日，この日は一日を費やし，政府関係の全体研修の日ということになっていた。この日最初に足を運んだのが国務省である。ワシントン入りしてからすっかり政治都市としての雰囲気に魅了されていた私としては，非常に楽しみな企画であった。講演者として選ばれたのはグレン・フクシマ氏，フィル・ジョーンズ氏，ジム・ドゥルハム氏の三者であり，この日のテーマは〝日米貿易問題への視角〟と設定されていた。フクシマ氏は22，23回の当会議の参加者であり，現在米国通商代表部（ＵＳＴＲ）で日米間の貿易摩擦交渉を手がけている。日本に進出する米国企業が何故容易に市場参入できないのかを考える際に，三段階の障壁が存在する。まず日本政府との摩擦だが，これは近年余り問題とならなくなってきている。次に直面するのが国内の流通機構などの構造的障壁，そして最後に日本人が自国の独自性に固執する態度が問題となる。フクシマ氏は特に最後の点を取上げ，貿易問題を文化問題にすり替えてしまうのは危険であると指摘した。

ドゥルハム氏は国務省で対日関係を担当しており，今後の見通しを短期的，長期的に分けて述べた。目下問題となっているのは日本の特許制度と流通機構であり，いずれもすぐには解決できないであろうと述べ，今後は，米国の経済的安全保障政策の強化という観点から，スーパーコンピューター等のハイテク部門での両国の競争が熾烈となるだろうとのことだった。

ジョーンズ氏はエバンス下院議員の立法スタッフであり，最近の立法動向にも触れながら日米問題を分析していた。最近可決された新貿易法案の焦点はやはり301条の内容であり，この規定によりＵＳＴＲが不公正貿易に対する報復措置決定の際大きな力を持てるようになったのである。



プレゼンテーション終了後，質疑応答の時間となった。日本に進出する米国企業は何をすべきか，ＩＴＣ（国際貿易委員会）の役割は，日米貿易摩擦問題に取り組むときに米国政府は日本の立場に立って問題を検討することはあるのか，デルモンテケチャップがカゴメと消費者団体からの圧力でその市場進出を阻まれた事例をどう考えるか，東芝ココム事件で何故日本だけ叩かれたのかといった質問が出され，三者各々の立場からの意見を聞くことができ興味深かった。

最後にフクシマ氏の，「日本は自分の国際的立場を考えて行動すべきで，外国からの圧力で被害妄想を抱きすぎるのは良くない」との指摘は心に留めておくべきであろう。

（岸　道信）

40回記念レセプション

その後，ロココ調の豪華な部屋で日米学生会議４０回記念レセプションがもたれた。国務省のオコーナー氏，米国公使渡辺氏の挨拶の後，先程の講演者，国務省，日本大使館の方を始め会議参加者ＯＢの姿も見えた。私は戦前の会議に参加した老夫婦と話す機会に恵まれたが，日米学生会議が，そして同時に日米両国がこの約半世紀の間に辿って来た歴史の重みを感じた瞬間でもあった。日米関係，そして当会議の意義・重要性を考えていく上で，非常に刺激的な時間を過ごせたと思う。

（岸　道信）

海外プレスセンター

会議のほぼ折り返し地点，８月９日に私たちは，午前中に行った国務省での興奮も冷めないまま，海外プレスセンターを訪れた。〝Foreign Press Center〟と書かれた扉から入ると同時に，カシャッカシャッとＦＡＸで次々と情報が打ちだされる音が聞こえた。外国人記者に提供される，そのＦＡＸから打ちだされたばかりの長い紙をみて，世界は刻々と動いていることを感じた。皆それぞれに壁にびっしりと貼られた様々な情報や置いてある雑誌を見たり，記者の方が何人かおられる部屋をちらりとのぞいたりしていた。

次に４人のパネリストの方を迎えてパネルディスカッションが行われた。まずパネリストの方が，自己紹介に続いて，「報道と日米関係」についてそれぞれの視点から話された。

まずはワシントンポストで建築を中心に芸術評論を担当しているフォーギー氏が文化における誤解について話された。氏自身，日本への留学経験もあり，アメリカ内でも東海岸，西海岸両方での生活経験を持ち，御自分の実体験に基づいたお話は大変興味深かった。「世界のほとんどの問題は人間に共通する普遍的なものであるが，その解決はそれぞれの文化・伝統に応じた自分たちにとって最も良い方法で行われるべきである。」という。世界の一体化，国際化などと言われる現在に，それぞれの独自の文化を強調することは時代に逆行するように思えるかもしれないが，普遍化されていく今だからこそ必要であるという気がした。

次に毎日新聞の小西氏から，日本のメディアにおける誤解について幾つかの事例をひいたお話があった。日米の報道機関は互いに，相手国での自分の国に対する批判的な動きに敏感で，日本で話題になっている，アメリカによるジャパンバッシングは日本側の情報選択の仕方から過度に強調されているという。また逆に，アメリカでも日本によるアメリカバッシングが誇張されて報道されているという。このことは，私の分科会でも話題になったことで，現実を知ることの難しさを改めて知った。

ジャパンタイムスの土井氏は，小西氏と同じテーマについて異なる視点から述べた。氏は日本の大学を卒業後，日本，アメリカ，ヨーロッパそれぞれの地でジャーナリストとして活動した経験をもつ。日米双方の事情を知る者として，両国における相手国についての情報のギャップの大きさを感じるという。そこから誤解が生じ，相互理解も難しくなる。日本の報道の特殊事情，経済力と報道の関係について話された。

最後に，外国人ジャーナリストセンターのクリムスキー氏から，新聞全般についてのお話があった。日本と異なり，アメリカには全国紙がほとんどなく，多種多様な新聞が存在する。このことは，「人種のるつぼ」とよばれるアメリカの多様な社会を映しだしているという。政府の規制を受けず，また多様性を映しだす鏡としての新聞の役割の重要性を強調された。

続いて学生側から，マスメディアを通さず，個人どうしで知り合うという当会議の経験と比較して，新聞の責任を問う質問があった。また，メディアの影響力や政府との結びつき，

日本の片寄った情報源と経済摩擦の関係についての質問があった。時間の関係で質問は数人に限られた。現在の社会とマスメディアの関係は大変興味ある問題であり，多くの人が質問をしたいと思っていたようだ。

「早くバスに乗って！」という声にもかかわらず，それぞれのパネリストの方の周りには輪ができて皆さかんに質問を浴びせていた。2時間ほどの訪問は，あっという間に過ぎてしまったが，情報の最先端に触れ，貴重な御意見を聞くことができた。最後に，お忙しい中，参加して下さったパネリストの方と海外プレスセンターの方に深く感謝したい。

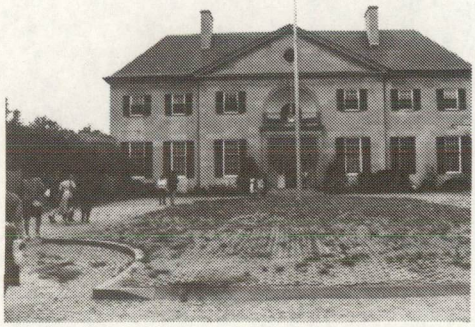
（塚本亜希子）

日本大使館

同日夕方，一行はワシントン全体研修の一環として日本大使館を訪れた。西山氏は歓迎スピーチの後，早速日米関係の問題に入られた。

テーマは，日米の相互理解であり，経済面での米国との協調の重要性を，貿易摩擦を例にとり考察した。円高による貿易不均衡・日本企業の米国進出上の問題点が取り上げられたが，日米関係だけではなく日加関係，日米とＮＩＥＳとの関係についても話題が及んだ。

日本の最大貿易相手国は米国とカナダであり，日米関係は経済的見地から日加関係と類似している。食糧や資材の輸入を考えると，三国の協調は日本の将来に不可欠である。しかし米国では，日本企業が特に自動車やエレ

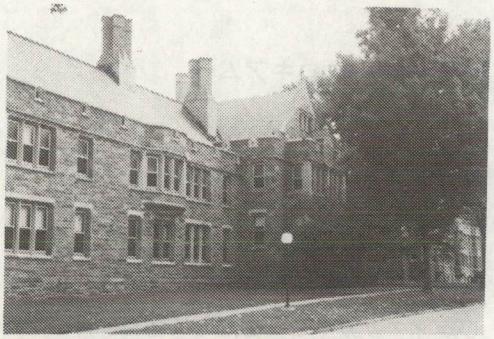


クトロニクス産業の面で，円高で不利な立場にいる米国企業を圧倒し，米国市場を独占している。西山氏はこの点に着目，交渉に交渉を重ねた日米の話し合い，しかも日米双方の企業間の協議だけでなく政府レベルでの協議の機会をもっと増やすことを協調された。日本企業の米国市場独占は，米国議会を混乱させるという政治レベルの問題に達したが，米国側が自国の経済危機を乗り切ろうと保護貿易政策に出た事実にも氏は言及され，日本製コンピューター・ミクロ装置売り込みの激化，日本の電気製品と米国のそれの相手国での特許手続の不均衡が現在の米国企業が抱える主な問題であると指摘された。輸出不振に苦しむ米国には，日本の同意・共通の将来への展望が必要である。氏はまた，日米とＮＩＥＳの関連にも触れ，新興産業国との貿易上の協力，赤字貿易を避けて貿易のバランスを保つことが今後の課題であると述べられた。

これらの問題は即座には解決できない。少なくとも今後２年間は為替相場の変化を見つめ，その特徴からどのような政策をとるかを判断せねばならない。こうした円高の差益から来る問題は，私には難しかったが，氏の具体的な例を出しての説明は大学の講義のような堅苦しさがなく，ここは日本的雰囲気のある日本大使館なんだ，という安心感も手伝ってか，私は落ち着いてお話をうかがうことができた。

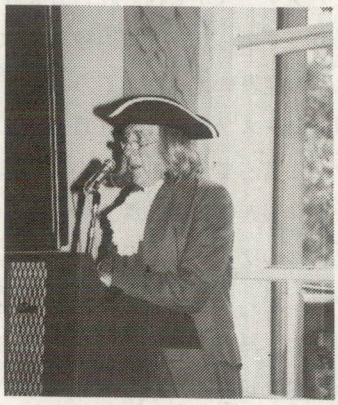
レセプションでは，日本料理（寿司・天プラ・なぜか焼売！）が出され，200個ほど山積みされた焼売はほんの15分位で全部一行の胃の中へ。私はエビ天をあまり食べられなかったくやしさから，日本酒オンザロックを流しこみ，真赤な顔で大使館員の方々とおはなししたことが，今思い出せばはずかしくもあり，なつかしくもある。英語という言葉の壁にぶつかり，アメリカという異国で緊張の連続であった日本側参加者にとっては，この日本大使館は，まるで自分達の家に戻ったような安らぎを提供してくれる場であったことだろう。　（窪田美穂子）

フィラデルフィア（8月11日～8月18日）



宿泊地：ブリン・マー大学

ベル・アトランティックの昼食会



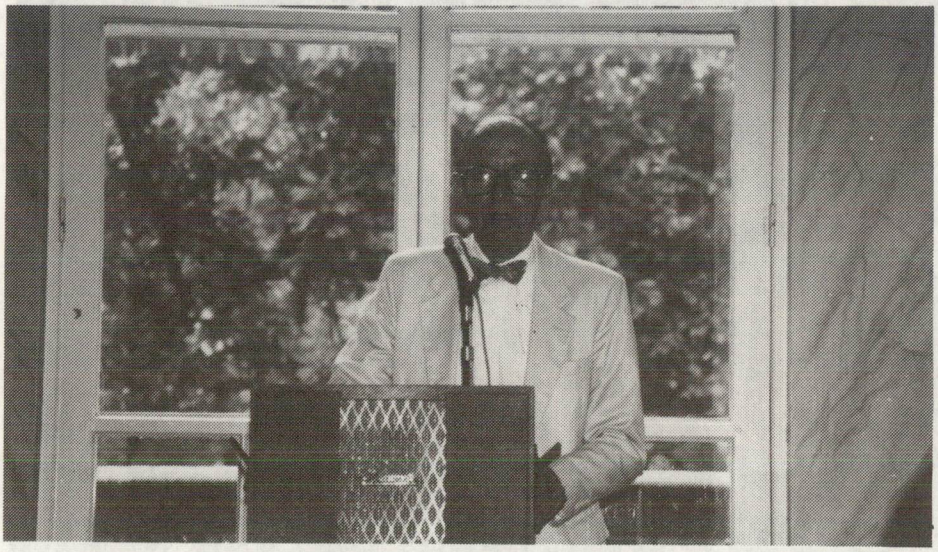
8月12日正午，それぞれに分科会活動を終えた私達は，リバティーベルを眺めながらレセプション会場のベル・アトランティックに向かった。

会場のある市内南東部は，いかにも古都らしい街並をつくっている。この会場も例外ではなく，多少古めかしいが，おちついた雰囲気を持つ建物である。それでいながら室内は明るく，オフィスビルなど比較にならない，抜群の居住性を持っている。

レセプションはまず，18世紀の衣装をまとった「フランクリン」氏が登場，ユーモラスなスピーチと親切な忠告（？）で場内に笑いを振りまく。おいしくごちそうをいただいた後は，ジャンセン博士から日米間の個別の問題もグローバルな視点から解決していくことが大事である，との講演を伺った。

最初から最後まで洗練されたもてなしを受けて，大満足のお昼を過ごした私達は，足取りも軽く，次の研修に向かった。

（岡田　治）



ヒーローコロキアム

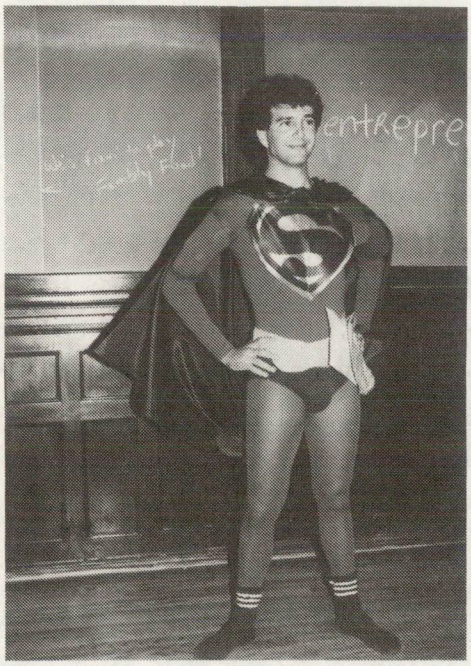
ヒーロー・ヒロインコロキアムは，最終地フィラデルフィアでスケジュール終了も近づいた8月12日の夜，行なわれた。このコロキアムは今年初めて試みられたもので，発表及びディスカッションを通じて各自の持つヒーロー観を比較することが目的であった。

日本側タスクフォースは日本の伝統的ヒーローとして「忠臣蔵」を選び，これが200年以上経った現在でもなお人気を博し続けている理由を考えてみた。まず「忠臣蔵」を知らない人達のために，だいたいのあらすじをもとにしたスキットを演じたが，前夜，初めて全員での通し稽古を行なったばかりな上に本番の緊張もあって，うち合わせ通りにはいかなかった。しかし，タスクフォースは勿論，直前に頼んだ助っ人達も皆みごとな熱演で，観客側も異様な程の盛り上がりであった。その後で「忠臣蔵」の人気がいまだに続いていること，そしてその理由をいくつか掲げながら47士が「大衆の中の英雄像」に他ならないという考えを発表した。

これに対してアメリカ側は，各自の持つヒーロー観を比較するというテーマに基づいて5人のタスクフォースがそれぞれ自分なりのヒーローについて語った。「忠臣蔵」一本に絞った日本側の発表に比べて，こちらはスーパーマンからマンスフィールド駐日大使までバラエティーに富んでおり，皆思い思いに工夫を凝らした発表が実に興味深かった。

次に8人ずつのグループに分れてディスカッションを行ない，あちこちで活発な意見の交換がなされた。私のグループでは主に，日米間でのヒーローに求める条件の違いについて話し合いが進められた。

第3部では，あらかじめ参加者に配付したアンケートの結果をもとに，ぐっとくだけた



雰囲気でゲームを行なった。これは，分科会対抗でヒーローに求める性格・能力，ヒーローの職業などについて解答数の多かったものを当てるクイズであったが，歓声と拍手で何も聞こえなくなる程の熱狂ぶりとなった。

最後におまけのお楽しみとして，アンケートで選ばれた〝Best Sleeper〟〝Best Drinker〟及び〝会議中に配偶者を見つけようとしている人〟の発表があり，興奮のうちに無事コロキアムは終了した。

くだけた雰囲気でやりたい，というのが当初から我々タスクフォースの考えであったので，その点では大成功を収めたと言っていい。また，そうした雰囲気は，各自の持つヒーロー観，あるいはそれをまとめて日米間でのヒーロー観の相違についての話し合いを容易にしたように思う。将来，このコロキアムが再び行なわれるとしたら，今度はどんな発表になるか楽しみである。

（八木　樹）

宗教フォーラム

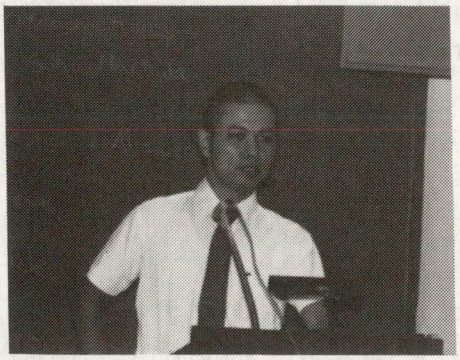
アメリカでの20日間の生活を共にした我々80名が持った最後のフォーラムは，一人一人の内面に深くかかわる宗教についてのフォーラムであった。8月13日，フィラデルフィアで行われたこのフォーラムは，仏教・キリスト教を中心として，日米における宗教・宗教観を検討し，「私たちにとって宗教とは何なのか」を考えることをその目的とした。

日本での準備段階では，一般に日本人は宗教を持っているかという疑問が出発点となった。そこで，日本人は日本人なりの宗教を持っており，それは幾つかの宗教が，個人の中で入り混った雑居的なものである，という仮説を基に調査し，日本人の宗教観について考えた。

フォーラム当日，午前の部では，日本仏教についての講演を聞き，キリスト教会のビデオを見た。まず，アメリカで仏教を研究しておられる町田ソーホー氏に，日本仏教の原理主義について，わかりやすく講演をしていただいた。日本仏教においては，経典・教義・僧は中心的役割を果たさない。人々が「人倫組織」を重視するため，寺院が崇拝の対象となり，日本仏教の根源であると述べられた。氏は，日本仏教の歴史や特徴についても言及された。統治者によって日本に導入された仏教は，次第に一般大衆へと広がっていったが，宗教が政治より優位に立つことはなかった。

そして，日本仏教は，宗派主義・階層性・尚古性・形式主義といった言葉で特徴づけられると述べられた。最後に，無我や実践を重視する日本仏教は，アイデンティティの考察や，我々の日常生活において，大きな意味を持ち得ると締めくくられた。

その後の質疑応答では，予定時間を越えて活発な質問がなされたが，氏は一つ一つ丁寧に答えて下さった。アメリカにおける禅仏教の広がりについての質問に対しては，「仏教東漸」すなわち，仏教は次第に東方へと伝わってきたと指摘された。実感主義への傾斜が言われている昨今，瞑想を手段とし，実践を重んじる禅仏教は，アメリカで広がっていく可能性を秘めていると思った。



次に，3種類のキリスト教会に関するビデオを見た。最初は，福音派プロテスタント教会であった。福音派は，聖書の無謬性を厳格に信じる宗派である。ビデオでは，人は猿と親戚ではないという内容の歌を，2人の女性歌手がポップに歌い。進化論を否定していたのが印象的であった。2番目は，メイン・ストリーム教会であり，信者が広がりすぎたために，一体性を取り戻すことが課題となっていた。最後のビデオは，黒人の教会であった。そこでは，牧師と信者が一体となり，一種の陶酔状態の中で独特な礼拝が行われていた。ともすれば，キリスト教に対して画一的イメージを抱きがちであるが，キリスト教も実に多様であるということを認識した。

宗教フォーラムの当日のみならず，準備期間，本会議を通じて，参加者と語り合うにつれて，宗教が個人個人の考えや生活に，様々な影響を与えているということを実感した。宗教は個人的なものであると同時に，社会的・文化的なものであるがゆえに，我々の思想・人生そのものに，直接的・間接的影響を及ぼす。宗教は，信じる，信じないにかかわらず，我々が真剣に考え続けねばならないテーマだと言える。　　（町田光弘）

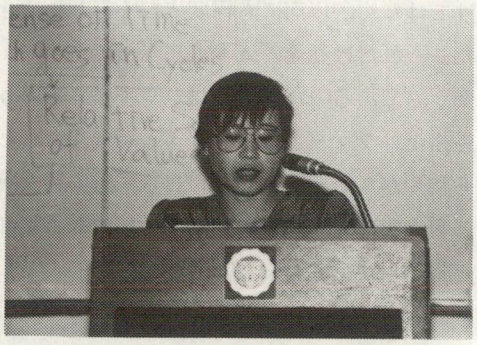
午後の部は，クェーカーについてのビデオから始まった。プロテスタントの一派であるクェーカーは，ウィリアム・ペンによって宗教フォーラムの開催地であるペンシルヴェニア州で広まった。ビデオではクェーカーの歴史や活動が紹介され，この地の出身である，Rebecca Payne が解説をしてくれた。

つづいて，アメリカ側の発表がなされた。この発表はアメリカにおける多様な宗教を紹介するとともに，その共通テーマとして「相互理解」をかかげ，各宗教における「相互理解」の意味をさぐった。Mark Hall，Veronica Brakus が，それぞれカトリックとプロテスタントを説明し，Rebecca がクェーカーとアーミッシュについて述べた。Alisa Goldberg と Kendra Yoshimoto は人形と身近なたとえ話を用いて，ユダヤ教について愉快な紹介をしてくれた。また Zachary Raley によるアメリカン・インディアン，Constance Chen によるバハイ（Baha'i・バーブ教から転化した宗教で，欧米でも少数の信者をもつ）についての指摘は，忘れがち

な少数者の視点を紹介してくれて貴重だったと思う。Madeleine Adkinsは無宗教の立場を話してくれた。

これに対して日本側は，まず長谷川智可と鈴木康弘によって日本の宗教状況の説明がなされた。そこでは，日本人によく見られる，神社におまいりし，教会で結婚式をあげ，寺で葬式を行うという，外国人から見れば不可解に思われるであろう，宗教の「雑居性」が指摘された。これを受けて町田光弘・渡辺祐貴・宇野重規が，そのような「雑居性」の説明をこころみた。日本社会をモンスーン地域における農耕社会とし，それに由来する無限包容性と相対的価値観によって「雑居性」を理由づけようとチャートを用いて悪戦苦闘した。このような文化的説明の後，岡田治は逆に真理はそのような民族・文化を超えて普遍的に存在するはずだとし，そのような真理探求の重要性を訴えた。最後に窪田美穂子・八木樹・服部直也によってキリスト教に対する疑問が提示された。キリスト教が人種差別や戦争の口実に用いられたことはなかったか，非キリスト教徒への差別意識があるのではないか，またそれは危険ではないか，などである。これはいたずらに議論をふっかけるためのいいがかりではなく，より深い話しあいのための導入のためであった。

その後の小グループディスカッションでは「私達にとって宗教とは何か」の総合テーマの下，各自の宗教観など話しあった。日頃，個人の宗教観などあまり話すことのない日本側，長い宗教的対立・差別の歴史のあるアメリカ側，双方にとって宗教というテーマは語りにくいものであったかもしれない。しかしグループによっては，「心のよりどころ」といった意味で宗教をとらえ，宗教と個人の内面の問題を，宗教と哲学・思想・科学等との比較を用いて考えるところもあった。一方，宗教の社会的役割に注目して，宗教は何をなしてきたか，あるいは何をなしうるかを考えたグループもあった。



私達にとって宗教とは何か。それを絶対の価値ととらえ，宗教なしの生活など考えられないという人から，宗教は非合理なもの，宗教にすがるのは，その人が弱いから，とする人まで多様な考え方がある。しかし，人間は自分とはいったい何なのか，自分はなぜ生きているのかを考える生き物である。伝統的価値観がゆさぶられている現代では，特にそうである。その意味で，自分がいかなる考えを持っているにせよ，他人の宗教観を聞き，話しあう機会を持ったことは有意義であったと思う。

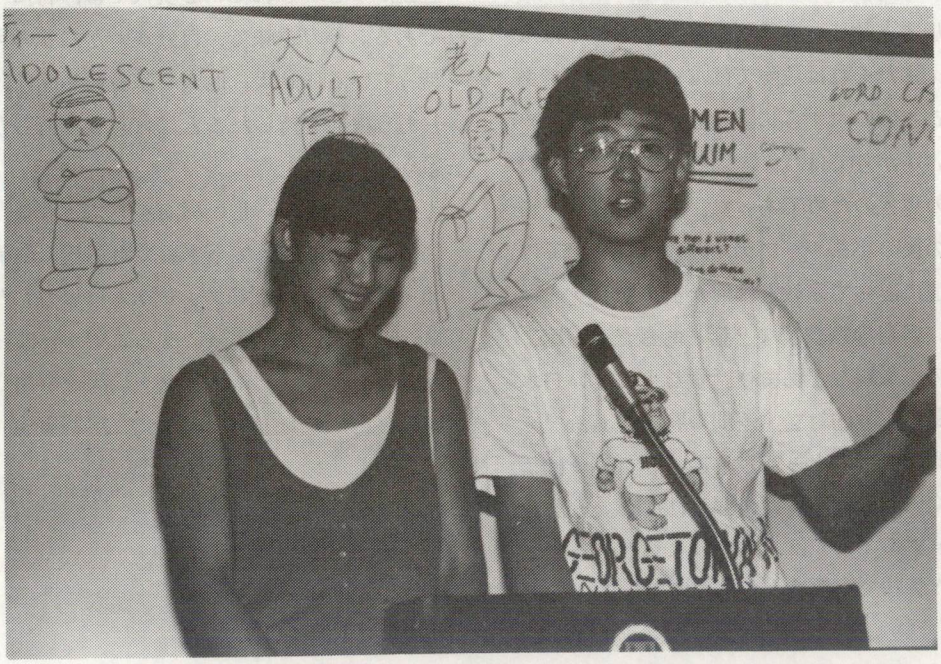
最後に，すばらしい講演をして下さり，質問にも親切に答えて下さった町田氏，準備期間・本会議を通じてフォーラムに尽力した，Mark Hall と，病気になるまでがんばった近藤夏の両コーディネーターに深く感謝したい。　（宇野重規）

男女コロキアム

男女コロキアムは，第40回の会議の最後の企画として，ブリン・マー大学において行われた。男女に関する企画は今回に始まったわけではなく，以前にも何度となく行われてきた。それだけ私達一人一人にとって重要なトピックであるのだ。今回はコロキアムという性格上，フォーラムほど堅苦しくなく，むしろ和やかなムードの中で，日米両国の男女が各自の実体験等に基づいて異性観，結婚観などについて話し合った。

当コロキアムにおいては，「男女の平等はありうるか」というテーマを設定した。そして，様々な問題に取り組むべく「男女は異なっているか」，さらに異なっているという前提で「男女の様々な相違は何を意味するか」という二つの問いかけをし，両国の係によるプレゼンテーションを前者は生物学，心理学，社会学（社会調整），後者は歴史，人類学，法，言語の面から行なった。その後，少数グループに分かれ，簡単なゲームが行われた。このゲームは，事前に行なったアンケート中の質問をカードにし，自分に配られたカードの質問に答えるというものだ。質問にはＹＥＳかNO で答えなければならず，その意味から本音の議論への第一歩となったのではないかと思う。そしてゲームが終わると，全員にアンケート結果が配られ，それについてのプレゼンテーションを行い，さらにアンケート結果をふまえた上でグループ討論を行なった。

男女に関する諸問題，実は案外分かっていそうで分かっていないものである。それに加えて，現在では男女関係も急速に変化している。例えば，かなり以前から女性解放が叫ばれているが，今ではいわゆる〝日本の伝統的な女性〟とは様々な面で異なった女性が少なくない。そのような女性達に「結婚したら食事，洗濯は女性にやってほしい」などと冗談にでも言えば，そう言った男性は軽蔑と失望



の眼差しで女性から見られるだろう。

では何が問題なのか。まず問題の多くは男性側にあると思う。現在の社会は様々な面において男性本位な部分が少なくないが，そのためか，男性には女性を理解しようとする姿勢が少し欠けているような気がする。中には女性の言う事に全く耳を貸さない者さえいる。しかし，女性が何を考え，何を訴えたいのかに男性が耳を傾けることで初めて男女の相互理解が成し遂げられると思う。ただ，現状では，女性は能動的に，その反面男性は受動的に男女の問題に取り組んでおり，このような一方的な取り組みでは不十分である。やはり，男女両方が男女問題を真剣に自分の問題として受けとめ，積極的に取り組むべきだ。そして，互いに自分達の言い分を押しつけあうというのではなく，むしろ男女が相互の価値観を尊重しつつ，互いに自分達の価値観にとらわれない男女を超越した「ヒトとヒトの関係」を共に作り上げていくことが，これからの課題なのではないだろうか。

（吉田篤史）

総括会議（Reflection Meeting）

最も印象深かった日を１日挙げよと言われたら，まず私は，この総括会議を候補にするであろう。

本来の〝Reflection〟の意義とは，会議を振り返り，その欠陥を再考することであるが，第40回日米学生会議におけるこの言葉は異なる性質を持つことになった。

８月15日午後７時，ブリン・マー大学のトマス・ライブラリーに集まった80人の参加者は，その予期しなかったホールの緊張感と共に Reflection Meeting を迎えていた。導入として３人の実行委員が話し終えると，日本側＋米国側参加者が順々に立ち上がって各々の会議での経験を話し始めた。一人一人の話を皆が熱心に耳を傾けていた。言葉を探して涙をこぼす者もいた。約１ケ月分の感動を要約することは，あまりに難しすぎたのである。全員の頭の中で一つ一つの場面が走馬燈のごとく駆け巡ったにちがいない。

80人の中80種の〝相互理解〟はReflectionと同時に結集されようとしていた。価値判断の基準の異なる79人との出会いで始まった40回日米学生会議は，各々に相互啓発を与え，最終的に高い付加価値を創り出し，長い１ケ月を終えようとしていた。その新たなる価値観は今後，全員が社会に還元していくことになるだろう。会議での両国参加者の理解度を見る限り，国際社会において極めて重要な立場を担う両国の関係の協調的発展を確信したのは，私だけではないと思う。この Reflection Meeting は会議の成果をより一層明確にしたことで，一番心に残るものであったと言っても過言ではないだろう。

他の何物でも代替することのできない日米学生会議の良さがそこにはあった。

Retlection は有意義であった。画竜点晴の意味では十分すぎる程，有意義であった。私がそこで得たものは，第40回日米学生会議における感動が80人に均等に分配されたという実感だったのである。

時代は変容していくだろう。しかし，〝相互理解〟のコンセプトは変わらないのである。いま私は，この感動が次の時代においても継続することを願ってやまない。

（豊田牧子）

ニューヨークツアー

次回日米学生会議実行委員の選挙の翌日の８月16日，希望者はニューヨークへ半日遊びに行った。

フィラデルフィアのブリン・マー大学から，ニューヨークまでは４時間のドライブ。私たちは貸し切りのグレイハウンドに午前９時乗りこみ，ゆられていった。

ニューヨーク着は正午過ぎ。ミッドタウンで解散し思い思いにグループを作って，または個人で博物館めぐり，買い物，観劇，散策，友人の訪問等に出かけていった。その後，ほとんどの人は夕食を共にし，そろって自由の女神像をボートで一周するクルーズに参加した。

一行は，午後12時「レ・ミゼラブル」を上演するウィンター・ガーデン前に集合し，見送りの友人たちとの長い間別れを惜しみながら，再びグレイハウンドでフィラデルフィアへと帰っていった。

（渡辺祐貴）

閉　会　式

1988年8月17日，約1カ月にわたって開かれた第40回日米学生会議が幕を閉じようとしていた。日本人学生40名とアメリカ人学生38名（2名は会議日程途中，やむをえない事情のため帰宅）は，4週間の感動を胸に閉会式のため用意されたスミスクライン・ベックマン社本社の会場に通された。

この時の部屋が明るく美しかった事は，今後の日米学生会議の将来を暗示しているかのように思えて，私はさわやかな気持ちになった。

閉会式が始まるまでのあいだ，78名はあっちこっちと忙しく動きまわりながら写真を撮り，話をかわし，手をとりあるいは抱き合い……まさに離れ難いムードであった。この時，自分が日本へ帰り，今まで同様の生活が待っているという実感はなく，アメリカ人学生との共同生活がまだこれからも続いていくようにさえ思えた。ましてこの場で会議が終ってしまうという事は，私には到底信じられなかった。

閉会式で私たちは，学生代表4人（第40回及び41回日米両実行委員長）を含む7名のスピーチを聴いた。どのスピーチも今回の会議を評価し，今後の日米学生会議への期待を独自の言葉で語っていた。〝7人7色（?!）〟―7つのスピーチをここで一言にまとめることは決して容易な事ではないが――共通していた事は，会議がこの場で終ってしまっても，日本とアメリカという異文化を背景にした相互理解への努力は続けていく必要がある事，第40回会議の参加者である私たち一人一人が日米のより良い関係づくりを担っている事，また，この会議を通じて結ばれた友情は今まさにこれから始まろうとしているという二点であると思う。

最後に，この報告書に目を通される全ての方々に第40回日米学生会議が無事終了した事を告げると共に，この会議の成功のために援助して下さった事を参加者の一人として心より感謝致します。

（青木麻喜子）

分　科　会

科学と社会
（Science, Technology and Society）

科学技術が高度に発達した現在，その社会に及ぼす影響は計り知れない程大きくなっている。そこで，これからの科学はどうあるべきなのかを歴史を振りかえりつつ考えようというのが当分科会の目的であった。結果的には生と死を考える分科会といわれる程，科学の影響力を話し合うことができ，問題の多さ，難しさを再考させられた。

＜分科会討論＞

1.「動物観再考」

Hillary Greene

アメリカでは一億の動物が実験に使われている。しかし，人間間だけでなく人間動物間の搾取非搾取の関係を変えねばならない。研究者は時々自分達の利益のみを考えてしまう。また，現行の動物福祉法もうまく働いていない。市民に研究者からの正確な情報が少ない。動物に知能がないという人もあるが，それは程度問題で人間と同じように痛みを感じる。さらに動物実験は意義深く止められないとする人が多いが，実際は無駄で残酷な実験が多い。使う動物を少なくできる方法があり，研究者の見栄や実験産業の利己主義を捨てこぞって動物観を見直す必要がある。

2.「日本とアメリカの研究姿勢」

Patrick McEuen

日本は製品の改良に焦点をあて，アメリカは全く新しい製品の開発に力を注ぐ傾向にある。スタンフォード大学教授リグ氏によるとすべての技術は開発から改良に向かい，後者が会社の利益の点で重要である。だから日本は競争の中でリーダーだという。さらに日本を成功に導いた要素を挙げた。チームワークが発達している事。強い競争心が研究を進めている事。国を挙げて他の会社や外国の技術を学んだ事。効率の良い生涯雇用制度。しかし，日本が世界に猿まねと映ると問題は大きい，という。

3.「たばこ問題」

斎藤　尚

医学的にたばこは有害だと，まず説明した。がん発生率は喫煙者と非喫煙者のあいだに有意な差があり，受動的喫煙者も悪影響を受ける。又，電車の中では窓を完全に開けないと換気されない等。このように実際に害があるのに行政的対応が日本では遅れていることを指摘した。日本では堂々とたばこが宣伝されているが，欧米では以前から禁止されている。また，アメリカで売れなくなったたばこを日本に輸出しようとしたレーガンの話も出た。日本人のたばこに関する意識の遅れが浮き彫りとなった。

4.「ガン告知」

鈴木康弘

日本では半数以上の人がガンの告知を求めているが，医者の75％は告知しない。それに対してアメリカでは100％近く告知されている。告知賛成の理由として余生の充実があり，反対側は，患者は告知に耐えられない

という。日本とアメリカの違いについて日本では患者の知る権利が弱いという。それは人権の意識が弱く医者の位置が今でも高いからである。また日本では末期患者の世話をするソーシャルワーカーや痛み止めの使用が少ない。患者の立場に立った医者と患者の人間的関係が必要だと結論づけている。

5. 「芸術におけるコンピューター」

Ann Takata

初めは計算だけに使われていたコンピューターも今はその用途は広い。コンピュータグラフィックスも大集積回路などの技術の進歩によってより実物に近いものが表現できるように，かつ親しみやすくなった。音楽合成はベルに始まったが，音色の研究・ハードウェアの発達とともに普及し，美しい音色をリアルタイムで合成できるようになった。これらの芸術はコンピューターによってより創造的になったが，今以上の発展のためには，人の三次元の知覚・音色のさらなる研究が必要で将来は何が芸術で何が人間たらしめているのかを問われるだろう。

6. 「ＤＮＡ組み換え」

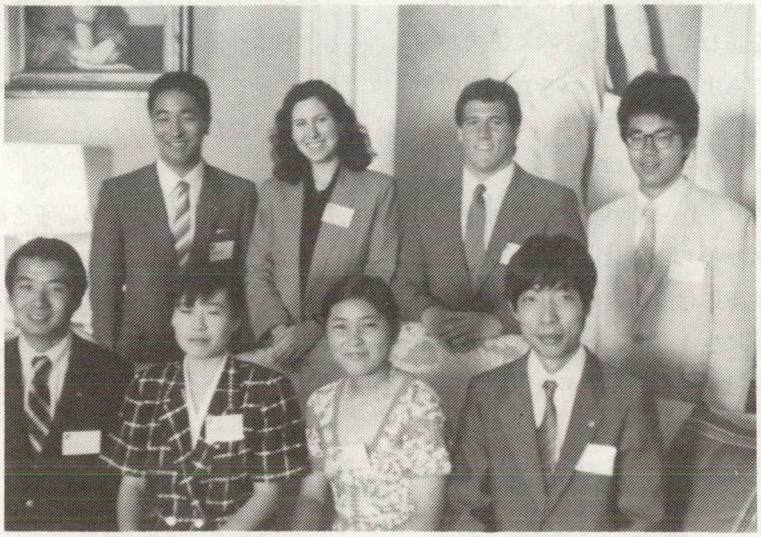
Ken Uchino

まず，遺伝子組み換えの操作の説明をし，最も困難なのは欲しいＤＮＡ配列を作る事だという。それもアミノ配列が分かれば自動ＤＮＡ合成器で合成可能になった。しかし，実験で使う発ガン性ウィルスの伝染・異種間の遺伝子組み換えといった倫理的問題，遺伝子の多様性が保てなくなる不安から，遺伝子操作反対の動きもある。が，ホルモン等の大量合成といった画期的側面を考えると，安全に注意しつつ進めていく必要があるという。

7. 「原子力世代の問題」

八木　樹

日本で原子力発電は今世紀末には１万キロワットに達すると言われるが，その危険はあまり知られていない。原子力燃料サイクル・死の灰とともに放射能や有毒ガスが漏れる危険性があり，発電量総量の10億分の一が漏れただけで人体に害がある。そして年に一度世界のどこかの原発で大事故が起きる確率で，実際に例は見られる。原発抜きでも電力は年



斉藤　尚，Hillary J. Green，Patric B. McEuen　足立　望
Ken Uchino，八木　樹，Azumi Ann Takata，鈴木康弘

17%余っており，原発の余熱を排水として捨て続けると生態系に悪影響を及ぼす。放射能が消せないことを考えると原発を避け，省エネを目指すべきだと結んでいる。

8. 「ストレス」

足立　望

ストレスは心の歪みであり，4つの段階がある。ストレスは我々に疲労のサインを示す等利点もあるが，身体病，神経症等の弊害ももたらす。フロイトはストレスによる外傷神症の原因は何か恐ろしい事が起きるという不安が拭えなくなる自信喪失だとする。また，人によってストレスの強さは異なり，興奮性やうつ的性格の人はストレスが強い。ストレス解消法としては，飲酒等の逃避や，昇華・補償・神経症を含む発散がある。ストレスが強い時が問題でカウンセリング，自分の状態を知る事，自律法等が助けとなる。

＜野外研修＞

野外研修としては論文に関連のある場所を6ケ所選んだ。

① テキサスインストルメンツ

世界的に有名な半導体会社であるが，我々はその工場を訪ねた。ほこりを除く工夫が綿密で，日本でも上ばきを履くべきだと面白いことを言われた。

② ベル・ヘリコプター

主に軍用ヘリを作っている会社である。そのためかカメラ持ち込み禁止・説明も多くなかった。格納庫には最新鋭のヘリがあり，機銃掃射がやけに生々しかった。また，日本の商社が買い付けに来ていたのが，印象的だった。

③ センター・フォー・ディジーズ・コントロール

エイズの研究と政策に関わっている。話によるとまだ確実なエイズ対策はなく，口調からも深刻さをうかがい知れた。

④ NASA（ゴダード・スペースセンター）

メインイベントともいえるこの研修はすばらしかった。たくさんの研究者に直に人工衛星その他の説明を受け，光栄だった。実験工場を巡り，人工衛星組み立て，実物大のスペースシャトルを使っての実験場等を見た。中で働く科学者の落ち着いたやる気には目を見張るものがあったが，この中の技術の多くが軍事用と考えると悲しくもなった。

⑤ スミスクライン・ベックマン株式会社

世界でお馴じみのこの薬品会社の工場を訪ねた。遺伝子操作等も行っており，研究室のまわりには放射能マーク入りのドラム缶もあった。図書館その他の設備もさすがであった。

⑥ ナショナル・サイエンス・ファンデーション

科学研究費を分配するアメリカの役所である。日本へ送るアメリカ人研究者のプロジェクトの話を聞いたが，残念ながら突っ込んだ話はできなかった。

このようにたくさんの場所を訪れて実際に研究に携わる科学者に会えて，良い意味でも悪い意味でも現実に少しでも触れることができたと思う。　（足立　望）

教　育

（Education）

当分科会の論文発表全てにほぼ共通していたのは，日米の教育問題の違い，互いの長所をふまえて今後の展望を考察することであった。

＜分科会討論＞

1.「多民族国家教育・二カ国語教育上の問題」

Carol Lee

「人種のるつぼ」米国では，英語を解せない移民に集中的な英語教育を実施しているが，英語を通しての米文化はおろか，移民の出身国の文化への理解に欠ける，単なる暗記型の教育のままである。Carolは彼女自身の体験，つまり中国語を習得しきれぬまま英語学習を始め，英語が理解できぬためクラスで疎外感を味わった体験から，母国語と母国の文化を尊重し，共通語である英語を通して全ての民族が互いに理解しあえる社会の実現を主張した。それには英語を話せる子供を話せない子供から離すのではなく，同じ条件・環境で互いに学べる機会を与えるべきとした。

2.「小学校における独創性を養うオープン・エデュケイション」

木下　綾

日本の教育界における最大の課題は「個性の尊重」である。この観点から，木下綾は米国のオープンスクール制の普及を論じ，初等教育における個人活動や自由な意見交換の場の必要性を日本の教育に求めた。厳密なカリキュラムはなく，生徒は自由に活動し，創造力をのばす。個性を許さず，右にならえの受験体制型の日本の教育の現状が，創造力を養う機会を失わせることも論議の中心となった。

3.「校則から見た日本の教育の管理体制」

豊川　輝

日本では高校中退者が毎年増加中である。また高3の半数が学校は嫌いだと言う。豊川輝はこの事実から，校則にみられる学校の管理体制が，生徒の個性を抑圧し，おちこぼれの生徒を生むと論じた。学校は教育工場と化し，脱落者は無視する。生徒同様教師も画一化され，教えるだけの役割しかない。いい大学や会社に入るための訓練でなく，校則の抑圧やいじめのない，生徒を信頼する教育のあり方が活発に論議された。

4.「教育目標に関する日米間の相違」

Kevin Whelton

日本人は連繋プレー，米国人は個人プレーが得意といわれるが，Kevinはこの教育面での集団行動・個人行動に着目，特に日本の，「組」にみられる一つの目標にむかって全員が協力して作業するグループ活動を論じた。教育制度は米国では州により異なるが，日本は文部省により全国的に統一され，等しい機会とカリキュラムを通して，全員が協力して学習や課外活動を行う。個人能力を養う米国と，集団の結集力を養う日本の教育の長所が見直された。

5.「学校での体罰について」

窪田美穂子

校則の他，教師が生徒に課す体罰も，日本の教育の問題であり，人権にも関わる。窪田美穂子は，生徒との話し合いをせず暴力を加える教師に着目，教師は力でなく生徒の意見を聞き，双方の意見交換による理解をすべき

Kevin C. Whelton, 窪田美穂子, 豊川　輝
木下　綾, Carol L. Lee, 服部　崇, Joyce G. Wegner

だと考え，教師は，生徒にとって人生の先輩そして友人となり，暴力でなく言葉のコミュニケーションが教育現場に必要であるとした。

6.　「教育方針の管理政策と影響力・国家のねらいと傾向」

Natalie　Mutz

Natalie は日米の教育制度を政府レベルの見地から考え，日本の文部省により中央集権化された教育制度，共通一次制度の特色とその改革の歴史，社会で高い地位につくためという目的と受験戦争の関係を論じた。米国は州政府の権限が教育に及び，システムは州ごとに異なるが，移民や黒人の教育に統一性が欠けることを指摘し，全米に共通な教育機会の均等を説いた。

7.　「塾・日本の教育の外観と実質」

服部　崇

何故日本の児童は塾に通うのか。服部崇はおけいこ塾と進学塾を区別し，後者は学歴重視の波に乗った教育産業の繁栄と共通一次が原因であるとし，大学が最終目的の教育体制に疑問を投げた。大学合格の為の知識を吸収する学生たちは「大学で何を学ぶか」を考えることを忘れている。学歴社会のこうした弊害と学習塾ブームの関係が取りあげられた。

8.　「入試からみた日本の教育改革への理解をめざして」

Joyce Wegner

入試改革にみられる日本の教育制度の改革は，まだ大きな効果を生んでいない。Joyce は服部崇と同様，日本の学習塾のブームに着目，将来の高い社会的地位，豊かな経済力を求めて小学校や幼稚園の頃から競争する学生の姿を論じ，個人の生活を楽しみ，自分のためアルバイトをする米国の学生との価値観の違いを話し合った。学校等が原因で自殺する日米の学生や，日本の低い自殺率なども，低い高校中退率（米と比べて）と共に話題の中にとり入れられた。　（窪田美穂子）

＜野外研修＞

野外研修は，普段，大学寮にこもっての会議が多い中，アメリカを目で見る良い機会と

なった。私達，教育の分科会では，全部で7ケ所の学校の施設を訪ねた。

① 7月28日，マグネット・スクール。これはダラスだけではなく，アメリカ各地にも広がりつつある学校である。特徴は，ダラスだけでも9校あり，各々が，各々の専門分野を持っていることだ。芸術・ビジネス・教育・人文・社会福祉・医療・科学など。中学と高校が主で，生徒の意志で自由に分野が選べる。諸設備も充実していて，理論だけでなく実践の練習もできる。まるで，私立の専門学校のようだが，これは公立の中学・高校なのである。予算も普通の高校の2倍近く，その分開放的で，全日制の学生以外にも昼間他の学校で勉強してからマグネット・スクールに通うというパート・タイムの制度も取り入れている。この学校に対して，私達の中では，否定的な意見が多かった。というのは，まだ小学校を出たばかりの学生に，将来のコースを決めさせるのは早すぎるというわけである。また，私達が見学したのは医療コースの高校で，設備は，病室から大きな調理室まであり整っていたが，職業訓練学校のイメージが強く残った。

② 8月3日，ハーパー高校。アトランタから車で1時間足らずの所にある，普通の公立高校に行った。車から見た限りでは，かなり荒れた印象のある，殺風景な地域だった。黒人の多い地区で，人種隔離政策に反対の立場を推進した高校。夏休み中だったのだが，サマー・セッションという夏期講習を行っている最中で，生徒達で溢れていた。私達は，2人づつ組みになって様々な教室に入れてもらい，生徒達と直接話す時間を持った。校長先生の話では，生徒達が自主的に参加していると強調していたのだが，実際に生徒達の声を聞いてみると，成績が足りないから来いと言われているんだとか，親が行けというから，とか，せっかくの夏休みをいやいや来ているのがよくわかった。また，私達が日本から来たというので，生徒達が大変興味を持っていろいろ質問してきた。おかしかったのは，日本では，コカ・コーラを売っているか，という質問。また，校則の話で，化粧はダメ，アクセサリーはダメ，と言うと，聞いているだけでもう不満げな顔をしている女生徒がいた。日本がどこにあるかも正確にはわかっていないような生徒達が多かったけれど，「無関心」とは程遠く，「好奇心」旺盛な，純粋な良い印象を持つことができた。

③ 8月9日，ゴルデット大学。これは聴覚障害者の大学で，長年の経験から、設備やカリキュラムがうまく調整されている。ここでは手話を通してコミュニケーションをする。この大学は，初めて聴覚障害者が大学長になったということで，最近注目を集めたのだが，その学長のアシスタントをしている方のスピーチ（これも手話であったため，通訳を介した）で，聴覚障害者は，手話を使う世界で生活をするか，できる範囲で健常者と共同の生活をするかの選択に迫られるという話しがあった。手話とは，英語や日本語のように，一つの独立した言葉であって，他の言語と同じように，背景にはその手話の文化もあるのだそうである。それは，私達には理解のできない，一つの尊い文化であり，守っていくべきものであろう。しかし，障害を持った人達が私達と同じ様に大学で勉強し，生活しているように見える奥には，このように2つに1つの決定的な選択をしている。もっと多くの選択肢を持って，自由になれる道を模索できないものかと疑問を抱かされた。

その他，④教育番組のテレビ局や，⑤日本大使館，⑥国会図書館，⑦体罰の研究者を訪ねてテンプル大学を訪問した。各自の論文のテーマに関連した場所も多く，質問は活発に出され，現場の生の声は現実的で刺激的であった。

（木下　綾）

言語とコミュニケーション
（Language and Communication）

言語は人間の思考の基本であり，文化的価値の反映でもある。言語とコミュニケーション分科会では，多様な話題をもりこみ，社会問題，文化的相似と相違点，言語そのものの特質について議論した。また，研修旅行では著名な言語学者，作家を訪問し，興味深いお話をうかがった。

分科会は8人の発表に加え，個人と社会分科会との合同ディスカッションも行った。

＜分科会討論＞

1.　7月26日。渡辺幸一郎が，「コミュニケーションのための人工語」という題でエスペラント語の国際語としての可能性を発表した。それをうけて私たちは，国際語としての条件，また言語が人間の思考や論理に与える影響について話しあった。

2. 3.　7月31日には，Sumie Okazaki と渡辺祐貴がそれぞれ「女性語と女性差別語」「女性語」の題で報告を行った。そして言語，特に差別語の存在が人々の認識・世界像の形成に大きく影響していることを確認した。

4.　8月3日には，Britton Watkins が「Don't touch my mustache, y'all（比較言語学への新たな視点）」という題でアメリカ英語の南部方言を紹介した。そのもってまわった表現の数々を知り，私達は，日本語と南部の英語との間に意外なほど類似点があることに気がついた。

5.　8月8日には，三岡朋子が「日本語の

Miryam B. Silverman, W. Britton Watkins, 三岡朋子, Sumie Okazaki
出口真紀子, 渡辺祐貴, Madeleine J. Adkins, 渡辺幸一郎

あいまいさ」という題で発表。それをうけて，日本式コミュニケーションについて，英語によるそれとの比較において議論した。

6. 8月11日には，Miryam Silverman が，記号論や象徴の研究である，非言語コミニケーション（言語外コミュニケーションを含む）について発表した。私たちは，より完全なコミュニケーションのためには，文化ごとに非言語コミュニケーションの理解に努める必要があることを話しあった。

7. 同日，出口真紀子も「漫画にみる『甘え』と日本の非言語コミュニケーション」という題で，日本の少女雑誌を資料として用いながら発表した。登場人物の心理状態—例えば絶望—などが，黒ぬりの背景として表現されていることで読者に端的にアピールしていることが，言葉で表現する以前に「察して」ほしい，という『甘え』の概念に通じている。日本側代表には，見なれたものが新鮮に感じられた。

8. 翌8月12日のミーティングでは，Madeleine Adkins が「文法とまちがい—日米間での誤解とミスコミュニケーション」という題で，第2外国語にみられる典型的な言語の誤用について発表した。外国語を使う時には，文法的には正しくとも「正しくない」文を作ってしまうことがある。母国語の語感が異文化で通用しないためである。この発表に続いて，私たちは個人と社会分科会との討論の機会をもった。テーマは「バイリンガル教育」。特に政府は2ケ国語（以上）の言語による教育を行う義務があるかどうか，という点について，活発な討論が行われた。

＜野外研修＞

また，分科会コーディネーターのM. Silvermanと出口両氏のおかげで，5回の野外研修をすることができた。

① 7月26日，ダラスでは国際語学センター／国際文化博物館を訪れた。書き言葉をもたない，第三世界の国々に言語学者を送り，現地での約10年間の生活を通して，音声言語を修得，記録し，後に，文字（書き言葉）を創って提供する，という同センターの仕事を所長の Ken Pike 博士直々にうかがった。

② 8月3日には，アトランタで言語リサーチセンターを訪問し，チンパンジーに文字を教えている Maryann Romski 氏にお会いした。チンパンジーに文字を教える研究は，知恵遅れの子供の教育に応用されるということだ。

③ 8月8日には教育分科会と共に，米国唯一の耳の不自由な人専用の大学，ガラデット大学を訪問した。私たちは校長補佐の Dr. Mervin Garrison さんからデフ・カルチャー，手話，また，ガラデット大学の目的等についてお話をうかがった。

④ 8月12日は，フィラデルフィアにおいて，テンプル大学を訪れ，黒人婦人運動家，詩人，作家である Dr. Soria Sanchezさんにお会いし，黒人文学の歴史のお話をうかがい，自作の詩をご披露していただいた。

⑤ 最後に私達は Ms. Marion Moore という心理療法の研究家にお会いした。私達は，第6の感覚—「気」—を使ってお互いにコミュニケートすることを教えられ，体験した。

私達の分科会において，言語が個人の思考に与える影響の大きさを確認し，また言語外コミュニケーション，手話を学んだことは充分に意義があった。しかし，それ以上に誇れるものがあるとすれば，それは，私たちの分科会では全員が日米両国語を理解した，とい

うことである。話し合い，討論の途中でわからない術語があったときには，誰でも気軽に話を止めて，説明を求めることができた。分科会のメンバーとは日本語でも英語でも，自由に話ができ，納得のいくまで話ができるというのはすばらしいことであった。渡辺祐貴の発表は，日本語で行なった。これは，第40回目にして，日米学生会議史上，初めてのことであった。（渡辺祐貴）

国際関係
（International Relations）

＜はじめに＞

国際関係の分科会では，各自が用意した英文レポートの報告，それを基にしての討論を中心に行なった。参加者８人は会議期間の半分近くを共に過ごし，それぞれの個性を出しつつ共に討論を進めた。

日本側からは，生粋の〝大阪人〟と自他共に認める原，コーディネーターとして常にグループ全体の雰囲気に気を使った長谷川，英文科を卒業後更に法律の勉強を続ける市川，慣れない英語での討論に苦労しながらも健闘した奥村の４人。アメリカ側からは，会議のオフィシャルフォトグラファーとしても大活躍したWendy Johnson，参加者中最年少で常に元気と明るさを失わないLara Manzione，大らかな笑顔の一方で精力的に野外研修の準備に奔走したコーディネーターの，Troy Miller，そして会議終了後日本の大学へ留学しているJoe Willemssenの４人である。

＜分科会討論＞（発表順）

1. 「日米関係：相互理解に向けての協力の重要性」

Wendy Johnson

ポモナ大学で国際関係を専攻するWendy Johnsonは，現在日米間で深刻な問題となっている政治，経済，軍事的摩擦を考える時，両国が今日までの長い友好関係の歴史を振り返り，柔軟に対応する努力をすることが積極的な協力体勢をつくり，双方にとって益になるという意見を述べた。

2. 「宇宙における国際協力」

Lara Manzione

ブラウン大学で東アジア研究を専攻する，Lara Manzioneは宇宙の開発という新しいテーマをとりあげ，複数の国による協同開発はそれを通じて地球の抱える問題を再考し，協力関係を築くカギとなり得ると考えた。討論は宇宙開発の意義，実現の可能性という議論から模擬草案作りという形まで進んだ。

3. 「（パレスチナ問題の）解決を求めて」

原　秀樹

大阪外語大学で英語学を専攻する原は，パレスチナ問題の解決のためには当事国以外の人々がユダヤ人に対する偏見を失くし，同時に現在の民族国家システムそのものを見直す必要があると発表した。討論ではアメリカ国内のユダヤ人の立場，また少数派問題などにも触れた。

4. 「今後の中日米関係」

Troy Miller

テキサス工科大学で経済を専攻するTroy Millerは，中国のこれからの国際社会での可能性に注目し，今後のアメリカの対アジア関係は，日本，中国との三国関係が重要になっ

Troy D. Miller，奥村茂三郎，Joseph T. Willemssen
Wendy M. Johnson，Lara L. Manzione，長谷川智可，市川ひろみ，原　秀樹

てくるだろうと主張した。同時に同日午後に予定されていた台湾領事館への研修に備え，台湾の歴史についても説明し，その後全員で予備討論を行なった。

5.「日米貿易交渉における力の均衡問題」

Joe Willemssen

デューク大学で東アジア研究を専攻する，Joseph Willemssen は近年の日米間の貿易摩擦は，日本とアメリカ両国の政府及び社会全体の構造の違いに原因があると述べた。具体的には，アメリカ側にとっては日本語の習得，国内の様々な世論の調整の必要性などが交渉を行なう際障害となっている点などを挙げた。討論では初めて経済問題がとりあげられ，日本の海外の不動産市場への進出，コメの輸入自由化の問題などについて意見の交換がなされた。

6.「第２次冷戦におけるアメリカの〝衰退〟の影響」

長谷川智可

上智大学で社会学を専攻する長谷川は，近年注目されてきているアメリカの「衰退」と呼ばれる現象を軍事面，経済面で統計をあげて検証した。その後，アメリカは「衰退」或いは変化しているのか，について全員で討論し，アメリカの国際政治への影響力の変化，それに伴う日米両国の今後の役割などに議論は発展した。

7.「北方領土問題」

奥村茂三郎

東京大学でアメリカ研究を専攻する奥村は，アメリカ人には比較的なじみの薄い北方領土問題をとりあげ，地図や条約条文等を用いて解説的な報告を行なった。アメリカ側参加者からは「日本人は何故そのように北方領土に執着するのか。日本にとって得るところは何か。」などの質問が出された。また，先に報告されたパレスチナ問題とも関連させ，一国にとっての領土問題の重大さ，奥の深さについても考えさせられた。

8.「東西対立の前線における独自の運動」

市川ひろみ

大阪大学で国際法を専攻する市川は，東欧諸国の国際関係に関心が強く，長年東西対立の舞台となってきたそれらの地域での住民による独自の平和運動が，東西関係を変化させ，国際関係全体に影響を与える，と述べた。

＜野外研修＞

① Dr. Richard Rubbotom

当分科会最初の野外研修は，7月26日ダラス市街のサンクスギビング・スクエアに Dr. Rubbotomをお招きして行なわれた。氏はその経歴の前半を前在アルゼンチン米国大使を始めとする外交任務にあたり，後半を大学での国際関係教育に費しておられ，アメリカの外交，大統領選挙などについて見解を述べられた。秋に選挙を控え，参加者からも活発に質問が出され，氏は日々変化する国際情勢に対応するためには大統領は国内でより堅固な超党派政策を進めること，議会は積極的に大統領に協力することが望まれる等，答えられた。

② カーターセンター

7月31日，アトランタのカーターセンターを訪れた。センターはカーター前大統領の事務所に併設されており，内部は資料館になっている。カーター前大統領の生いたち，キャンペーンの記録，また大統領就任時他の中東政策での手腕，キャンプデービッドでの成果等がパネルで展示され，午前中に報告が行なわれた中東問題をさらに目で見て理解を深めるよい機会となった。

③ ギリシャ領事館

8月3日，アトランタにあるギリシャ領事館を訪ね，総領事の Mr. Daras にお話を伺った。主に質疑応答形式で進められ，オリンピック発生の地としての立場から，今秋行なわれるソウル・オリンピックについての見解，また午前中行なわれた東欧諸国についての報告に関連してギリシャの東欧での政治的役割は何か，など幅広く質問が出された。

④ 台湾領事館

ギリシャ領事館に続いて同じ建物の中にある台湾領事館に総領事の Mr. Tsun－Hsien Linを訪ねた。氏は日本へ留学経験があり，日本語も話されるということで，最近の日本の国内事情についての雑談も交じえ，なごやかに話が進んだ。アメリカ側からは対米貿易について，日本側からは台湾での反日運動について等の質問が出された。アメリカで聞く日本に対するアジアからの見方は一層印象深いものがあった。

⑤ 米国平和協会（U. S Institute of Peace）

米国平和協会はアメリカ議会により，1984年に設立された非営利団体である。団体の顧問を務める Mr John Richardson が私達を迎えて下さり，ロの字型のテーブルを囲み自由な質疑応答が行なわれた。氏は高校生の留学機関 YFUの代表を務めた経験もあり，主に私達の側からの意見に興味を持たれているようだった。日本の女性の地位はアメリカ女性のそれと比べてどうか，と質問され日本側の男性参加者が答えに苦しむ，などの場面もみられ，笑いをさそった。

⑥ 世界銀行

8月12日，早朝8時半から国際ビジネスと経済の分科会と合同で，ワシントンDCの世界銀行へ Mr. Robert Ayer を訪問した。多忙なスケジュールの中時間を割いて会議室に現れた氏は，時計を気にしながらも世界銀行の機構，運営方法についてわかりやすく説明をして下さり，私達は皆，眠気も忘れ熱心に聞き入った。「世界銀行は非政治的組織であ

り，その活動は全く経済的なものである」と表向きはうたわれていても，実際は，援助金の分配方法などで多分に政治的要素も関係してくる，とのことだ。世界銀行は「開発」とは何か，を勉強するにはいい場所だ，と話をしめくくられたのが印象的であった。

＜終わりに＞

学生が国際関係を議論するのは難しい。話が国家単位になるため，個人の経験に基づくというよりは，単なる受け売りの知識の応酬といったものにどうしてもなりがちである。そして結論を出そうとすると，それはとかく悲観論であったり，無味乾燥な一般論になってしまったりする。私達の場合はどうであったろうか。

上のような問題がなかった訳ではない。学問的レベルにおいても必ずしも十分ではなく，その点に不満を持った参加者も居たことと思う。コーディネーターが適切に議論を方向づけ，発展的な結論に導くことが十分出来なかったという点もあり，反省している。ただ，終始なごやかで明るく自由な雰囲気をつくったという点では分科会として成功だったと思っている。この分科会での経験が各参加者にとって，幅広い分野に目を向け，興味と問題意識を持ち，更に深く，広く，自分なりに国際関係を考えていくひとつの踏み台になれば，と期待している。　（長谷川智可）

国際ビジネスと経済

（International Business and Global Economic Development）

日米関係を考える時に，避けて通れない問題の１つが，経済であるということは誰も否定しないであろう。また「国境なき経済」という言葉に表されるように，世界が相互依存を深めている現在，日本とアメリカという世界に強い影響を持つ両国に存在する問題—貿易摩擦，対外投資摩擦等—を考えることは重要であろう。同時に両国が世界経済に対してなしえる貢献とは何かということも考えていく必要がある。そこで，当分科会では，日米のみならず，世界全体に存在する問題に幅広く考えていくことにした。

レポートの作成は各個人の問題意識に応じてなされた。以下，各人のレポート，また野外研修の内容について簡単に振り返ってみたい。

＜分科会討論＞

1.　「日本の外国における経営について—多国籍化する日本企業の経営について」

Robert Sigler

アラバマ大学で経済，政治学を専攻する，Bob Sigler は，日本の経済発展の要因として，日本のユニークな経営のスタイルをあげ，その経営の主要な要素を分析し，またアメリカの経営スタイルとの比較，そして海外における日本的経営について述べ，日本の経営スタイルとアメリカの経営スタイルの融合の可能性について発表した。主要な経営の要素を雇用，意思決定プロセス，社会的な要素から，上記の問題について考察し，国際化する日本企業がどうあるべきかについて，討論された。

2.　「日本の流通機構の克服について」

Veronica Brakus

ワシントン大学で国際関係を専攻する Veronica Brakus は，しばしば「非関税障壁」として取り上げられる日本の流通機構につい

て発表した。このレポートにおいては3つの点を指摘している。1つは，日本の流通機構は日本人のニーズに合ったものであり，外国企業の参入を拒むために政府によって設けられたものでないこと。2つめに，日本企業と外国企業の取り扱われ方に特に違いのないこと。3つめに，外国企業が参入するためには，日本企業との友好な関係が必要である，とした。

3. 「企業の合併および買収について」

町田光弘

大阪大学経済学部で経済学を専攻する町田光弘は，M＆A（企業の合併および買収）に注目した。M＆Aの歴史，M＆Aが起こる背景，M＆Aの理論，日本におけるM＆Aの性格，M＆Aの現状について，グラフやチャートを用いて発表した。このレポートによるとM＆Aは，日本において正当化されるべきであり，また日本の外国におけるM＆Aが，人種的偏見によって阻まれていることへの批判と同時に，日本の市場の未熟さをも批判し，その成熟化の必要性を訴えた。また，日米両国が親密な関係を保ち，共に繁栄すべきであるとした。

4. 「第三世界諸国に対する合衆国の政策の在り方についての分析」

James Takami

カーネギーメロン大学で経営学を専攻するJames Takamiは，第三世界諸国に対する日米の政策の在り方について，またこれら発展途上国に対する援助の必要性について発表した。特にアメリカの海外援助の政策について，その果たしてきた役割，歴史を分析し，軍事援助のみに重点がおかれている現状を批判し，経済的援助の必要性を訴えた。また，世界全体の援助政策として，アメリカがラテンアメリカ諸国の援助を，ヨーロッパがアフリカおよび中東を，日本が東南アジアの援助を担当してはどうかとの提案も投げかけられた。

岡崎　淳，豊田牧子，町田光弘，Robert M. Sigler，Veronica R. Brakus，吉田篤史
Suzanne M. Kounkel，James K. Takami

5. 「累積債務問題」

岡崎　淳

大阪大学経済学部で経済学を専攻している岡崎は，現在国際金融市場において不安な要素となっているラテンアメリカ諸国の累積債務について発表した。累積債務問題が重要な問題にもかかわらず，日本ではあまり認識されていないのではないかという疑問を投げかけ，問題の重要性を訴え，現在の世界経済の中での日米の果たすべき役割を，特に日本の役割の拡大が必要であることを述べた。また，先進国の努力と共に債務国の努力も必要であると主張した。

6. 「貿易不均衡について」

Suzanne M. Kounkel

コロラド大学ボールダー校で商学を専攻する Suzy Kounkel は，貿易問題を分析した。日米間に起った様々な問題の具体例をあげ，それぞれの国に存在する問題を指摘した。レポートにおいて，日本は非関税障壁を取り除き，規制を緩和し，そして大国としての責任を持つべきであると主張する一方で，アメリカも日本のシステムを理解すべきであり，また教育制度等国内の問題を解決し，生産性の向上に努めるべきであると主張した。

7. 「国際通貨制度改革」

豊田牧子

慶応大学経済学部で経済学を専攻する豊田牧子は，現在の国際通貨制度の有効性に疑問を投げかけ，その改革の必要性を主張した。またその改革の案として，米ドル，円，マルクの３ブロック制について，またターゲットゾーン制について述べ，国際協力の必要性を訴えた。そして日本の役割は，金融市場を急ぎ，また円の国際化を推し進め，円の使用圏をもっと広めるべきであるとした。

8. 「太平洋の時代」

吉田篤史

早稲田大学政治経済学部で経済学を専攻する吉田篤史は，世界経済の中で太平洋地域にスポットを当て，その経済の現状について図や数値を用いて分析した。中でも日米のアジア諸国に対する直接投資について述べた。そして最後に，アジアにおける日本の役割を増やしていくべきであることを主張し，将来のアジア地域の経済発展の可能性について述べた。

＜野外研修＞

① 日本長期信用銀行

ダラス駐在員事務所所長の武中秋一氏より日本長期信用銀行の業務内容，その役割等についてのお話を頂いた。お忙しいのにわざわざサザンメソジスト大学まで来て下さった。

② カルテックス

B. F. クロスマン氏よりカルテックス社の日本における操業等についてお話して頂いた。クロスマン氏もサザンメソジスト大学までお越し頂いた。

③ コカ・コーラ

コカ・コーラ社の経営方針，戦略等について，お話を頂いた。

④ 国際復興開発銀行

ロバート・アイヤー氏より，世界銀行の歴史，また現状についてご説明を頂いた。この野外研修は国際関係分科会と合同であった。時間が短いのが残念であった。

⑤ ハース・アンド・マクブライド・インターナショナル

当会議のＯＢであり委員長もつとめられたことのあるハース氏に，日本人をヘッドハントすることの難しさについてお話を頂いた。

楽しくかつ充実した一時であった。

以上，全ての研修は有意義なものであった。お忙しい中をさいて，お話をして下さった方に心より御礼を申し上げる。

全体として，議論はリラックスした雰囲気で行われた。迫熱した議論とはいい難かったが，かといってなれ合いでもなかったように思う。アメリカ人が予想以上に日本の事を知っていたことには驚かされた。

最後に，野外研修をコーディネートしてくれたBob，そして頼りない日本側コーディネータを助けてくれた，分科会のメンバー達に感謝の意を表したい。　（岡崎　淳）

個人と社会
（Roles and Responsibilities for Society and Ourselves）

＜はじめに＞

国際化がいっそう進み，国家間の問題が複雑化している中，他の社会のシステムを理解し，その上で国家間の問題に取組むべきであるとの観点から，当分科会では次の様なアプローチを試みた。即ち，社会に対する個人の責任と役割がその社会を特徴づける重要な要素であるとの考えに基づき，ある社会が個人に与える制約や自由に注目することによってその社会の持つ概念や価値観を明らかにしようとした。また，普遍的問題とも言える社会や国家と個人の関係に関する諸問題を論じ，各人の社会観の交換も行なうこととした。

＜分科会討論＞

1.　「日本社会に於けるサービスについて」
岡田　治

各種職業，特に客相手のものではどこまで気を配るかが日本では重要な点である。各人のアルバイトの経験からの意見が出され，日本では「お客様は神様」なのに対し，アメリカではある一線を越えた場合必ずしも客の要求に答えなくてもよいと指導するなど，違いを見せた。また，日本では教師が生徒の進学指導に時には親よりも大きな役割を持つことにアメリカ人は驚きを示した。更に，日本ではアメリカに比べて豊富なサービスが受けられるが，それを断る自由は無いのではないかとの指摘が為された。

2.　「代理母問題とアメリカ社会の対応策」
Kendra　Yoshimoto

アメリカにおいて代理母問題は非常に新しく，社会としてどのような判断を下すか決断が迫られている。ここではBaby Mをケーススタディとして取上げ，代理母に関する問題をあらい直した後，各人がどのようにして対処すべきか意見を述べあった。焦点は妊娠期間を経ないことによる母親の子供に対する愛情の欠如や法の問題では解決しきれない人情にどのような原則を設けて制度を確立するか，等であった。また，この討論を通じて社会にはある事柄に対して，全く認めない禁止的態度，判断を避ける傍観者的態度，社会に受入れられたものとして認め，制度化する容認的態度のいずれかを取るのではないかとの指摘が為された。

3.　「日本の国際化論について」
北郷美由紀

この討論では，国際化論を媒介として日本が国際社会の中で自らをどの様に位置付けているかを概観する試みがなされた。オイルショック後，台頭してきた経済力と共に国際化

論は盛んになってきたが，今日の国際化論はナショナリズムと密接なつながりがあるとの批判が経済，民族，歴史の３つのアプローチをとり，加えられた。これに対し，日本は自分の色を出しているに過ぎず，それは批判されるべきでは無い，との意見や日米両国に於ける国際化とナショナリズムについての話し合いがもたれた。

4. 「日米の裁判に対する意識の違い」

島岡良衣

このところアメリカでは過剰な訴訟が大きな社会問題と成っている。一方，日本では一般に人々の権利意識が低く，あまり訴えることが無いといわれている。ここでは，２，３の具体的ケースについて日米の各メンバーが訴えるか，またなぜそうするのか意見を述べ比較検討した。その結果，どのような社会に住んでいるかで意見を変えるメンバーも数名見うけられ，大変興味深いものとなった。また，法をめぐり，社会，政府，個人の関係など，より一般的な議論も行われた。

5. 「日本社会―アメリカが見習うべき点」

Rebecca Payne

グループでの作業が重んじられる日本社会に，時として個人が自分の意見を主張しすぎてしまうアメリカは学ぶべきものがある，として相手の気持ちを思いやる日本人的な人間関係等が論文には記されていた。しかし，討論の場ではそれを認めつつも，日本では大勢に反した行動は認められず，その様な行動を取った場合には社会は排他的な性格を持つことが強調された。更に一歩進み，大多数のある意見を支持するなかで少数の者の意見はどの様に扱われるべきかについても論じた。

6. 「社会的偽善」

David Thomas

社会の中には習慣や倫理による理由から法的に禁止されてしまうものが存在する。ここでは同性愛と麻薬を例にとって，なぜこれらがアメリカ（少なくともその一部）で法的に禁じられているかを話し合った。同性愛に関してはキリスト教倫理が大きな影響を与えて

Jonathan Mark H. Hall，David L. Thomas，毛利陽一郎，岡田　治
Kendra K. Yoshimoto，北郷美由紀，Rebecca E. Payne，島岡良衣

いること，医学界では同性愛は決して「病気」では無いとされていることが指摘され，その偽善性が問われた。麻薬については，アメリカ側からなぜ酒は良くて，麻薬はいけないのかという問が日本側に出され，答えに詰まるという場面もあった。総合的には社会は個人の自由をどの様な理由でどこまで制限出来るかに焦点が当てられた。

7. 「国家による自由の配分と個人の自由について」

Mark Hall

ペンシルバニア州にあるアーミッシュの学校教育制度を例にとって個人の自由とは何かを話し合った。独特の教育理念を持つアーミッシュの人々を理解し，同州は彼等の理念に沿った教育を公立の学校で行うことを認めた。一見，自由を尊重するアメリカらしいと見えるこの処置は，実は国家から一集団に選択の自由が与えられただけであり，決して個人に自由が与えられたわけでは無い。ここでは，国家の中で個人がどのように自由を得ることが出来るかが議題の中心となった。

8. 「社会，そして私達にとって幸福とは」

毛利陽一郎

近代以降，生活圏の拡大，複雑化により利益を主張する局面を人々はより多く持つようになってきた。よって，人々の間の利益を調整する際にも只，近代社会の前提とされる自然権を基準とする事は出来なくなってきている。これをどのように解決してゆけばよいかとの問には，多くの資料を参考にし，バランス感覚を保つことや起こった「事象」で判断するのではなく，当事者がどの様にそれを解釈しているかを考慮することが必要なのではないか等の意見が見られた。

＜合同分科会＞（「言語とコミュニケーション」分科会と）

加州南部では，最近スペイン語系の住民の増加により，2種，3種の言語を使用し，授業を進める公立小学校が現われ，その是非をめぐって新たな論争が起きている。これを例にとった，国家はその国の使用言語を母国語としない人々にどのような処置を施したらよいのかについての議論は大きな盛上がりを見せた。日米に関係なく，どの程度方策を講じるべきかは各人微妙な違いを見せ，税金と国家出費の問題や，人口移動に伴う問題等が絡まり，一筋縄では解決のつかない問題であることを痛感させられた。

＜野外研修＞

野外研修先としては，先ず，①ＮＥＣダラスプラントを訪れ，日本人とアメリカ人が共に働く場でどのようなルールが用いられているかを伺った。ワシントンでは，②スミソニアン博物館見学の後，③死刑反対運動連盟で社会が個人に最も大きな影響を及ぼす死刑をどのように眺めているかについて非常に興味深いお話に触れることができた。フィラデルフィアでは，下町に広がる麻薬や暴力から少年達を守る団体，④ハウス・オブ・ウモジャの方々にお話を伺った。麻薬問題の深刻さを語る姿は大変リアルで，一同大きなショックを受けた。最後は，⑤クエイカーフレンドセンターにおいて，平和主義を貫く彼等の社会観に触れる機会に恵まれた。末筆ながら野外研修の希望を受け入れて下さった各団体の方々に厚く御礼を述べたいと思う。

（岡田　治）

政治と社会
（Political Systems and Public Policy）

「若者と時代」の分科会との合同ディスカッションで議論になったことの一つに次の問いがあった。「私達若者にとって，政治に参加するということはどういうことか，また，政治学を学ぶということはいかなる意味をもつのか。」今日，ともすれば「政治」は私達にとって縁遠いもの，私達とは無関係にどこかで進められて行くものと感じられがちである。私達にとって政治とはなにか，を問うことは私達の分科会に課せられた課題の一つであったと思う。以下，各論文の内容とそれについての討論をふりかえってみたい。現在日米間の最大の懸案である貿易摩擦，その背後にある文化摩擦や日米の政治制度や民主主義の違いといったテーマに関心が集まった。

岸　道信，Michael F. Walsh，本田雅俊，Tracy P. Lenard
小堀貴子，Denise E. Banner，Alisa B. Goldberg，宇野重規

＜分科会討論＞

1.　「日米両国の直面する経済問題」
Michael　Walsh

戦後，アメリカは自由貿易体制をリードし，日本はその体制の中で，輸出中心の新重商主義政策をおしすすめ，経済発展を遂げた。しかしそのような関係は今日アメリカ側からの批判を受けるようになっている。Mike は，この問題の解決を探り，日本の内需拡大の方策を考える一方，国際援助や防衛負担の増加を提案している。

2.　「無国境化した経済―日本政治のインパクト―」
小堀貴子

今日経済は国境の壁を越え，ますますグローバル化していくのに対して，政治は相変わらず国内の論理にしたがっている。このことは貿易摩擦などの問題を生じさせている。小

堀は，政治もまた無国境化して行くのか，もしそうなら，その問題点は何かを問い，そのような状況の下での日本政治のあり方を問いかけている。

3. 「日本は民主主義国家か—日本式民主主義について—」

本田雅俊

日本は真の民主主義国家ではないという批判がよくある。本田はその理由としてよく挙げられる自民党の一党優位体制や官僚支配の批判を二大政党制信仰によるステレオタイプとし，日本政治はその中で民主的な自由競争が行われていて，タイプこそ違うがれっきとした民主主義であるとする。

4. 「日本型政治制度の機能不全と外圧」

宇野重規

逆に宇野は，日本の政治を真に民主的でないとする。議員は「地元の面倒」，「業界の面倒」をみれば，組織票で当選できる。国会は国民の声を反映せず，国民的コンセンサスを作る場としては機能していない。外国との様々な摩擦の増えるなか，国際社会における舵取を国民の手で決めていくシステムづくりの必要をうったえる。

5. 「現代日本の官僚制」

岸　道信

日本の官僚は優秀であると言われることがあるが，岸はこれに疑問をなげかける。日本人は自らを閉鎖的な単一社会と考え，調和を貴び，権威に盲従する傾向があり，これが官僚制を支えているとする。また，官僚の決定作成過程やその意識や行動を批判し，これらの問題を，日米半導体協定・東芝ココム事件において探り，あるべき官僚制の姿を考える。

6. 「自民党における政治の特徴」

Tracy Lenard

Tracy は，日本政治を理解するために自民党に注目する。自民党の派閥・金権政治・内部組織の起源をその前身である政友会・民政党にさかのぼって考える一方，総裁・役員会・幹事長・総務会・政務調査会などの決定機関の役割を探っている。

7. 「大統領を生み出すまで」

Denise Banner

アメリカの大統領選挙においては，その政策よりむしろ候補者の（マスメディアを通じて有権者の目にうつった）パーソナリティやスタイルのほうが重要な役割をはたすことが多い。Denise は，この傾向をケネディ・カーターなどの選挙戦を例に説明し，やや個性に乏しいといわれる今年の選挙戦の両候補，ブッシュとデュカキスの場合はどうか，述べている。

8. 「エイズ患者政策」

Alisa Goldberg

Alisa は以上の諸論文とはややおもむきをかえ，両国に共通の問題であるエイズについて考察した。エイズは現在のところ治療法がない。そのためにエイズ患者への差別，エイズテストをめぐる人権侵害などエイズ患者の人権とその他のまだ感染していない人の人権の衝突が生じている。その治療法確立までの最大のキーは教育であると結論付けている。

以上の論文について様々な討論がなされたが，興味深かったのは貿易摩擦や日本の農産物の自由化についてディベートをおこなったことである。日本の見地から主張する組とアメリカの見地からする組に分かれたが，それは必ずしも日本側代表とアメリカ側代表に一致せず，中には日ごろの主張と逆の主張をしなくてはならない人もいた。これは，相手の

立場に立って考えるという意味でとても勉強になったと思う。

＜野外研修＞

野外研修として以下の場所・人を訪ねた。

① Mr. Forrest Smith（ダラス・フォートワース国際貿易協会）

スミス氏はその経験をふまえ，日米の貿易関係についてお話して下さった。その後，ワールド・トレード・センターでのパーティーに招いていただいたが，そこには経済関係の様々な人々がいて，色々な話ができた。

② Ms. Mable Thomas（ジョージア州議会議員）

黒人女性政治家のトーマス氏は，私達の宿泊先のジョージア工科大学の学生センターにまで自ら宣伝カーを運転して来て下さり，州議会の活動についてきさくにお話して下さった。連邦制度をとるアメリカでの州の果たす役割の大きさ，氏の若々しさとエネルギッシュな態度が印象的だった。

③ Mr. Thomas Leonard（センター・フォー・ディジーズ・コントロール）

「科学と社会」のテーブルと，合同ディスカッションでエイズについてのテレビ討論のビデオを見た後，同センターを訪ね，エイズについて説明を受けた。

④ Mr. Joseph Massey（米国通商代表部）

日本でも最近非常に有名になった米国通商代表部でマーシー氏に同代表部の活動，日米貿易摩擦についてお話していただいた。氏は非常な日本通で，日本についての理解も深く，おもしろい方だった。

⑤ Mr. Chuck Allen（ナショナル・リパブリカン・コングレッショナル・コミティ）

アレン氏はアメリカにおける政治宣伝の実際をビデオを用いて紹介して下さった。民主党・共和党の互いを批判するテレビ宣伝などは見ていてなかなかおもしろかった。

⑥ Mr. Phil Burgess（U. S. ウエスト）

バージェス氏は私達を私邸のガーデン・パーティに招いて下さった。そこではヒスパニックの学生や南米の国の留学生の人達とも話す機会があった。また氏は，日米を頻繁に行き来している方で，その経験を踏まえたお話はとても興味深かった。

以上，色々な方々のご協力とご親切によって，私達は多くのことを学び，考えることができた。研修先の皆様にこの場を借りて感謝の意を表したい。

政治とは何か，容易に答はだせない。しかし，私は異なった意見・思想・利益を持つものが共存して行くために欠かせないものであると思う。独裁者の支配する全く多様性のないところでは政治はいらない。異質なものとの接触なしには進歩はない。この分科会においても様々な異なる意見がかわされた。これを通じて自分のそれまで考えていたことを再検討することができたと思う。

（宇野重規）

哲学と芸術
(Philosophy and the Arts)

芸術というのは,「想い」の結晶であるという考え方の上に，私達はこの分科会での討論を進めた。意識的であれ，潜在的であれ，形となって表現される芸術の背後には，ほとばしるような思想と感情の流出が見い出され，しかもそれは国境を超え，我々人間の胸に普遍的な共感を呼ぶものなのだ。

言葉の壁にぶつかったり，抽象概念をうまく伝えられないもどかしさを感じながらも，私達はとらえようもなく大きな，言い表わすことは難しい「宝庫」を探りあてようとしていた。以下はその経緯である。

＜分科会討論及び野外研修＞

7月26日（火）

1. 陽炎がアスファルトからたちのぼるような猛暑のダラスで，私達はフォートワースにある日本庭園へ足を運んだ。同志社大学の藤原泰子が「庭園にみられる自然の概念」について論文を書いたからである。

藤原は，例を見せながら東西の庭園を比較し，更に相違の原因となる西洋人と日本人の自然に対する考え方について，議論を展開させた。自然の移りゆく様相が明確で，しかも台風や津波などの要素を持つ日本では，＜変化＞は当然のことであり，それは万物流転，輪廻転生といった言葉にも表される。独特の縮景法により，自然の風景を理想化し，象徴化に努めようとしたところに大きな特色がある。これに対し，単調で変化に乏しい気候のヨーロッパは＜変化＞を否定し，自然を人工的パターンの中にとりこもうとするような印象を与える。

環境の影響を多大に受けることにより生じるこのような違いは，そのままそれぞれの国民性の違いを生む異なる土壌に通じると藤原は指摘し，互いのバックグラウンドを理解しようとする姿勢の重要さを，改めて私達に認

児島芳樹，増田行子，J. David Mariscatti，Gregory H. Kalfas，藤原泰子
Constance M. Chen，新田陽子，Kim L. Milone

識させた。

2. 藤原の次には，マックギル大学のDavid Mariscotti が，日本映画についての発表を行った。

Davidは，日本映画の歴史を大きく明治から戦前，そして戦後から今日までに分けた。前者は，体制に基づいたアイデンティティーが映画という手段を通じて，国民に伝えられた時代であり，後者は，終戦によってもたらされた自由と解放の中で，新しいアイデンティティーの在り方をもとめる映画の時代である。これらの共通点は，日本においては映画が価値観や社会観念といった極めて思想的な事柄をアピールする役割を果しており，観客の欲求に答える娯楽としてのアメリカ映画とは対照的である。日本において映画の社会に与える影響は，他に類を見ないと彼は結論づけ，アメリカのマス・メディアと同等に近い精神的権威を持つものとした。日本映画に関する彼の深い造詣は，驚くべきものだったといえよう。

7月28日（木）

① 最初の野外研修先である，ダラス黒人舞踊劇団のアン・ウイリアムス美術監督は，豊かな身振り手振りを交えて，黒人だけで創設された劇団の成り立つ経緯や，将来へと抱えている主題について，熱っぽく語って下さった。鋼のバネと，生きた彫刻のような美しい身体を持つ劇団員の案内してくれた稽古場やオフィスは，明日への希望を感じさせるエネルギーに満ちていて，私達は皆強く魅きつけられた。

7月30日（土）

② ウッドラフ・アートセンターにて，劇〝ファウスト～米国大統領編～〟。文豪ゲーテのファウストを下敷きに，次期大統領選を痛烈に皮肉ったこの舞台は，上演禁止の命を受け，私達の訪れたのはその最後の公演日だった。簡素なセットと数名の役者ながら，その質の高さと娯楽度はかなりのものであった。

7月31日（日）

3. ジョージア工科大学の一室で開かれたこの日のディスカッションは，非常に活気に溢れた刺激的なものとなった。ハーバード大学から来たConstance Chenは，東洋と西洋の絵画を比較しながら，それぞれの芸術表現に対する考え方の違いを明らかにした。社会や既成の事実を見つめる，いわば客観者としての役割を画家に期待する西洋と異なり，日本絵画の基盤には，「見えないもの，聴こえないもの」を画家の感性でとらえようとする姿勢がある。視る者にある程度以上の知識を要求する西洋に比べると，日本絵画を理解するには，ただ鋭い直覚が必要なのだ。画布が額縁を境として，描く者と視る者を区別してゆく西洋，逆に空間を重んじることによって視る者を絵の一部としていく東洋。これらの事柄はそのまま私達の文化の違いにあてはまり，身近な話題を通して，熱っぽい議論が展開された。

8月3日（水）

③ キャランウォード美術館の見学。

4. 昼食をはさんで早稲田大学の新田陽子が，日本人の神観念について発表した。彼女は主に古代から仏教伝来までの宗教美術をとりあげ，例を示しながら，〝八百万〟ともいわれる神々と日本人の特有な関係を説明した。

太陽神アマテラスをはじめとする日本人の自然崇拝は〝目に見えない神々〟の系譜である原始神道となって，今も各地に影響を残す。一方で伝えられた仏教は，仏像建立という神々の偶像化を日本人に教えた。ちょうど〝目

に見える神々″であったギリシャ神話の神々が〝目に見えない神″を父とするキリスト教にとってかわられたのと逆の現象がおきたのである。また，日本独特の神仏習合思想は，米国人にとっても興味深いものであり，各々が体験に基いた宗教論を披露し，話に花を咲かせた。

8月8日（月）

④ 「歴史と文化」の分科会と共に訪れた数々の東洋美術の名品を展示するフリーア・ギャラリーは，日本美術の海外流出を考えさせ，また改めてその素晴らしさを認識させるきっかけとなった。明るい陽射しをうけて輝くスミソニアンの博物館群は，米国の持つ途方もない文化に対する関心の大きさと，その許容度の豊かさを日本人達におしえた。

5. 午後，青山学院大学の増田行子によるプレゼンテーションが行われた。「感情表現と洗練性〜都市を通して〜」と題された彼女の論文は，感情，洗練，知脳，芸術，都市の5項目についてそれぞれ意見が述べられ，全体を通して人間とは何か，芸術とは何か，という問いが投げかけられていた。このような答えにくい問いを，情緒と知性という対立した概念からとらえようとした彼女の試みは，抽象的ではあるがユニークで，関心をそそられた。情緒と知性の均衡の結果として生れる洗練された感情表現が芸術なのだ。としたら現代における東京のような大都会は，その中で暮らす人間や，社会機構など全てを含む都市として，そのものが巨大な芸術作品ではないかという彼女の考えは新鮮で，熱心に耳を傾ける者が多かった。

8月11日（木）

6. ミシガン大学の Gregory Kalfas の発表は，ブロードウェイミュージカルをモチーフとしたが，当人が演劇に関わっているだけあって詳しく，有名ミュージカルのテーマソングを流しながらの軽快でリズム感に溢れたものとなった。彼の知識が群を抜いているため，討論には殆ど発展せず，質疑応答に終始したが，20世紀のミュージカルの歴史をたどることは，次の週に N. Y. へ行く事も手伝って和気あいあいとした雰囲気の中楽しかった。究極のエンターテイメントとしての存在を追究しつづけるブロードウェイミュージカルも，その時代と人々を反映した存在理由があり，今日，従来のミュージカル形式と異なるブロードウェイオペラ—「エビータ」，「レ・ミゼラブル」，「オペラ座の怪人」等—の大成功もそのひとつである。また「キャッツ」等，アメリカを原点としないミュージカルの普及にみられる国際化も，近年のトレンドのひとつだと指摘した。

7. 午後は，折よく催されていたフランク・ロイド・ライトの展覧会を見学後，ロヨラ大学の Kim Milone を中心にライトについて語り合った。アメリカの生んだこの偉大な建築家は，有機的建築を標榜したが，それは材料の本質を生かし，敷地となる環境の特性の止揚をはかり，その結果，建物の構造と機能は一如となって，いささかも人間の自由な意志の発露を阻むことのない存在となる。諸空間の自由な移動と，調和，そして開かれた自然に重点を置いた彼の建築物は，日本の美学や道教も影響を受けている。限りない精神性と個人の自由なインスピレーションを追究した作品群に，感銘を受けた者は多かった。充分な討論時間の割けなかったことが心残りである。

8月12日（金）

⑤ 芸術の世界における女性の地位と役割

の認識のため，独自の運動を続けているメリー・ホプキンス氏に興味深いお話を伺った後，ペンシルバニア美術館へモダンアートの見学に出かけた。五感を強く刺激し，作用する作品群に，大きな感動を受けた者，嫌悪をしめす者と様々だった。

8月14日（日）

8. Davidの広い家で，爽かな緑風に吹かれながら，最後のプレゼンテイターである東京大学の児島芳樹が，近代の基本的な世界観についての分析をおこなった。彼は私達一般市民の価値観，世界観を考察し，近代という言葉で総括されるこの時代についての多くの言説から，その基底にある共通する考え方の特徴を抽出した。他のメンバーに較べ，思想を中心とした発表は個性豊かで，分科会における討論の在り方そのものにまで，議論が発展した事は，ラストを飾るにふさわしい幕切れだったのではないだろうか。

8人ではとてもカバーしきれない広大な芸術という名の王国を，僅かずつながら私達は確実に歩んだと思う。たとえ小さくとも，何らかの足跡になれば，この分科会の意義はあったのかもしれない。　（新田陽子）

歴史と文化
（History and Culture）

日米文化摩擦とも言われるように，近年の日米間の経済・政治上の摩擦は，文化の分野にまで波及しつつある。今こそ私達は文化の相互理解に努めるべきであり，その際，歴史的観点が不可欠である。私達はこのような問題意識で，討議に臨んだ。

＜分科会討論＞

1. Brian Foote

「ステレオタイプ」と題して，日米両国民

Lisa M. Shaver，Zachary W. Raley，Brian L. Foote，近藤　夏
渋谷　恵，山本晃一，塚本亜希子，Susan C. Shin

が互いに対して抱いてきたステレオタイプ的イメージを歴史的に概観し，我々は異文化について不正確または不十分な知識しか持たないときにステレオタイプを作りがちである，と指摘した。ステレオタイプの功罪やマス・メディアの責任などについて話し合い，興味深い発表となった。

2. 塚本亜希子

「日本人の自己像の変化」を扱った論文では，明治以降の日本人の手による日本人論を取り上げ，それらの多くの基底にある西洋への劣等感を指摘し，経済大国となって目標を喪失したかに見える日本は，新たな自己像を持つことを迫られているが，その際，誤った優越感を抱くべきでない，と主張した。

3. Susan Shin

「差別の歴史：日系米国人強制収容」と題した論文で，この不幸な出来事の歴史的経緯を示しつつ，その背景には人種偏見のみならず，経済的・政治的要因が存在したことを述べた。

4. Lisa Shaver

「すべての者へ正義をもって」と題した論文で，Susan同様に日系アメリカ人の強制収容問題に焦点を当て，歴史を見る際に〝Why〟を〝How〟との関連で理解することの重要性を述べた。

偶然ではあるが，2人のアメリカ人学生が「日系米国人収容」をトピックにしたことは大変興味深いことであった。

5. Zachary Raley

「アメリカ人にとって禅とは何か」と題する論文は，なぜアメリカに於て禅がこれほどまでに受けいれられたのかを分析するものであった。各人の宗教観を混じえて，日本の「宗教的寛容性」の理由や，新興宗教についてなど，興味深い議論が行われた。

6. 近藤　夏

「日本における〝恥〟の歴史と文化」と題する論文では，ベネディクトが「菊と刀」で展開した議論に代表される「恥」・「罪」の観念に関する諸説を検討し，日本における，「恥」の概念や歴史等を論じた。また参加者全員に対してアンケートを行い，日米の学生の間で「恥」・「罪」の感覚について対照的な結果が得られた。

7. 渋谷　恵

「近代国家への移行：明治期の生活習慣について」と題して，明治政府の近代化政策が国民の生活習慣の西洋化の強制にまで及んでいたことを示した。「西洋化」＝「近代化」なのであろうか，日本では西洋化の程度を尺度に文明に優劣をつける傾向があるのではないか、などの点が挙げられた。

8. 山本晃一

「敬語の考察」と題する論文発表では，日本語の特徴としてしばしば取り上げられる「敬語」の国語史における変化，その社会的背景，英語との対比などを述べた。敬語の簡略化・婉曲化は支持されるべき方向である，と主張した。

ユニークな個性をまとめ，分科会を成功に導いてくれたコーディネーター，Natsu と Brianに感謝したい。

最後に〝The History and Culture is The Best Table！〟

（山本晃一）

＜野外研修＞

① オールドシティパーク（ダラス）

かつてアメリカ系住民自身の力でメキシコから独立をかちとり，後に州として合衆国に編入したテキサスは，現在でも50州唯一，州

旗を国旗と同じ高さに掲げることを許されている州である。その独立・編入当時，19世紀の民家，商店，教会などを一同に移築した歴史公園を訪れた。教会では当時の衣装を着たテキサス出身の英雄たちが，彼らのフロンティアスピリットあふれる生き方，テキサスの歴史を語ってくれた。千年以上の歴史をもつ日本の古い木造建築などに比べれば，まだわずか百数十年前の建物ばかりで，この国の歴史の浅さを感じずにはいられなかった。しかし，背後に立ち並ぶダウンタウンの摩天楼と広い芝生の中に点々と並ぶ木造の小屋を見ながら，彼らがアイデンティティの源泉として自分たちのアメリカへの第一歩目の足跡をどれだけ大切にしているのかを感じた。

② ハイ・ミュージアム・オブ・アート（アトランタ）

1983年に建てられたこの美術館は，その建物自体，真白なタイル張りで現代的・かつ外観や内部の構造には曲線が使われ，自然光をいっぱいに採り入れた，明るく美しい美術館である。美術館はもはや単に過去の作品の陳列会場ではなく，新しい文化・芸術を生みだす場でなくてはならないことを十分に意識し，そのための企画を意欲的に行なっているようだった。日本でも，このような活動が最近見られるが，ますます必要ではないかと思う。

③ ＣＮＮセンター（アトランタ）

見学ツアーで，ＣＮＮのスタジオや番組の裏で働く人々の様子をみた。テレビで見ているＣＮＮのニュースが放映されているのを目の前にしても，なかなか実感がわかなかった。また，これだけの情報の中心が，首都でもない南部のアトランタに本拠を置いていることは，今の日本の東京集中の状況では考えられないことである。

④ スミソニアン美術館（ワシントンD.C）

数ある美術館，博物館群の中で，フリーア美術館とアジア芸術を集めたサクラーギャラリー，国立アメリカ歴史博物館を訪れた。サクラーギャラリーの隣にはアフリカ芸術の美術館があり，共に新しく，アメリカがアジア，アフリカに強い関心を持ち始めたことを感じさせるものであった。また，日本という風土から切り離されて，単に美術作品として展示されている仏教画や仏像を見て，文化と風土の密接な結びつきを改めて感じた。

⑤ フィラデルフィア史跡ツアー

リバティベルをはじめ，建国当時の重要な建築物が残されている一帯をテープの案内に従って歩いて回るツアーを行なった。昼のレセプション帰りで，それぞれワンピース，背広姿のまま，照りつける太陽のもと３時間以上歩き回るという苛酷な野外研修であった。が，勝手にしゃべりまくるテープに加えて，アメリカ人学生が一つ一つ詳しく説明してくれた。テキサス，オールドシティパークで見た建物と，建国時の政治，経済の中心として働いたレンガ造りの建物との対照は印象的であった。

「歴史と文化」をテーマとする私たちにとっては，アメリカで見るもの聞くものすべてが,「歴史と文化」の体験であった。野外研修では同じものを見ても，日米あるいは個人によって大きく異なる見方，考え方を知ることができた。一人で，あるものを一面から見るより，８人がそれぞれの視点から見ることによって，そのものの立体的な姿が多少なりともつかめた。「歴史と文化」という身近なテーマを考えるとき，私たちは近視眼的な見方

に陥りやすい。が，分科会の討論，野外研修，また会議全体を通じて学んだ，立体的なものの見方というものを忘れてはならないだろう。

（塚本亜希子）

若者と時代
（Younger Generations：
Past, Present, and Future）

当分科会は，会議全体をとおして，徐々にひとつの強烈なメッセージを形づくることとなり，最後には当会議のカウンターカルチャーを自負するまでに至った。そのメッセージとは，「だが，お前はどうなんだ?!」という問いかけに始まる。私達は，スケジュールで充てられた分科会討論の時間のほかに，ジョージア工科大のカフェテリアやジョージタウンのレストラン，ブリン・マーからフィラデルフィアのダウンタウンに向かう列車のなかなど，あらゆる場所で延々と討論を続けた。話題は多岐にわたったが，いづれの場合もそれぞれが自分自身について語る語り口を求めていた。私達にとって，〝若者〟とは〝自分〟のことであり，〝時代〟とは〝今〟をおいて他にないという認識が，議論のなかから自然に培われていったからであろう。以下は当分科会の討論及び野外研修内容の概略である。

＜分科会討論及び野外研修＞

1. 「麻薬の蔓延：日本とアメリカ」

Craig Sherman

Craig Shermanは今アメリカで大問題になっている麻薬に着目した。最近ではクラックという新種が中高生はおろか小学生をも脅かしつつあるという。各種の麻薬の違いの説明から始まった発表は，何故麻薬がアメリカでこれほどまでに蔓延しているのか，何故日本ではそうならないのか，現状と歴史的背景，現在アメリカで麻薬を合法化しようとする動きがあるが，これが実現されたらどんな影響が考えられるか，等の討論に及んだ。討論のなかで各人は自身や自分の身の回りの人々の麻薬体験を披露し，日米の違いがくっきりと浮き彫りにされた。

2. 「現代日本のいじめ」

服部直也

服部直也は，日本の学校で問題となっている「いじめ」を取り上げ，その原因について論じた。彼は特に，最近では劣っている者だけではなく，秀でている者もがいじめに遭っている現状に注目し，これは日本社会の同質化が進む兆候であり，ますます日本からは優秀な人物が生まれなくなるとの見解を示した。討論では，日本側が各自の学校生活を振り返り，今のいじめ現象への移り変りを考察し，アメリカ側も自身の学校での問題と比較検討した。

① ダラス少年感化院

少年犯罪と呼ばれる青少年の逸脱行動の実際に触れるため，私達はダラス市郊外の少年感化院を訪れた。質疑応答を中心に行ったスタッフの話では，テキサス州の社会政策の弱さや少年更生制度の歴史的変遷，多様化している更生プログラムの一週間単位での概観，少年犯罪の種類の移り変り，人種間での犯罪率の違い等が語られた。また，スタッフの案内で設備を見学することができ，独房の広さなどについても話が及んだ。麻薬が少年犯罪の隅々にまで浸透しているという話が，やはり私達の注目を浴びた。

② アトランタ・サバイバル・ゲーム

敵味方に分かれて林のなかに入り，当たるとペンキが飛び散る弾を撃つ玩具のピストルを使い，敵陣の中央にある旗を取り合うという，子供の遊びを応用したゲームが大人の間ではやっている。プレーヤーは迷彩服を身にまとい，用具は洗練され，専門雑誌や全米選手権もある。私達はこのゲームに実際に参加し，弾を撃ち合い，〝殺され〟，戦場に極似した状況を人工的に作り出しているプレーヤーが，実は平和主義者であるというパラドックスを共体験を通じて理解することができた。

③　グレイディ病院：十代妊娠相談所

アトランタのダウンタウンの一角にあるこのセンターで，カウンセラーや実際に妊娠・出産を体験した十代のボランティアと話し合いの機会をもった。彼らの仕事は，家庭や公立学校に出向いて性についての情報を与えることや，クリニックでの妊娠チェックやガイダンスである。話し合いのなかでは，セックスへの様々なプレッシャーを断るテクニック，中絶するかどうかの決断の問題，男性側の役割，宗教との関係等が話題にのぼったが，なかでもカウンセラーが教育の重要性をしきりに説いていたことと，思春期から結婚まで約10年間まったくセックスをしないことが現実的であろうかというコメントが印象的だった。

3.　「教育の力」

Willamarie Moore

Willamarie Mooreは昨今アメリカで論議を呼んでいる「教育の荒廃」(いわゆるCultural Literacy issue)をテーマに選んだ。発表では今や教師は生徒に〝指針〟を与えることができず，結果として若い世代は「いかに物事を思考するか」の訓練ができていないことが指摘された。つづく討論では，その原因が探られ，何らかの指針があったとされる60年代と80年代が比較検討された。60年代が，〝失敗した〟ことによる失望感，敵の不在，画一化傾向等が話し合われ，自分達や身の回りの学生生活を紹介しあったが，80年代に，「学生」であることをあまり心地良く思っていないメンバーが多いことに驚かされた。

④　ナショナル・エンダウメント・フォー・ヒューマニティーズ

ワシントンＤＣにある連邦レベルの教育諮問機関で1965年に設立された。主に初等及び中等教育で言語・歴史・文学の基礎知識を教え込むよう指導しており，最近の教育論争で注目もされている。私達はここを訪れ，能力別クラス編成の是非，創造性教育と記憶中心の教育の理想的バランスの問題や，昨今の論争の火付け役であるＡブルームやＥヒルシュについて意見を交わした。さらに高等教育機関の諸問題にまで発展し，教授の業績主義や一般教養科目の教授法などについても話しあった。

4.　「文学における若者像の変遷と今日の若者」

鬼頭三樹恵

鬼頭三樹恵は「太陽の季節」「赤頭巾ちゃん気をつけて」「なんとなくクリスタル」の三点をそれぞれ，60年代，70年代，80年代の若者を描いた文学作品として選び出し，主人公を中心とした若者像について比較検討を行なった。討論では，特に70年代とはどういう時代であったかに関して，ミーイズム・やさしさ・深夜放送・疎外感・暴走族・ラブホテルなどのキーワードを抽出して意見を交換し，さらにホテル・カリフォルニアの歌詞分析を試みた。メンバーのなかでの若干の世代の差が，70年代に非常に思い入れがある者と70年代がまったくの空白という者をくっきりと二

分したのが興味深かった。

⑤　ジェイムス・ギルバート氏

（メリーランド大学教授）

ジョージタウン大にギルバート教授を招いて，アメリカにおけるマンガ雑誌の特徴や人気の盛衰について1930年頃から現代までを通観した。スーパーマンから始まって，人気が出るとともに反対運動も盛り上がった50年代，一時衰退の一途を辿った60年代等々。討論のなかで日本におけるマンガ雑誌事情との比較も試み，アメリカのマンガの伝統がサクセスストーリーやスーパーヒーローを描くのに対し，日本では人間性や協調性を訴えるものが多いなどの意見が出された。氏の，80年代は新ピューリタニズム的傾向が見られる点で50年代と似ているという指摘が私達の興味をひいた。

5.「パンクロック・サブカルチャー／対抗文化創造の物語」

Morley Robertson

Morley Robertsonは，1950年代以降画一化の進む一方であるアメリカ，そして日本において，対抗文化というものはどこから，そしていかにして生まれ得るかを検討し，その題材としてパンクロック，特にセックスピストルズを取り上げた。彼の持参した数々のテープを聞き（彼自身のバンドも含め），パンクの型破りなメッセージの伝え方に親しんだ。討論では，80年代＝今，若者＝私達にとっての対抗文化の必要性や可能性について話しあった。Morleyの〝自己の内側からの出発〟という思想と実践は，私達の胸に確かな刻印を残した。

＜合同分科会討論＞

（「政治と社会」分科会と）

「政治と社会」の分科会と，若者の政治参加について話し合いの機会をもった。

6.「若者と日本の国際化」

青木麻喜子

青木麻喜子は，現在「帰国子女」と呼ばれる日本の若者が増加していることを念頭に，彼らが日本の国際化に果たす役割の大きいことをいくつかのデータをもとに発表し，日本はこれらの人々のもつ属性を充分に活かしていくことが肝要であると主張した。討論では，文化摩擦の問題や各人のいわゆるカルチャーショック体験の有無などが話しあわれ，さらには，この会議が各人に及ぼしつつある影響などについても話しが及んだ。「関西人は東京よりもアメリカの方が違和感を感じない」とのコメントはとても興味深かった。

7.「『ライ麦畑でつかまえて』50年代アメリカと80年代日本」

Elissa Leif

Elissa Leifはサリンジャーの小説「ライ麦畑でつかまえて」が50年代のアメリカと80年代の日本で同様に人気を博していることに注目し，その共通性を考察した。50年代のアメリカは親子関係に大きなきしみが見られた時代であり，子供の〝反逆〟の象徴としてこの書物が売れた――同様のことが〝新人類〟世代の日本にもあてはまらないか等々。討論では，これと関連して日本での村上春樹人気や，アメリカでの「ブライト・ライツ・ビッグ・シティ」の成功などが紹介され，そのトーンの共通性の理由を探ってみた。

8.「消費社会と現代日本の若者」

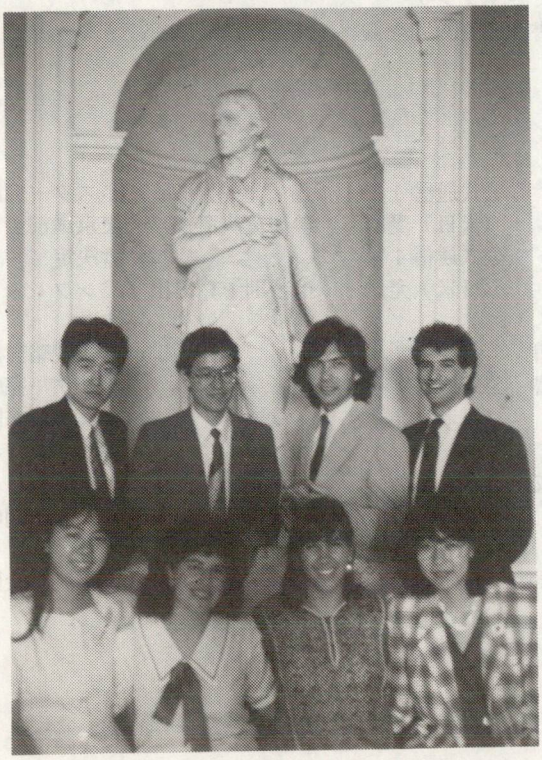
今田克司

今田克司は現代日本の若者の政治的保守化傾向，行列を楽しむ現象，ファミコンブームを端緒に，日本社会がここ30年来の生産志向型社会から消費志向型社会に変化しつつある

ことを論じた。彼にとってはこの象徴的存在が東京ディズニーランドであり，日本全体が〝ディズニーランド化〟しつつあると憂慮した。討論では，日本における諸々のブーム現象にスポットを当て，アメリカでそれほどの全国的現象が起こらない理由，アメリカの消費性向の変化などについて考慮した。

この分科会はひとつの実験であったと思う。天下国家や日米関係，平和，経済，教育等を議論する会議の伝統に，〝自分〟というものを前面に押し出す視点をもつことで一石を投じてみたのだから。しかしこれは結果であって当初からの確固とした目的ではなかった。8名の参加者が討論を重ねるに連れ，精緻な理論や崇高な理想もコミットメントなしにはただの脆弱な建造物であることを訴えかけあうスタイルが私達のなかにできあがっていったのである。この意味において，この分科会は大成功であった。確かに私達はトピックに恵まれていた。しかし以上のような認識は，トピックの相違に拘らず常に追求されるべき態度ではないだろうか。私達が会議に向けて投げた石は既に波紋を作り，次回以降の会議に生かされるはずである。そうなることを切に願いたい。

（今田克司）



服部直也，今田克司，Morly E. Robertson，Craig D. Sherman
鬼頭三樹恵，Elissa Leif，Willamarie Moore，青木麻喜子

第３部　準備活動報告・エッセイ

準 備 活 動 報 告

第40回日米学生会議日本側実行委員会活動記録

当会議は「学生の，学生による，学生のための会議」として，その準備活動のほとんど一切を，前回の会議の参加者から選出された実行委員が担う伝統を持っている。実行委員会の活動内容は日米で多少の違いがあるが，日本側についていえば，財務・経理活動，広報活動及び選考，アメリカ側との各レベルでの通信に大きく分けられる。以下はその活動内容をまとめたものである。

	全　体	米側との通信	財務・経理	広　報	選　考
87. 8	新実行委員会ミーティング 及び長崎合意書作成（39回会議終了時）				
87. 9	新旧引き継ぎ 定例ミーティング開始				
10		公式通信１ （米日）受取		ポスター発注	
	理念合宿 テーマ・タイトル和訳	公式通信１ （日米）発送	参加費決定 担当別予算提出	東京講演会講演者決定 パンフレット発注	応募資格討議
	第１回選考合宿 39回事業報告書完成	公式通信２ （日米）発送		広報戦略討議 ポスター完成，配布開始	選考の理念討議
11	39回ビデオ完成	公式通信２ （米日）受取 公式通信３ （日米）発送		パンフレット完成，配布開始	
	第２回選考合宿	公式通信３ （米日）受取 公式通信４ （日米）発送		大学説明会開始	方法討議 日程・場所・受験料等決定
12		公式通信４ （米日）受取		東京講演会・説明会１	選考コミティ発足
	代理店決定 外務省後援依頼	費用負担電話交渉	予算書作成 財務活動戦略討議	実施要領案作成	会場予約 方法決定

	全　体	米側との通信	財務・経理	広　報	選　考
12		公式通信 5 （米日）受取 公式通信 5 （日米）発送		実施要領発注	
88. 1				地方大学等へポスターとパンフ発送 東京講演会講演者決定 実施要領完成，配布	
	外務省後援決定	公式通信 6 （米日）受取		ダイレクトメール発送 メディア広報開始	ＯＢ面接官依頼
2				東京講演会・説明会 関西講演会・説明会	問題作成合宿 受験案内等作成
3		公式通信 6 （日米）発送 公式通信 7 （日米）発送			応募締切 １次試験
	長崎より被爆者招待決定	公式通信 7 （米日）受取			採点 １次合否通知発送 ２次試験
4	第３回選考合宿	公式通信 8 （米日）受取 公式通信 8 （日米）発送 公式通信 9 （米日）受取	財務活動開始		参加者決定 合否通知発送
	39回報告書完成				
5	全体合宿 東京・関西定例会開始	公式通信10 （米日）受取 公式通信 9 （日米）発送			
6		公式通信11 （米日）受取 公式通信10 （日米）発送 公式通信12 （米日）受取			
7	直前合宿		目標金額達成		

※1. 米側との通信には，上記の公式通信（日米委員長間）の他，委員長間非公式通信，分科会・フォーラム・コロキアム・開催地等のコーディネイター間通信が存在する。

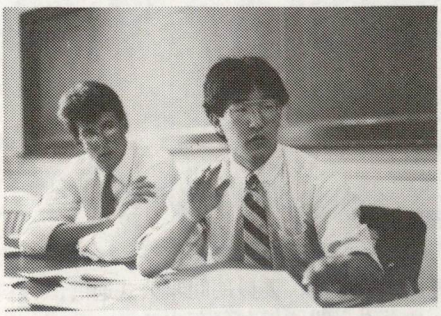
2. 会議が日本で開催される際には，上記の項目に，実際の会議日程作成のための「プログラミング」が加わる。

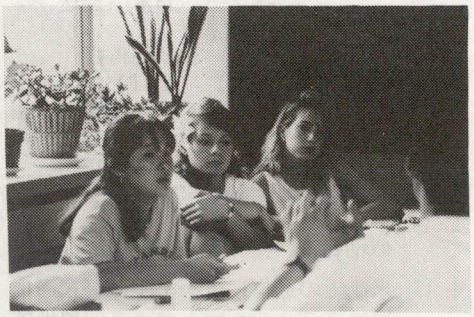
準備期間～関東編～

5月3日から5日の3日間の全体合宿を終え，参加者の各人がそれぞれのフォーラム，コロキアム，ジャパンナイト，分科会等の準備を始めることになった。日米学生会議への参加が決まったものの，前年の会議を知らない新参加者にとってまさに暗中模索といった感じの中で，けれども前年の参加者である実行委員の助言のもとに，本会議へ向けての準備がすすめられた。場所は四谷の国際教育振興会の教室を使い，基本的に毎週土曜日2時から5時に定例会がもたれた。内容は主に実行委員から会議全般についてのインフォメーション，フォーラムのためのディスカッション及びその中間発表，テーマディスカッション，ジャパンナイト，ＪＬＣの打ち合わせ、分科会のミーティング，英語でのディスカッション等で，限られた時間の中，毎回，毎回実行委員の1人がレジュメを切り，参加者が自分の担当のフォーラム，ディスカッション等の準備をし，定例会に臨むという形で進められた。例えば，フォーラムの中間発表ではそのフォーラムのタスクフォース（担当者）が今までに調べたことをまとめて発表するのだが，その後参加者による質疑応答又はディスカッションと，そのフォーラムの担当でない者に新たな知識を，そして，そのフォーラム・タスクフォースには新しい視点を与えるというようなミーティングであり，それが本会議においてもよく反映されていたと思う。

日米学生会議の参加者とはいえ元をただせばこの会議の名が示すように学生であり，参加者のそれぞれが学業，就職活動，大学院入試，クラブ活動，アルバイト等，時間を割かなくてはならない事を抱えており，又遠方から四谷に毎回通わなくてはならない参加者もいて，皆時間のやりくりに苦労しながら定例会に集まってきた。本会議までの2ケ月半という短い期間の中，とにかくできるだけ多くくの資料を集め，それを発表できる形にしてアメリカに出発するというのが理想ではあったが，やはり資料は多く集まり，それらについてのディスカッションはできても，実際の会議でそれをどのような形で発表するのかというところまでは到らず，結局，大量の資料をスーツケースにつめ渡米，本会議中にそれを形にするという結果になった。フォーラムやコロキアム等の前はその担当になっている者が徹夜して準備する姿がよく見られた。

定例会はその本会議自体の準備という目的もさることながら，参加者にお互いをよく知る機会を与えるという意味もあった。定例会





の決められた時間の中ではすべての予定を消化しきれず，5時以降は四谷近辺の喫茶店で定例会の続きをすることもしばしばだった。時にはコーヒーをビールに変え，夜中まで準備をしたこともあった。議論を通してその人の意外な一面を知るということもたびたびあった。会議が終わってそれぞれが多くの知識と経験，たくさんの想い出を胸に刻んだけれども，本会議の準備期間である定例会でも，本会議という一つの目標に向かい，みんなが力を合わせて協力した。準備を進めていくという中には，確かにすべてを投げ出したくなるほどの多くのやらなくてはならないことからの重圧やいらだちなどもあったが，それを乗り越えたからこそ，本会議と同じくらいの想い出をみんなが得たのだと思う。

最後に，定例会をスムーズに進めるため，多くの努力をし，又，新参加者の大きな助けとなってくれた第40回JASCの実行委員のみんなに感謝し，そしてすべての参加者にごくろうさまといって報告を終わりたい。

（渡辺幸一郎）

準備期間～関西編～

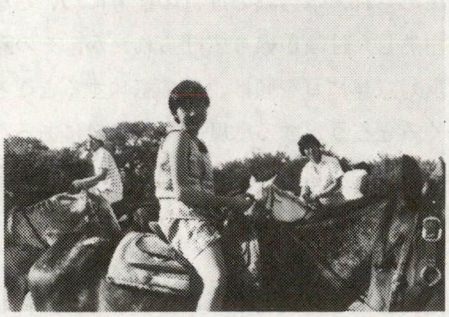
私が実際に自分をJASCerとして意識する様になったのは5月に行われた全体合宿からだ。この時初めて，これから一緒にやっていく40名のJASCer達と顔を合わせたのだが，自己紹介の時から人材の多様さにショックを受けた。第2のショックは40回の実行委員の前年の夏から春までの活動報告を読んだ時で，この時初めて，ＪＡＳＣは学生によって運営されている，という言葉の意味を理解した。実際に参加費から選考のやり方を実行委員が決定していく様子がわかり，本当に毎年ゼロから創り上げられるのだという事を実感した。第3のショックは空き時間の雑談から引き起こされた。それまで安穏と暮らしてきた私は，国際情勢から笑いの文化に至るまで皆の知識の広さ，考えの深さに唯々圧倒されるばかりであった。また各フォーラムの係も決められ，本会議の進行の仕方についてなど白熱した討論が繰り広げられたが，その際に反対意見に耳を傾け，その意味するところをくみとろうとする態度が殆ど全員にあることに気付いた。この態度が互いの信頼関係を築き，意義ある本会議を作る土台となるのだろう，と思った。

定例会は5月14日から本会議まで10回行われた。関西ではまず定例会を始める前に，その時最も話し合わなければならない事をリストアップしてから話し合いを進めた。東京と

の情報交換の困難さのため思うように会が進まず，あせる場面もあったが，全体としてはなごやかな雰囲気の中で活発な話し合いで，私個人としては満足のいくものだった。自由討論は原則として英語で行うことになっていた。内容は，人権，核抑止論の脆弱性，安保問題，平和とは何か，自衛官合祀，なぜ原爆が落とされたのか，などの問題に関しての全くの自由意志によるプレゼンテーションの後討論を行った。また本会議に入ってしまう前にぜひ40回日米学生会議の意義を話し合う必要があるという事で，40回参加者としてＪＡＳＣに何を求めるか，社会に還元すると言っても何が出来るか，どうすべきか，という事も話し合われた。実際ＪＡＳＣの活動というものは社会の理解なしには成立しないものなので，社会への還元というのは大きな課題だと思った。そういった事をＪＡＳＣの歴史をふまえて考える為にＯＢの方々に集まって頂き話し合う機会が設けられた。炎天下でのジャパンナイトの練習，英文レポートの締め切りに追われた事など，書けばきりのない苦労だったが，今は充実した思い出となっている。

そして最後は，やる，やらないの物議をかもし，やっとのことで実現した直前合宿，全体合宿以来３カ月振りに関東と長崎のＪＡＳＣer達と再会した時の嬉しさはとても口では言い表わせないものだった。そこで最後の詰めをしていよいよアメリカへ……。

（三岡朋子）



エッセイ

IT'S ALL RIGHT

岡田　治

出発の前夜，壮行会の席で参加者が抱負を一言ずつ述べる機会があった。半数の者が言い終え，僕の順番が回って来た。

「今年は実行委員として参加し，会議の嫌な面もたくさん見ると思いますが，なおかつ帰国した後，会議が好きだと言えたら良いなと思っています。」

前回の会議は僕にとって人生最良の時だった。一週目こそ暗中模索の毎日だったが，ふとした事で感触をつかんだ後は，精力的に，しかものびのびと会議に参加した。過去にあれだけ自由に振舞えた時があっただろうかと思う。僕は僕自身を生きていた。真に心の欲するほとんどそのままを行動に移す事ができた。39回の会議中，特にやり残した事は今でもあまり見当たらない。

一転して，40回の会議が迷いと混乱に満ちたものになることは，会議が始まる2か月以上前から，直感的に分かっていた。果たしてその通りになった。しかも，会議が進むに連れてその度合いは増した。いろいろな所で板挟みとなり，自分の言動に自信が全く無くなった。実行委員のくせに右往左往した。ために，周りにはひどく迷惑をかけた。

しかし，なぜか他の参加者の様子は，よく目に入った。前回は周辺の10人がやっとだったけれど，今回は，少なくともその3倍は視野の中にあったと思う。特に自分達で選んだ日本側の新参加者はよく見えた。目を見るだけで，彼が落込んでいるのが分かる。だが，アメリカ側の実行委員との打合せの時間は迫っている。それに，こちらにも精神的な余裕はない。僕は彼と話し込むこともなく，一声かけただけで約束の場所に向かった。

中間反省会では，痛い様な言葉がいくつも飛交った。自分を欺くことのできない正直な人ほど，苦しさや悔しさがほとばしるように口をつく。ここでも，また別の所でも，話しているうちに涙してしまった人がいた。

〝When I speak in English, I am foolish than a child . . .〟 でも，彼等は圧倒的に素敵だった。物事を正面から見据え，自分の弱さを知り，人の弱さを知る。その時はブザマかも知れないが，人が自分を偽らず，生身で悩み，考える姿に勝るものはないので

はないかと，僕は，今，思う。

ようやく長かった会議の最終日が訪れた。僕は自分と会議に失望して帰国した。やり残した事は数知れず，また，悩んだ人に劣らず，安直に感動している人がいるようにも思えた。僕は疲れていた。5日間，毎日10時間横になってもまだ体がだるかった。あの忌わしい1か月を早く忘れたかった。と，同時にそこにしかすがるものがないような気もしていた。

秋になった。夏に言えなかった分を取返すべく，僅かではあるが，手紙を書き，人と会った。ある日，僕はすでに会議は終わっているのに，幾人かとは付合いが続いていることに今さらのように気付いた。前の夏は「会議」に感動したのだが，その会議は「人」が集まってできている事を，その時僕は深く理解した。10月に合宿見舞に行き，新実行委員の顔を見た僕は，ただ彼等が実行委員であるということだけで，彼等一人一人に言いようのない愛情を感じている自分を発見して驚いた。それまで，そんな気持ちを抱いたことは一度もなかった。

さて，果たして僕はこの会議が好きなのだろうか。それとも……。

オサム君，どうなんですか？

「きっとさ，どっちでもいいんだよ。そんなこと。」

私にとってのJASC

長谷川智可

第40回ＪＡＳＣ（日米学生会議）を終えて直後は，自分がまっ白になり，脱け殻になったような気がした。体の中の熱が残らず出尽くしてしまって，しばらくはもうＪＡＳＣのことも，何も，考えたくない，考える力がない，そんな状態だった。2ケ月が過ぎ，3ケ月が過ぎた。空っぽだった体の中に，また少しづつエネルギーがたまっていくのを感じていた。そして今，ＪＡＳＣを思う時，私をとらえるのは，「あの時何故もっとああしなかったのか……′」という，時には耐え難い程の後悔であったり，またある時はもっと隠やかな懐しさであったりする。ＪＡＳＣとは私にとって何だったのだろう？　まだはっきりとは言えない段階だが，ＪＡＳＣがなければ今の私はもっと違った人間になっていただろうことは確かだ。

私にとってのＪＡＳＣ，といっても一口には言えない。私が参加した39回と40回は，私にとって全くといっていい程違うものだった

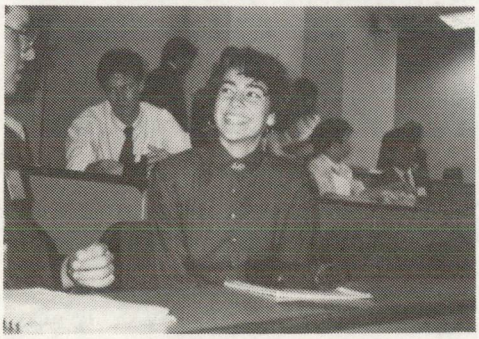
からだ。39回のＪＡＳＣは私にとって不完全燃焼だった。これは大部分，私自身のせいなのだが。決められた責任はそれなりに果たしたと思う。あれ程望んで参加した初めてのＪＡＳＣだった。しかし私はいつも及び腰だった。恐かったからだろうか。

私は，一見社交家にみえるらしいが，実は案外人とつき合うのは下手だった。「殻にとじこもる」とはよく言ったもので，外側は一見するとツルツルなのに，実は固くてなかなか割れない。人となじむのに時間がかかるので，気づかぬ内に自分にとってなるべく居心地のよい，安全な場を選ぶようになっていた。新しいもの，異質なものを遠ざけることでバランスを保つような所があった。私は結局，39回ではこの殻を破れなかったのだろう。そんな私がＪＥＣ（実行委員）になろうと決意したのは，自分とＪＡＳＣとの出会いをこれで終わらせたくなかったからだ。殻の中で，ＪＡＳＣを求める声がしたからだった。そして幸運にも，場が与えられた。

新参加者の選考は私に変化をもたらした最初の経験だった。選考，及びその方法の是非は別として，全く個人的なところから言わせて頂くなら，私はこの経験に本当に感謝している。10人という限られた目ではあったが，人間とは，見方によっていかに輝くものかを学んだ。世の中には，私の気づかないところで素晴らしいものが沢山存在する。構えずに心を開けば見つかるものが多くある，と知った。

40回のＪＡＳＣは，大げさかもしれないが，私にとっては大冒険だった。どんな会議になるのか，見当もつかず不安だった。出発の日は期末テストの翌日で，数日間の徹夜明け。ふらふらしながら乗った，ダラス行きの飛行機の上で考えたこと――。あらかじめ決められたプログラムを，きれいに消化するためでなく，他からの期待に応えるためでなく，後で人に土産話をするためでなく，自分の好きなこと，大切に思えるものに出会うために，この会議を使おう，と決めた。傷つき，時に傷つけることを恐れずに，色々なものに心を開いてみよう。何がどうなっているのか，自分から確かめに行こう。自分の気持ちに正直であろう。未熟で，片寄ったやり方であったと反省もする。夢中であったり，無謀であったり，無知であったり、無神経であったり，無責任であったりした。でも，かつてあれ程までに，自分から，他人に拘わろうとしたことは，私にはなかった。失ったものもあったが，ああせずには決して得られなかったものもきっとあった。

ＪＡＳＣが終わり，元の生活に戻った時，



私はとまどった。「ＪＡＳＣで自分が変わったといっても，所詮それは現実離れした，温室での出来事だ。外の世界では同じことは通用しないのだ」ということを思い知らされた。現実はいや応なく，元の自分に押し戻そうとするかのようだ。私はおちこんだ。ＪＡＳＣは夢だったのだろうか……。

でも気がつくと，私の手許には小さな，でも確かな，自分への自信と，私が拘わった仲間，が残っていた。ＪＡＳＣは夢ではなかったのだ。それらを持って，次に私が向かっているのはどこだろう，と思う。まだわからずにいる。行きづまっていても，写真の中のＪＡＳＣをながめていると，〝きっと出来る〟と思えてくるから不思議だ。ＪＡＳＣは，現実に挑戦する私達のビタミン剤なのだ。

勝手なことを書き連ね，恥ずかしいが，最後に，私にＪＡＳＣを与えてくれた39回のメンバー，そして私を受け入れてくれた40回の仲間達，親愛なるＪＥＣの皆に，心から，ありがとう。

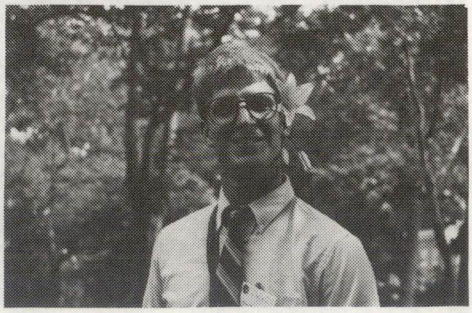
Me and My JASC

新田陽子

書きかけてはやめ，ボツにし，こうして紙に向かうのは何度目のことだろう。１年間，ＪＡＳＣ（日米学生会議）を主軸に回った日々にピリオドを打つ意味もこめて，書きたい気持ちは募るのに，どこから書いていいのかわからない。書きたい事は山のようにありそうなのに，手をのばすと逃げていってしまう。「ＪＡＳＣ」についてきちんと語れる日は，まだ少し先のことだろう。したがってこれは，思いの馳せるままに書いた，私のＪＡＳＣぐちゃぐちゃ記である。

私の大学生活はＪＡＳＣと共に始まった。1987年4月，入ったばかりの大学で，何が何だかわからないままウロウロしている時に，第39回日米学生会議合格通知なるものを受けとった。すぐに開かれた全体合宿，毎土曜の定例会。春から夏へ季節は瞬く間に過ぎ，やがて会議が始まった。

今振り返ってみると，やや早過ぎた感はあるにせよ，ＪＡＳＣとの出会いは恵まれたものだったと思う。私にとって学生生活は，最初から全国様々な大学からあつまった人間によって構成される多面体であり，ひとつ所にとどまることはなかった。先輩・後輩の区別なく，幅広い年齢層の学生達の中で，ごく当然のように名前で呼びあっていた。知識の無さや幼さを必死で隠して背伸びしていた自分は，見苦しかったし，しんどかったけれど，眼前の世界は新鮮な魅力に溢れていた。東京，



和歌山，京都，長崎と未知に等しい場所へ移動しながら行なわれた会議が終わりに近づくと,「これが終っちゃうの，イヤだ！」という至極単純な理由（あとから色々くっつけたが何といってもメインはこれ）で，私は40回の実行委員になった。

正直言って1年間のＪＥＣ（実行委員）生活は与えられっぱなしの日々で，自分から寄与したものなど無に等しいのではないかと思う。「皆で力を合わせて一生懸命やって，充実感みなぎってます！」とか清々しく書ければ幸せだけど，実際は目の前の仕事を片づけていくことに追われ，全体を見わたす視点に欠けていた。隣の芝生は何とやらで，大学での面白そうに見えることや友達づきあいとバランスをとるため，いかに楽に仕事をこなすか考えていた時もあったし，知らず知らず他の委員達に甘え，できない事への言い訳をつくっていた時もあった。考えると，全く自分に頭のくることばかりだ。自分の情けなさ，弱さを見せつけられた日々だった。

そして，ようようたどりついた新参加者の選考，全体合宿。合宿地に1人また1人新しいＪＡＳＣerがやって来るのを見て，涙が溢れそうになったのを鮮やかに覚えている。ここ迄，会議を共に創ってきた委員達にも限りない愛着を感じた。

すべてが人間の渦の中に巻き込まれていた。1年を通して見たのは，学んだのは，ＪＡＳＣという絆につながれて私のまわりにいた何十人もの人達の姿だった。これほど人と深く関って，人にもまれて暮らした1年はなかった。嫌でもその中で生きるうちに，色々な事が見えてきた。気のせいかもしれないが…人間について前より深く考えるようになった。言葉と気持ちの間の距離の遠さや，一つや二つの切り口では判断できない人間性の奥行きに気づくようになった。総じて言えば，いかに人間が面白く，哀しく，かつ愛すべき生き物であるかをおしえてもらったのかもしれない。そしてそれは，ＪＡＳＣのもたらしてくれた，私にとって最も貴重な財産なのかもしれない。

今年のＪＡＳＣが終って日本へ帰ってきてから，私は長いことわけのわからない不安に苛まれていた。夏の体験は新たに様々の問いを投げかけ，押しよせてくるいろんな考え，これからの自分について―等々，どうすればいいのかわからないことが多すぎて，パニックしていた。暗ぁく，学校にも行かず，うろちょろしていた。

「いろんなことを一度に考えると，頭がプ

ッツンしてしまう。」いちいち思いつめがちな自分に気づいて，私は今，考えを小出しにしながら，なるべく行動も伴うようにしてソロソロ歩いている。ＪＡＳＣも段々遠くなって（これも若さというものだろうか？？），残るのは今は懐しい想い出ばかりだ。そして，育まれた友情。心と心が，ほんのたまにでも触れあって，まっすぐ話せる人達を発見する喜びは今も続いている。大切にしたい人達がいる。ＪＡＳＣは過去になっても，もらったものは大事に温めてゆきたい。そう思う。

ＪＡＳＣはきっかけに過ぎないと思う。国際親善や相互理解といった理念もさることながら，誰にも共通して云えるのは，長い人生の中でひょんなことからめぐり逢ったひとつの機会だということだ。だから，ＪＡＳＣはこうあるべきという形に縛られる必要もないし，人によってとりどりの色に彩られるＪＡＳＣでいい。

「たかがＪＡＳＣ，されどＪＡＳＣ。」

私がＪＡＳＣに入った時の実行委員に聞いた言葉が胸に響く。ＪＡＳＣの持つ可能性と限界を両方見すえながら，各々にとってのＪＡＳＣを考えていけばいい。

最高！と手放しで言える１年ではなかった。喜怒哀楽でいうと，真中の二つが他より勝っていたかもしれない。それでも，やっぱり続けてほしい。沢山の矛盾を抱えながらも，ＪＡＳＣはそこにいてほしい。

だから。次の会議を支える実行委員達を始めとする，これからの数限りないJASCersへ心からの励ましと思いをこめて――。

Thanks，JASC！

早すぎた朝

鈴木康弘

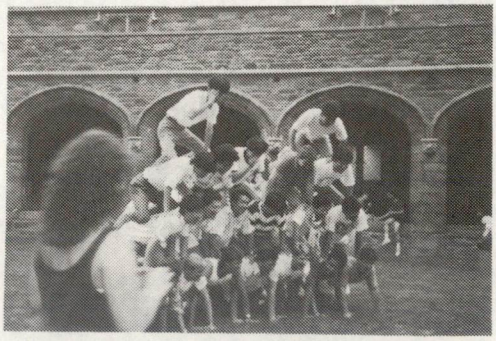
その日の朝はあまりに唐突に，そしてすばやく訪れた。

一週間程前から感じはじめていた，その瞬間への不安，同時に，その日までに経過した道程を振り返り，その瞬間の訪れは，ずっと先のことだと自分に言い聞かせて感じた，かすかな安心感。

そう，その瞬間の事は，ＪＡＳＣが始まる時からもわかっていた。しかし，あまりにも楽しい日々が過ぎていくうちに，いつの間にか，その日がゆっくりとかすかに訪れると信じこんでしまっていた。

だのに，別れの瞬間はあまりにも突然に出現した。理屈も原因もなく突然に犯人がわれてしまう三流の推理小説のように。

ちょうどフィラデルフィアについた日の夜から僕はいいしれぬ不安感に取りつかれていた。



友人達と共有しあった，あれ程楽しかった日々が，もう残り少なくなっているという現実が突然襲って来たからだった。フィラデルフィアに着いたその夜は，ＪＡＳＣが始まってからはじめて過ごす，エアコンのついていない大学寮でのむしあつい夜に，こりゃしばらく寝れないやと，外で夕涼みをしようとして繰り出して来たＪＡＳＣｅｒｓが何人もいた。

アンがホールの入口で座っていたので隣りに腰を下ろして，僕を襲ってきた不安について口にした。アンは「そうね」と言って，“ね”の部分で静かに笑った。笑い声はたちまちのうちに闇に吸い込まれていった。

道路に面した所ではヒサシ，アキコ，コウが地面に座りこんで色々な事を話し合っていた。ヒサシがヨーロッパ旅行の時の思い出を語っているときに，僕は話に加わった。道路にじかに座ると，昼間のうちに陽の光で暖められていた地面からは熱がジーパンを通して感じられた。

ふっと気づくと話題はいつの間にかアメリカの食文化の事に変っていて，それがいかにも心臓に悪そうな物ばかりだという様な事でヒサシと意見が一致した。隣りにはスミエが座っていて，静かに聞き耳を立てていた。

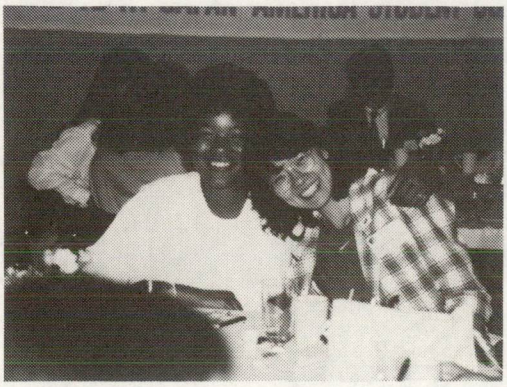
そして，寮の周りを走っているザックの荒い息が定期的に暗闇の中から聞こえてきた。周りをみわたすと僕らと同じような三〜四人のグループがいくつも出来ていて，いろいろな事を話していた。

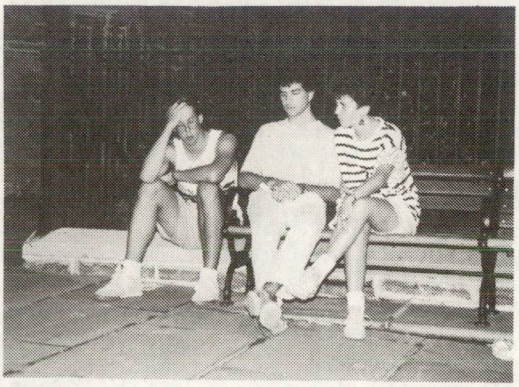
眼の前の四人をみつめたとき，皆の心が一つにつながっているのを感じた。日本だとかアメリカだとか国の違いに関係なく心が一体化しているのを感じ，この時が永久に続く様な気分になり安心した。

なのにその瞬間はわれわれを訪れてしまった。

その瞬間の事を，みんなも恐れていたのだろうか，テーラーホールでは不安を掻き消そうとするかの様に，わざとらしく大きな音でステレオが鳴り響いていた。いつもは，みな音楽に合わせて陽気に踊り出すというのに数人を除いてさすがに誰も音楽に合わせて踊ろうとしなかった。ホールの隅の方では肩を寄せ合って座り，最後の時間を静かにわかちあっている人達もいれば，友人からたのまれた寄せ書きを一生懸命書いている人がいた。明日からは今までの様に，この周りをうめつくす友人達に会えないんだ，と考えたときに，目頭が突然熱くなり，ホールのオレンジ色のライトの中に浮び上がっている人影がゆらいだ。

朝，三時近くになると，出発のため荷物のパッケージをする人，疲れて眠りに行く人が増えて，さすがにテーラーホールもがらんとして来て，スクール警察の人達の指導もあり，宴は場所をパームブロックイーストの一室に移して続





けられることとなった。

疲れきっていた僕はうとうとと微睡みながら，周りの声を耳にしていた。いつの間にか眠っていたのだろう，辺りのざわめきで目がさめた。時計をみると五時，胃がしぼられる様な気がした。出発のときだ。

まだ，朝の光がみえない，うす暗い空の下で80名の学生達は身体で友情を確かめ合った。

抱擁，抱擁，……。

手を振っているアメリカ側の学生達に見送られてバスは出発した。皆の目に涙が光っていた。

大学の建物が見えなくなって，しばらくした時に，真紅の朝日が窓からバスの中にさし込んできた。

そのとき僕は悟った，別れの瞬間がこの様にして僕等を，唐突にすばやく訪れていたのを。

さようなら，黄金に輝いていた日々，そして何よりも，僕のすばらしき友人達。

バンザイ　ＪＡＳＣ　!!

第40回日米学生会議：主催，後援，賛助団体

主　催　財団法人　国際教育振興会

後　援　外務省

国際教育交換協議会（CIEE）

日米文化センター

賛助団体・賛助者

アイビーインターナショナル	住友信託銀行	凸版印刷
旭硝子	住友スリーエム	トナミ運輸
味の素	西武百貨店	トヨタ自動車
石橋財団	全国農業協同組合中央会	トヨタ東京教育センター
伊勢丹	ソニー	ニッカウヰスキー
伊藤忠商事	大成建設	日興證券
インテック	第一勧業銀行	日産自動車
エッソ石油	第一工業製薬	日本アイ・ビー・エム
大阪ガス	台糖ファイザー	日本医師会
鹿島建設	ダイナワード	日本興業銀行
関西電力	大日本製薬	日本航空
キッコーマン	ダイハツ工業	日本証券業協会
協栄生命保険	太陽神戸銀行	日本信販
京都中央信用金庫	大和銀行	日本生命保険
京都日産自動車	大和證券	日本長期信用銀行
神戸国際交流協会	高島屋	日本電気
神戸製鋼所	武田薬品工業	野村證券
神戸日米協会	田辺製薬	阪急百貨店
埼玉銀行	中外製薬	富士火災海上保険
サイマル・インターナショナル	中部電力	富士銀行
三共アルミ	デュポン・ジャパン・リミテッド	藤沢薬品工業
三洋証券	電通	本田技研工業
三洋電機	東京海上火災保険	前田薬品工業
三和銀行	東京急行電鉄	松下電器産業
ジャパンタイムス	東京銀行	松下電工
信託協会	東京電力	マツダ
新日本製鐵	陶好堂	丸紅
住友銀行	東芝	御影貿易商事
住友商事	東燃石油化学	三井銀行

三井不動産
三井物産
三菱銀行
三菱地所
三菱重工業
三菱商事
三菱信託銀行
宮澤喜一
山勝真珠
山室勇臣
雪印乳業
横浜銀行
吉田国際教育基金
吉田正晴
リクルート
ワールド

第41回日米学生会議のお知らせ

第41回日米学生会議は1989年7月24日から8月19日までの4週間にわたり，東京・富山・京都・広島を移動して行われる予定です。今回は会議の総合テーマを「変容する時代の自己と社会－相互理解への新たな一歩」（"An Era of Change－Seeking Understanding for Society and Self"）と設定しました。経済大国化した日本が国際化を叫ぶ一方，国際化するために何を具体的にしたらよいのかを簡単に論じることはできません。日米学生会議はその創設以来「相互理解」を国境を越えた友好関係の，そして世界の平和のための欠くべからざる要素であると考えてきました。会議を通じて自分なりに相互理解とはどういうものか，そして自分自身の，或いは人間社会のあるべき姿は何かを以前とは違った視点で考えていくことができればと思い，このテーマを選びました。

この会議は実行委員と新参加者の手で作り上げられるものです。会議中のプログラム，或いはそれ以外の時間でも，80人もの学生の各人各様の個性がぶつかり会うことで非常に密度の濃い体験が得られることと思います。総合テーマは一見とっつきにくい，抽象的な語句の羅列に映ることもあるかもしれません。しかし4週間の会議で，まず79名の他の参加者の名前と顔を一致させることから始まり，次第に打ち解け合ってからありとあらゆる話題を話し合っていくうちに相互理解とは，そして平和とは何かといった問題にごく自然にアプローチ出来るのではないかと考えます。

第41回会議の分科会・フォーラム・コロキアムは以下のものを予定しています。

分科会：法と政治，国際ビジネスと経済，社会変化と私達，第三世界，環境，教育，芸術と精神，若者と時代，ユートピア，人間－その思想と行動

フォーラム：平和と安全保障，人権，都市問題，貿易問題

コロキアム：Love，Religion and Personal Philosophy，Social Customs

その他外務省，アメリカ大使館への全体研修や，富山でのキャンプ，ホームスティなども予定しています。会議を共に作りあげていく熱意溢れる方の参加をお待ちしています。

第41回日米学生会議実行委員長
岸　　道信

会議の詳しい内容を記載した実施要領がありますので下記までお問い合わせ下さい。

〒160　東京都新宿区四谷1－21
財団法人　国際教育振興会内
日米学生会議事務局
電話　03-359-0563（直通）

編　集　後　記

「感動を言葉で表すのは難しい」報告書を書いてみてつくづく感じたことです。言葉で表すにはあまりにたくさんのことをこの日米学生会議で体験したのは私一人ではないでしょう。日本側参加者40人のそんな想いがぎっしりつまった報告書がようやくできあがりました。

長い日米学生会議の歴史の１ページの中で，参加者にとっては大切な思い出の品として，そして賛助していただいた皆様にとっては良き報告書として，この一冊は残っていくことと思います。

編集がなかなか進まず出来上がりが随分遅れてしまったことを編集委員一同深くおわび致します。そして最後になりましたが，この会議を援助して下さったすべての皆様に心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

（鬼頭三樹恵）

第４０回日米学年会議

－和文報告書－

編集者　足立　望
今田克司
岡田　治
鬼頭三樹恵
増田行子

題字　鬼頭三樹恵

発行　〒160 東京都新宿区四谷１－21
財団法人　国際教育振興会内
日米学生会議事務局

印刷　(株)実業公報社